

X
複写

古道神髓

友清歡眞著

上卷

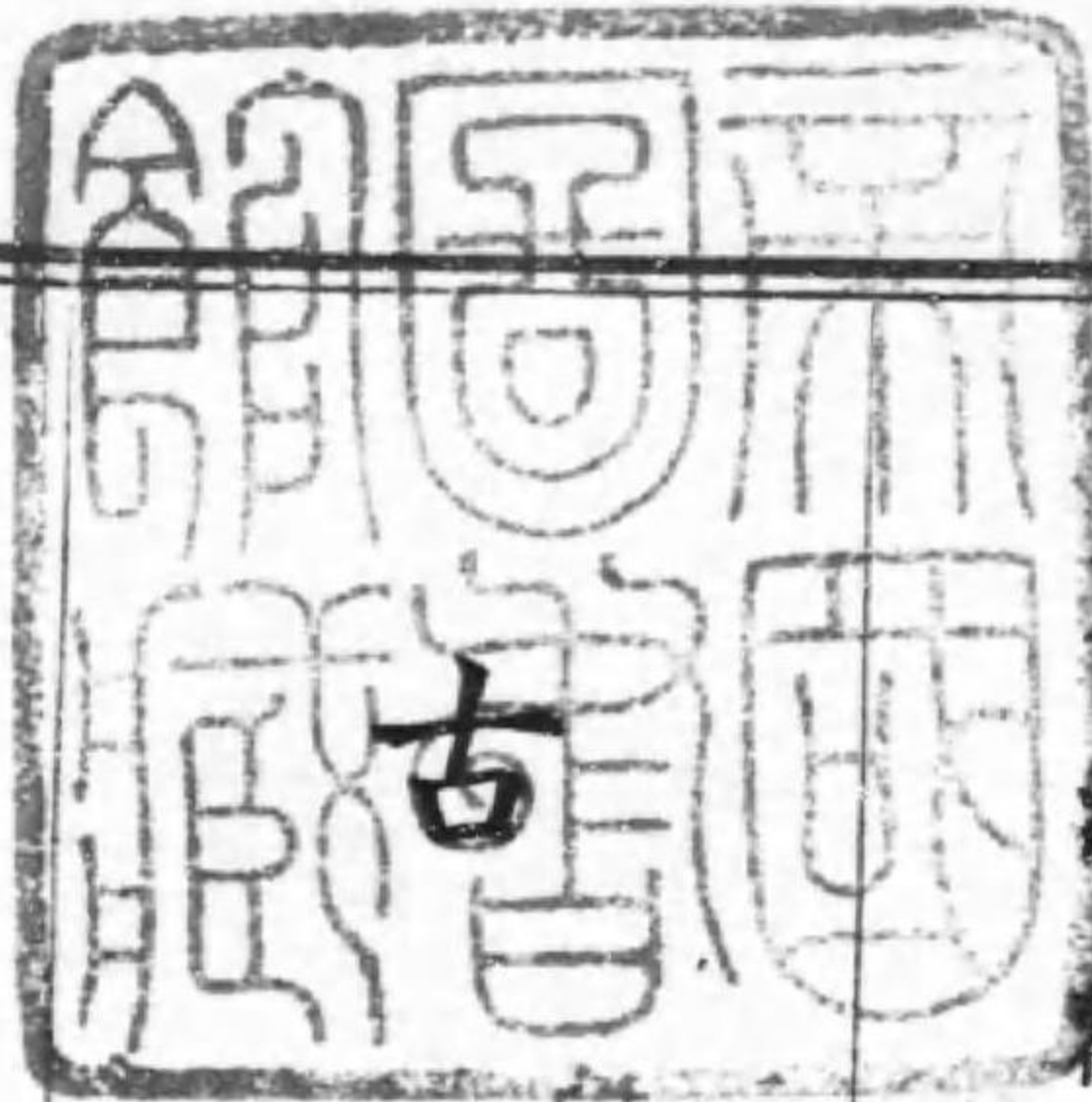
山雅房



始



埼215
878



友清歡真著

道
神
髓

卷上

東京
山
雅
房



刊 例

この書は豫言書である。古神道のレンズに映じた現世界の豫言書である。同時に豫言の證明記録でもある。この書を部分的に拾ひ讀みせられて、かくべつ豫言書らしいところもないと思はれる人々も、全巻を通讀して若干首肯せられる筈である。しかし其れだけではまだ此の書が豫言書であるといふことは承認せられにくいであらう。天行居の他の出版物と併觀せられて後、やうやくにして納得せられるかも知れぬ。とにかく今日の此の激動世界がどういふわけで世人の眼前に展開したのであるか、これからどうなるかと云ふことを靈的見地から考へさせるやうに構成してある筈である。

この書は棋譜である。神仙界の祕區たる石城山の近年の棋譜を集めたものである。棋譜の性質として有りのまゝの記録であり、改竄を許されないもので、著者としては少々都合の悪い點もあるが、その折その折に「古道」紙上に發表されて居るものであり、今更らどうにも手のつけやうのないものである。この石は斯う打つべきであつた

と今日になつて氣がついても、もう駄目で、恥の記録は永久に恥の記録にしておかない。

この書の中には其の時その時の、いろ／＼の問題が断片的に取扱はれて居て、全卷を通じての纏つた體裁はない。つとめて神道的な色彩を避けて書いたつもりではあるが、素性は争へないもので、どこかに『神道的なもの』があらはれて居るであらう。それは私に充分に物ごとを言ひこなし書きこなす腕がないからである。この書を『古道神髓』と題したことも、妥當とは考へないし、僭越とも思ふけれども、出版部の御意見にまかせておいたまでのことである。

この書の編修校訂校正などには鴨居幹事が格別なる勞苦を負はれた。又この書の總ての計畫から造本の工夫に至るまで木藤出版部長に非常の御心配をかけた。つゝしんで謝意を表す。

昭和十四年六月末、磐門南軒梅雨けふる處に於て

著者

陳人陳語

磐山

一、宗教は宗教也。科學に非ず。科學的要求に對し科學的證明の出來難きものは眞正の宗教に非ずと言はゞ世の宗教なるものあること無し。

二、宗教には神祕的方面あり、道德的方面あり、哲學的方面あり、科學的方面あり。

宗教に科學無しと言ふに非ず。誤り解する勿れ。

三、キリスト教の創世記、處女受胎、死刑者復活、天國地獄、審判、キリスト再臨說等科學的に完全に證明不能とするも宗教として妨無し。佛教の地獄極樂、華藏世界說、四有說等亦然り。宗教は宗教也。科學に非ず。

四、科學ありて宗教無きは赤色露西亞の思想也。

五、歐米心靈科學は各方面學界權威諸名士等幾十年間幾百千回にわたり嚴重なる科學的實驗により、人間死後の生活、靈魂物質化等の諸事實を科學的に實證し居れ

り。然れ共其の實驗には尙其の場合の状態に若干の條件無き能はず。光線、立會者の態度等は成績に影響す。白晝裁判所の法廷等に於て完全なる實驗實證を求むるは求むる者の妄也。心靈科學にして然り。宗教は心靈科學を超越す。

六、我等信奉する所の古神道は嚴密に云へば所謂宗教を超越せるもの也。即ち神ながらの大道にして先輩及我等が古道と稱する所以也。然れ共之を宗教と云ふも妨無し。殊に我國家現行法制に於て我等の團體も宗教團體に屬するものたるや勿論也。すでに然る以上團體として國家の規則する所を遵守し、若し何等か事務的に規則に牴觸する所あらんには此れを發見次第適法に修正すべきは當然也。これが爲め我等の信仰及信仰に伴ふ行程に何等の煩累あること無し。我等の信仰的氣魄に何等の影響あること無し。

七、古神道の根本は祭祀神事也。祭祀神事の根元は太古神法也、太古神法は中世以來殆ど埋没し絶えざる縷の如くして天運循環沖楠五郎先生を経て我等之を守護捧持するに至る。

八、高天原は神道教義の本づく所也。高天原は何處に在りや。種々の茫々たる天文學的假説、種々の海外説、國內説、或ひは帝都の代名詞とし、或ひは心中に在りと云ふ哲學的考證等は今姑らく言はず。現實に神々の神づまります高天原の意味に於ける大神境の實在、其の山河宮殿の位置名稱等まで具體的に明白に我等の信仰の目標となるべき驚くべき福音を地上に宣布し得る天行居の存在は、唯物史觀思想に眩惑せる徒輩の最も嫌忌する所たり。

九、日本臣民は安寧秩序を妨げず及臣民たるの義務に背かざる限に於て信教の自由を有すとは帝國憲法第二十八條に規定しある所にして、即ち安寧秩序を妨げざる宗教、臣民たるの義務に背かざる宗教の存立は憲法によりて保障され居るものにて科學的證明と云ふ一部閑人の閑遊戯とは何等交渉無きもの也。そこはかとなき心理學を賣講する二三偏見の徒にして、科學的證明云々の問題を以て宗教の是非曲直を論じ信教の自由を妨害せんとする者もありと仄聞したるが、是れ草木にして言ふもの也。明治天皇の大御心に出でたる欽定憲法の大精神に背叛せる言動を

爲す者あらば其の何者たるを問はず亂臣賊子を以て目すべき也。

(四)

十、科學は驚異的に進歩しつゝあり。而して科學の精粹とも申すべき今日の醫學は多くの病患を救ふ能はず。科學的理論と設備に遺憾無き今日の天氣豫報も不的中のもの多し。然れ共我等は科學を信賴し科學を尊敬す。同時に科學以外のものも雖も信すべきものは之を信じ、敬すべきものは之を敬す。我大日本帝國の國體は上古以來 神皇奉戴を根本とするものにして儼然として今日に至り、其の思想は明かに神祕的、宗教的にして科學を超越せるものなること近來一方の學者等も之を道破せる所也。是れ實に我等信念の中樞にして天行居多年の出版物は之を力説して光輝ある國體思想の指標を建立したるもの也。(註。一方の學者の説とは、昨年文部省主催憲法講習會に於ける筧克彦博士の講習速記、及び加藤玄智博士の近著等を指す。)

十一、再び言ふ。科學ありて宗教無きは露西亞流の赤色思想也。

十二、國體明徴と教學の刷新とを皇國現下の喫緊事とし、此の國體明徴の爲めには

天壤無窮の神敕を攷究するほど必要なること他に無しとして、東京文理科大學教授荻原擴博士は文部省より研究補助費を受け努力三年大約其の業を終られたり。其勞眞に感謝すべし。然れ共この天祖の神敕の發せられたる高天原に就ては一言知るところを得ず。此の根本重大問題に就て我等は同胞の啓蒙運動をつゞけつゝある者也。(昭和十一年十月十六日)

(五)

古道神髓 上巻目次

神道一家言(一)

- 御題「池邊鶴」(一)……………□天行居の過去と現在(二)……………□無駄石の話(三)……………□石城山開闢後の三年間(六)□鳥飛んで鳥に似たり(九)……………□白頭山天池の神事(一〇)……………□天行居は古神道を奉ずる信仰團體なり(二二)……………□神界の實相に本づく正しい信仰(三)……………□第一回山上修法の回顧と次の大戦(四)……………□天意の發動(二五)

神道一家言(二)

- 繪の具が勿體ない(二六)……………□『大慈悲心』の落第生(二九)……………□桂月と樗牛(三〇)……………□高山樗牛の菅公論(三二)……………□菅公御歸天後の靈異談(三三)……………□阿衡問題と當時に於ける帝室財政(三四)……………□菅公の根本理想は皇國第一主義(三五)……………□菊を愛せられた菅公(三六)……………□菅公の眞蹟(三九)……………□藤原時平の器局と菅家代々の餘德(四〇)……………□「不以窮變節」菅公の眞面目(四三)……………□全國到る處の天滿宮と國民精神(四三)……………□菅公の神階と神集岳の天滿宮(四四)……………□菅公と天行居との關係(四六)

神道一家言(三)

- 山上神殿と石城島社(三九)……………□石城島靈界を訪問す(三九)……………□石城島靈界に高井氏を訪ふ(四二)……………□石城島靈界の概観(四三)……………□高井氏居住の靈界の區の概観(四四)……………□靈界に於ける高井氏の風貌と住居(四六)……………□石城島靈界出現の歴史(四七)……………□靈界に見る竹田の一軸(四八)……………□黄老人(五〇)……………□靈界の羊羹と煎茶(五〇)……………□支那服の少女は六十餘歳の老嫗(五一)……………□四季の變化日月の出没あれど晝夜の別なし(五三)……………

- 一切の不淨物は靈氣で消滅(五五)……………□洗面と入浴(五五)……………□食事のこと(五六)……………□人間界と異ならず(五七)……………□俱樂部の食堂(五七)……………□一ヶ月三十時間労働(五七)……………□靈界の夫婦生活(五八)……………□轉生幼兒の養育(五九)……………□靈界のドライブ(六〇)……………□珍らしい六重塔と八重塔と犬(六一)……………□一般の住宅(六三)……………□靈界のモガ(六三)……………□水邊の榎亭(六五)……………□歌碑とヲガタマの木(六六)……………□特殊の勞務には山の猿を雇ふ(六八)……………□前代は佛仙境か？(七〇)……………□溪谷兩岸の桃花の壯觀(七一)……………□莫愁亭記(七一)……………□圖書館と教育機關(七三)……………□經濟組織と所有意識(七三)……………□修養の目標はマコト(七四)……………□春秋二回の日本皇室奉拜式に鮮滿支出身者も參列(七五)……………□人間界も一つの靈界(七五)……………□卜部の長官と茶の先生(七九)……………□人間界的な石城島靈界(八〇)……………□幻世春來夢。浮生水上瀛(八三)……………□原稿用紙の上に靈界からの光線(八四)……………□石城島靈界訪問者より心靈學者へ(八四)……………□天行居の本領(八九)……………□地に屬する神界』の意味(九〇)……………□神仙界の理想と佛教(九一)……………□むすびの道』ますみの道』(九三)……………□氣線の閉閉(九五)……………□『洪水以後』の結縁者へ(九六)……………□苦惱艱難は愛の接吻也(九九)……………□伊勢神宮と神集岳神界(一〇〇)……………□神集岳とは高天原なり(一〇三)

神道一家言(四)

- 土佐國川村家傳來の大穴持神の禁厭の御法(一〇六)……………□水位先生へ譲られた秘辭の副本(一〇八)……………□長鹽先生の靈木探索(一〇九)……………□世の中は一切は感と應(一一)……………□世界の危機と靈的國防(一一)……………□元寇當時の全國的修法(二三)……………□第二の元寇と石城山上の大修法(二三)……………□石城山上に於ける祈天祭と修法との關係(二五)……………□神武天皇御東征の御順路(二七)……………□天劍秘帖』の一節(二八)……………□大楠公の六百年祭(二九)……………□史蹟の靈的感化力(二九)……………□吾等の所謂國難の中樞(三〇)……………□日本の生命線と日本海軍(三三)……………□ラッセルの不當な觀測(三三)……………□正氣歌』(三四)……………□修法、神事は氣合第一(三五)……………□守り刀』に就て(三三)

神道一家言(五)

- 守護神(守護靈)に就て(三三)……………□蔭介石の守護靈(三六)……………□職業的な靈媒の場合(三九)……………□或る靈媒の曰く(三九)……………□紅毛教の起源(三九)……………□守護靈説と本田先生(三三)……………□守護靈説と水位先生及び堀先生(三三)……………□眞の神通(三三)……………□守護靈説の害悪(三四)……………□惟神道の修養法(三五)……………□宿命的守護靈説の迷妄(三七)……………□御夢に現はれた坂本龍馬(三七)……………□中川宗主の場合(三九)……………□守護神の製造販賣(三九)……………□魂靈の宿る時機(四〇)……………□病氣の原因の種類別(四一)……………□山室軍平氏の場合(四三)……………□百病は氣より生ず』の意味(四三)……………□邪念、邪靈は病因か？(四四)……………□病氣は本來無いものか(四五)……………□幻藥を以て幻病を治す(四七)……………□善人病み悪人も亦病む(四八)……………□先哲、巨匠の病難(四九)……………□天理教の説教(四五)……………□音靈法の靈驗(四五)……………□實相觀に優る音靈法(二五三)……………□佛仙、正光眞人(二五四)……………□原坦山翁(二五)……………□惑病同源論(二五七)……………□坦山翁の説(二五八)……………□音靈法の行者、佐曾利清翁(二五九)……………□天行居の音靈法(二六〇)……………□絶對無害の音靈法(二六一)……………□音靈法修行の秘訣(二六一)……………□信條第十一を見よ(二六四)……………□眞澄の結靈』(二六五)……………□信條第十五(二六五)……………□祈願と應驗(二六七)……………□「ますみのむすび」(二六六)……………□妄想心依然、煩惱識依然(二七)……………□自照居士の「眞宗滅却論」(二七)……………□日々小善を積むこと(二七三)

神道一家言(六)

- 天行居同志の人々(二七四)……………□小野温翁(二七四)……………□杉森暢男氏(二七五)……………□堀内秋布氏(二七六)……………□「ますみのむすび」(二七八)……………□古事記首章の大神言(二七九)……………□古事記偽書説に就て(二八〇)……………□太古神法の秘事相傳(二八二)……………□古事記首章の記事と「ますみのむすび」の神理(二八三)……………□神道は「むすび」の道(二八四)

神道一家言(七)

- 將來の人間の世界(二八五)……□ 天之御中主神の大神徳(二八六)……□ 「神たる我れ」の大白覺(二八八)……□ 山上修法の目的と國本明徴(二九〇)……□ 天關打開促進と同志の覺悟(二九二)……□ 忍の威力(二九三)……□ 忍想と破邪顯正(二九五)……□ 天上將來の神教(二九六)……□ 「靈光獨耀迥絕根塵」(二九七)……□ 大機中の正念場(二九八)……□ 「ふるることふみ」(三〇〇)
- 天關打開の意義(三〇一)……□ アインスタイン博士の日本觀(三〇三)……□ 白人勢力の危機(三〇四)……□ 大機は何時くる乎(三〇五)……□ 必然的な世界大動亂(三〇七)……□ 我れに待つあるを待む(三〇七)……□ 「何も彼も天の時」(三〇九)……□ 天池に鎮齋の神儀(三一〇)……□ 七月三十日に神事執行(三一三)……□ 白頭山天池の神府と石城山の神府(三一三)……□ 豐受姫神の愛の御神徳(三一三)……□ 靈的國防の效果の意義(三四)……□ 神界と現界との交渉(三六)……□ 靈界の靈氣波動の振動數(三七)……□ 信仰は純眞なるべし(三九)……□ 荒井大人の信念(三〇)……□ 宇波奈利社の古式神事(三二)……□ トロッキの豫言(三三)……□ 大本教の不敬思想と司法權の發動(三三)

神道一家言(八)

- 散る櫻残る櫻も散る櫻(三五)……□ 古神道より見たる佛教と基督教(三六)……□ 淨土眞宗(三七)……□ 河
- 慧海師の各宗論評(三八)……□ 極樂往生の方法(三九)……□ 唯心の淨土、己身の彌陀(三九)……□ 天台宗(三九)……□ 眞言宗(三九)……□ 禪宗(三九)……□ 禪宗の傳燈の證(三四)……□ 禪宗の授戒と引導(三六)……□ 佛教の『空』の意味(三七)……□ 師家を戦慄せしめた匿名の居士(三八)……□ 馬の熊膽問答(三九)……□ 結局禪の要旨如何(四〇)……□ 古神道と禪との神祇觀(四四)……□ 佛教と國體(四四)……□ 淺間山に於ける名僧の除罪式(四四)……□ 佛説の虛妄(四五)……□ 正像末の説(四五)……□ キリスト教(四七)……□ 磯原古文書(四七)

神道一家言(九)

- 聖書の内容(四八)……□ ヨハネ黙示録(四五)……□ 靈魂に關するキリスト教の誤謬説(五一)……□ 宗通と説通(五三)……□ 神道に於ける修養の理想(五三)……□ 天行居の出現存在の意義の中樞(五五)……□ 人の臨終の場合に就て(五七)……□ 靈界居住者の轉住問題(五八)……□ 富士山及び淡海の神事(五九)……□ 神事参加者の心得(六〇)……□ 天行居の修齋會(六一)……□ 所謂靈感靈能に就て(六三)……□ 山上の天啓について(六三)

神道一家言(十)

- 宗教の正邪(三九)……□ 既成宗教の現状(三九)……□ 最近の類似宗教(三七)……□ 靈魂と歸神と憑靈作用(三三)……□ 天行居同志の法悦(三七)……□ 靈界の内閣製造業者(三七)……□ 製造宗教は死物なり(三四)……□ 實相觀はますみ觀なり(三五)……□ 南泉指花の話(三六)……□ 佛も亦た是れ塵なり(三七九)……□ 内外古今の美談は道心の表現なり(六一)……□ 枇杷仲平の無私誠心(三六)……□ 吉田大膳大夫の廉潔(三六三)……□ 來世の爲めの修善積徳(三三)……□ 動機と實行とに價値の區別なし(三五)……□ 修善積徳の眞の快感(三六)……□ 不破民部の話(三九)……□ 齋僧、月僊の話(三七七)……□ 鼠賊を化した山樵の妻(三八八)……□ 偉大なる無言の感化(三九〇)……□ 調子に乗り過ぎる勿れ(三九二)……□ 地獄を見て來た細君の話(三九三)……□ 神事、祭典、參列者の心得(三九)……□ 太美官司の述懐(三九四)……□ 鹽而不薦有孚順若(三九四)……□ 囚はれたる心外無別法(三九五)……□ 南隱和尚の訓誡(三九六)……□ 數靈の神應について(三九六)……□ 神佑也者誠心之反應(三九七)……□ 白馬岳社御鎮座滿九年(三九九)……□ 今年の山上修法(三九九)……□ オリンピック大會に關聯して(三〇〇)
- 國際問題に對する天行居同志の常議(三〇三)……□ 支那の國民性と近年の支那(三〇四)……□ 支那人の政治的能力(三〇六)……□ 支那人と共產主義(三〇七)……□ 日獨防共協定の世界的影響如何(三〇八)……□ 英露對獨伊

の關係(三〇九)……□日、英、米の關係(三〇九)……□コンミニズムとファツシズム(三二〇)……□ジイドのツ
 ヴェート觀(三二一)……□モスクワのテロ陰謀事件(三三三)……□各國のスパイ戰(三三三)……□明石將軍とレ
 ニン(三四四)……□蘇聯の思想侵略政策(三五五)……□蘇聯の極東兵力(三五六)……□米國海軍の充實と日本(三七七)
 □所謂「制先戰術」(三二〇)……□實力の對抗によつて維持される平和(三二九)……□白人の正義觀の實體(三三〇)
 □日露開戦前後の回顧(三三二)……□日露戰爭は神界經綸の發動なり(三三三)……□靈的國防の任愈々重大
 (三三三)……□ボカされたる赤化思想(三四四)……□神軍の改編問題(三四五)……□神ながらなる調和的統制の大精
 神(三四六)……□哲學的眞理と神界の實相(三四七)……□今日の國防、外交等について(三四八)……□今後十年間
 は世界大機の正念場也(三四八)……□日本の天定國運(三四九)……□神武不殺の國風(三四九)……□日本のファツ
 ショ化問題と古神道(三五一)……□不戰の爲めの積極強硬(三五一)……□戰爭直接の慘禍(三五一)……□我國の經
 濟實力(三五一)……□日本政府及び軍部の苦心(三四四)……□國民は當局を信頼して國論を統一すべし(三五五)

神道一家言(七)

□天下者天皇之天下而非天下之天下(三五七)……□帝國憲法の根本精神(三三〇)……□憲法第一條の大權(三三〇)
 □機關説は我が國體に背反す(三四〇)……□我國の立憲政治は天意の降下也(三四一)……□帝國議會は民權伸
 張機關に非ず(三四三)……□輿論は公論に非ず(三四三)……□伊藤公、桂公を今日あらしめば(三四四)……□近來
 の政變と西園寺公の奏薦(三四五)……□非常時と議會政治(三四四)……□「數」の政治は天意干犯也(三四七)……
 □各國の獨裁態勢と日本(三四八)……□國家の起源に對する學者の錯覺(三四八)……□國體明微問題と我等の
 啓蒙運動(三四九)……□穩健中正なる古道信念(三五〇)……□羽織の袖口の火を採み消した瞬間眼前に現はれ
 た大山火事の光景(三五〇)……□遠感通神法(三五三)……□顯の靈感と幽の靈感(三五三)……□最悪の場合の靈的
 用意(三五四)……□石城山道場開設滿九年(三五五)……□氣のつかない神徳(三五六)……□小信未孚神弗福也

(三五七)……□「結靈の時」記念日に近衛公に大命降下(三五九)……□國內の相剋摩擦の緩和(三五九)……□政黨主
 義の凋落(三六〇)……□日本政治の最高指標(三六〇)

大畜の決算期

□明治天皇の御上天と世界の動き(三六三)……□大畜の大機(三六四)……□易の本質(三五五)……□大畜の
 前節十二年間の世界(三六五)……□日獨防共協定の成立(三六六)……□大畜三十六年間が世界の大機(三六六)……
 □防空訓練の成績と實戰(三六八)……□山上神殿十年祭の意義(三六八)……□利涉大川(三六九)……□大畜を先方
 より觀れば如何(三七〇)……□大畜の八卦中に包藏せらるる明日の世界(三七四)……□大畜は防止防禦を本義
 とす(三七三)……□大畜最後の大機(三七四)……□敬神觀念と思想問題(三七四)……□諸葛亮廻文詩の豫言(三七五)
 □利涉大川と燃料問題(三七七)……□支那問題と陰險なる英國の策動(三七七)……□來るべき戰爭の規模と戰
 術(三七九)……□戰爭といふもの(三八〇)……□易を借りて天意を語る(三八一)……□君子に三畏あり(三八二)

一筆啓上

寒沙奔火

古道神髓上卷目次畢

古道神髓

卷上

友清歡眞

一家言 (一)



御題
池邊鶴

今年の御題は「池邊鶴」と仰せ出された。いかにも美はしく清々しくめでたき感じが地上のみずみまでも行き渡つたやうに少くとも日本國民の大部分に大きな印象が與へられた。毎年のことではあるが勅題と日本國民の心境には深く大きく強い關係があることがしみるゝと感じられる。私のやうな武者骨は直ちに又た太平洋や日本海を池のやうに眺めるやうな氣がして風雅の君子から叱られさうだが、風流のたしなみ無き私共とても日本國民の一員として年毎に御題を賜ふことを如何に有りかたく光榮に感ずることか、御題は詠進を致さるゝ人たちにのみ賜はつたものではない。少くとも日本國民全員に賜はつたものである。これを思つて吾等民草は年毎に感激を新たにする光榮を有するものである。歌の出来ない人は池邊鶴の三字だけでも淨書題壁して祝酒を

汲むべきであらう。三年前來廢酒せる私も謹んで猪口に三分の一位を頂戴することにして居る。

X X X

池邊鶴について思ひ出したが、わが天行居の基礎工作たる著述類の出版は大正八九年頃静岡の池鶴堂でやらせた。それから屈指すれば早くも十六星霜を經過して居る。實に南柯の一夢の如く多少の感慨無きを得ぬ。

その頃から石城山びらきの昭和三年までの間約八九年の間を天行居では山の芋時代と云つて居る。ちかごろの新しい同志諸君の中の一部の人たちは山の芋時代からの同志を何となく輕んじて見て居らるゝやうであるが、それは以ての外のことである。いつも申す通り同志に新舊の區別はなく、みな神祇の前に均等の機會に立てるもので、新しきが故に尊からず古きが故に尊からず、たゞ其人の信念の如何によるのである。又た此の長い期間に於て新陳代謝も行はれたのに依然として今日まで信念を持續し努力をつゞけて來て居らるゝ古い同志諸君に對しては一層敬意を表すべき理由こそあれ輕んずる理由は一つもない。山の芋時代が天行居の『無駄石』であつたといふことは云へないこともあるまいが、無駄石といふものは尊い意義のあるものである。一日にして成るにあらざるもの羅馬のみに非ずだ。

無駄石といふことについては私としては少々アタマの歴史がある。些々たることではあるがそれを一つ話す。

X X X

大正六年か七年かの夏、丁度各地に米騒動が起つてゐた時のことだ。私は旅行の途次K市の老辯護士（前市會議長）波邊氏夫妻に案内せられて其の土地で有名なBといふ寺を見物に行つた。この寺は其の土地での名所であるばかりでなく實は全國的に有名な禪學道場なのである。多少その道の消息を知つて居られる人ならば、『むゝアレか』と直ぐに微笑せられる寺だ。そこを私は見物に行つたのである。見物といふ言葉を變だと思はれるかも知れんが此の寺院は市街地に隣接したところではあるけれども景勝の位置を占め、山裾に點在する茶室のやうな幾棟の面白い建物を縫うた廊下を傳ひながら青嵐を袂に孕ませる心地は何とも云へないことを傳聞して居たからで、奈良の大佛様でも見物するやうな氣持で渡邊氏夫妻の案内せられるまゝに出かけて行つたのである。（後年此の寺に關係のある或る靈異談を堀先生から拜聴したこともあるが其れは又た何かの折に述べる。）

この寺に限つたことでもないが、禪の道場へ行つて先づ感心させられるのは掃除のよく行き届

いて居ることだ、だいいどころ、禪の方では何とかいふ名稱だがのやうな廣い板張でも塵一つなく、鏡の如く拭き清められて黒光りに光つて居り、爐邊へ一人きちんと坐つて雲水氏の行儀もよく、さすがに昔からよく訓練されたものだと思ふ。どこをみても桶一つでも箸一本でも皆な其の處を得て居り、人をして不快を感じしめるところは一つも見當らない。聞くところによると多數の雲水氏の起床から食事から日中の諸行事から就寢に至るまでも規律正しいものなさうである。「軍隊や監獄の中よりも嚴肅なものです」と渡邊氏は云はれた。

幾つかの座敷や廊下をめぐつて和尚さんの室へ入つた。和尚さんは格別な風采でもなく先づ美術學校の生徒が畫いた羅漢ぐらゐにしか見えなかつた。

渡邊氏夫妻は和尚さんと親交があるらしく、何くれとなく世間咄をせられた。私は和尚さんの面白い顔を見たり屋外の風景を眺めたりして茶を喫んだ。和尚さんは決して六かしい話もせず修養談めきたることも並べられなかつた。「やはり一山のあるじともある人物はえらいもんだな」と又た感心した。

ところが只だ一つだけ道話めきたることを和尚さんは語られた。渡邊氏が私を周防の國の人間だと紹介せられた爲めか、周防の徳山附近に縁のある話をせられた。それは何彼の話から自然的

に出て來た話で、渡邊氏夫妻に向つて話されたのであるけれども何だか私にアテつけて話されたやうな氣もした。下手繪かきの畫いた羅漢だと思つて和尚さんの顔をみて居たので一本參られたやうな氣がした。

その話といふのは斯うだ……。

むかし周防の徳山附近の海岸を或る旅僧が行脚して居た。ところが毎年のやうに高潮で崩れる防波堤の修繕工事をやつてる浦人の澤山働いて居るところへ通りかゝつて眺めて居たが「そんな工事では又た崩れるぞ」と言ひ出した。「この坊主め」と腹を立てた青年もあつたが浦の老人が辭を卑うして其のわけをきいてみた、するとそれは格別奇妙な意見でもないが、要するに無駄石が足らぬといふのである。岸の外廓へ更らに澤山の無駄石を投げ込まねば此の岸は保てぬといふのである。少し厄介な意見ではあつたけれど更らに澤山の無駄石を運んで來て捨てたので其後は長年間崩れなかつたといふのである。

此處まで話して來た和尚さんは私の顔をちろりと見た。私は冷めた茶をがぶりと飲んだ。それからしばらくしてから私等三人は山門を出てぶら／＼と日の暮れかけた涼しい道があるき、河畔の旗亭で渡邊氏夫妻の厚意によつて川魚料理で飯を食うた。その頃は飲める時代だったので麥酒

を四五本平らげて夜行列車で某方面へ向つた。

汽車の中でうつら／＼無駄石の妙味と川魚の香氣とを考へつゝ。

X X X

天行居が天行居らしくなつたのは最近三年間すなはち昭和七年以來のことのやうに考へて人もあるやうだが決してさうではない。實を云へば今日までのところ、最も天行居の正しい姿が描き出されたのは石城山開闢から三年ばかりの間であつたとも云へないことはない。試みに昭和三年の夏ごろから、昭和六年の秋までの天行居の機關雜誌『古道』を出して御覽になれば直ぐにわかる。昭和六年以前の天行居は決して只の敬神團體でもなく只の靈學團體でもなかつた。

十言神咒を公表したのが昭和三年の春、山上の天啓及び十ヶ條の宣言を公表したのも昭和三年の春、石城山道場が開かれ天行居の大使命が宣言せられ、靈的國防が強調せられ、天行神軍(編改稱)が創設せられたのが昭和三年の夏、其頃の全國同志の白熱的信念と無我的な努力は今から回顧してみても身ぶるひがするほどであつた。『古神道秘説』が刊行されたのが同年の秋、翌昭和四年の大事業は何といつても山上神殿の御造營であつた。又此の年の夏には天行居の組織に一大エポックを劃した天行居憲範が制定公布され天行居の面目は中外に明確なものとなつた。其頃の東京支

部の月例集會の如きも七八十名が押寄せて感激の涙を揮つた。聯合協議會も其年の秋から開かれた。翌昭和五年の夏には結靈の時が制定せられて、全國各支部は新たな動向をとりつゝ純眞な努力を續けた。又同年夏五月三十一日の所謂『中天の異象』は全國同志の信念具體化の上に大きな暗示を與へるものとして出現した。そして五十猛社の御造營は現幽兩界大機の爲めに深大な意義をもつものとなつた。其の翌昭和六年の夏には『同志全體の頭上へ』の意味に於て所謂『天命拜受』が發表された。同年の秋九月には全國同志を過去と未來とにわたりて永遠につなぐ石城島社の御鎮座祭が執行せられた。更らに特筆すべきは同年秋九月所謂滿洲事變の勃發となり、即時山上戰時修法場の開拓となり早くも其の翌月には第一回の神軍夜間特別修法が執行せられて靈的國防運動具體化の火蓋が切られた。以上が昭和六年秋までの天行居の概観であつて、其の時代の同志の純眞な白熱的信念と正しい姿とを再現し更らに其れを作興發展せしめねばならぬ責任は今日以後の全國同志諸君の雙肩に在るものと申さなければならぬ。天行居のことは決して一人二人の能く爲し得るところでなく、全國同志中の少くとも半数の人々が眞劍で協力せられなければならぬ。一人二人の似而非英雄的態度は天行居の組織原理上神祇の大前に於て絕對に大禁物である。飽くまで天行居は天行居の天行居でなければならぬ。そこに始めて正神界の神々も『神の約

東』によつて感應したまふのである。天行居經綸の具體化といふことも徹頭徹尾形而上的方面のことであり、天行居には形而下的運動なんものはあり得ない。われ／＼は一指たりとも政治的運動に觸れたり或る意味の社會的運動に接近したりしてはならぬ。天行居は飽くまで神道團體であり信仰團體である。他の神道團體まがひのものが政略的に社會事業をやつたりして所謂繁昌をして居るのを見せつけられても其れに動かされてはならぬ。そんなものは吾々の眼中に無い。天行居としても天行神軍としてもやらねばならぬことで、又た他の神道團體等でやり得ないことで、われ／＼天行居同志に課せられた重要な責任を追々に遂行して參らねばならぬ。それには何が必要乎、第一に純眞な信念を守り育て、正しい姿を崩さずに進むことだ。これが何より大切な根本第一義だ。これが破れたり、よごれたりしては如何に所謂發展をしても三文の價値もない。われ／＼が天行居の爲めに微力を盡しつゝあるは事業的興味のためでもなく道樂根性からでもない。神界實相の若干を知り正神界の意圖を體して一人でも多くの人々に正しき永遠の生命の眞の道を傳へ、又た當面の問題としては天行居を通じて君國の爲めに聊さか微誠を效さんとするに外ならないのだ。それが爲めには『天行居でなければならぬ使命、天行居でなければやれない事業』があつて、それを神慮のまに／＼神ながらの時節に應じてやつて行かなければならぬ。それ

には第一に天行居の純眞な信念と正しい姿とを守ることが必要だ。中川宗主や長鹽副齋主は特に此點に深い關心をもたれ、靜かにおもむろに、しかも堅實に根強く同志諸君と共に行進しようとして居られるのである。

X X X

昭和三年四年五年頃の修齋者は求道心も強く又た意氣も旺盛であつた。夜間の登山は罷りならぬと申し渡してあつても、ひそかに禁を犯して登山し天明に及んで下山する猛者連が續出し實は少々取締りに手こずつた位だつた。物には何事にも利弊は伴ふもので、自然多少の行者臭い傾向を生じた人も稀れには絶無ではなかつたが、兎に角十日間の修齋も少しも退屈の氣色なき人が多かつた。要するに態度が眞劍であつた。近ごろの同志諸君の態度は概して云ふと外面を向き過ぎてをられるのではなからうか。

さればと云つて無暗に過去の天行居を憧憬して最近二三年來の天行居の蹤跡をボロクソに言ひこなす人もあるがそれも妥當とは考へられぬ。何も彼も天の時であり其時々々に應じて大概に於て爲すべきことを爲さしめられて居るのでそれは一人二人の功勞でもなければ過失でもない。いづれも同志諸君の大部分が私どもと共に責任を負はなければならぬ筈のことであり、重ねて云

ふが功勞でもなく過失でもないので、魚行いて魚の如く鳥飛んで鳥に似たりといふまでのものだ。愚痴を云ふこともなければ自慢することもなく又た他者を非難することも當らない。

最近二三年間に於ける天行居の努力の中心は何といつても白頭山天池の神事であつた。此の神事が實は如何なる動機で如何なる意義を有するものであるかについては多くの同志諸君の見らるるところと私どもの所信とは多少異つて居る點があるかも知れないが、それは言はないことにして兎に角當時の天行居幹部當事者爲された方法と努力とは感謝すべきものであると信ずる。又た其頃を語るとなれば色々申したいこともあるが、一番困らせられたことは、神儀御船代御外廓の容積に比して御重量が甚だ重く天池の深さは正確なことは未だ分つて居らぬけれど少くとも一メートル内外と推定されて居り、その水深を鎮下の際に速力が加はつて池底の岩石にでも當らる場合は恐懼の至りなのでこれには私どもは全く惱まされた。ところが當時の長鹽參謀長が一種の落下傘の如きものを考案せられ、その寸法や水壓の關係等を力學的に計算せられて、所要時間約二十分位で悠々と鎮齋し奉ることに成功せられたことは有難いことであつた。念の爲めに森田海軍中佐が模型を造られ柳井の沖や虹ヶ濱の沖で何度も豫習を行はれて確信を得られた。

軍部との折衝についても森田氏の努力は格別のものではあつた。固より神助あればこそではあつたが、併し當事各員の努力も尊敬すべきものであつた。此の神事について木藤氏が二回にわたつて正確な記録を天行居機關雜誌に登載せられたことも後日の爲めに極めて都合であつた。此の白頭山天池神事に直接従事せられた神軍士官(現在道主)諸君の努力は今更ら申すまでもないが、これを直接間接援助せられた全國同志諸君の大部分の方々に對しては後來の同志諸君が永久に感謝せらるべきものであらうと思ふ。

白頭山天池神事の外には此の二三年來天行居はロクなことをやらなかつたといふのではないが、此の天池神事の重大性については同志諸君の認識を新たにして永久に其の意義を深思して貰はねばならぬ理由があるので此處に一言したのである。

天池神事が行はれて二ヶ月あまり経つてからの或る夜、その鎮齋の神儀が極めて理想的の状況に奉安されてあることを確知したときには、「安心」といふ言葉の外に何か適當な言葉を知りたいほどの大安心を感じた。もとより御神助の然らしむるところであらうけれども、此の神事に奉仕された人々の忠誠が凝つて此の大願が成就したものと云つても咎めはあるまいと思ふ。

天行居は古
神道を奉ず
る信仰團體
なり

天行居の同志の中には、天下國家を念とすることを主とする人々と、御神徳を念とすることを主とする人々とがあつて對立して居られるかのやうに云ふ人たちがあつて、私には其の意味がわからない。私どもの見るところでは其の前者も後者も共通の信念であると思ふ。神道團體であり信仰團體であるところの天行居の同志が道俗公私とも正しき御神徳を念とするは當然のことである。正しい信仰と正しい努力と修善積徳の靈縁とによつて凶を避け吉に就くことは人類の正常な生活方法である。その信念が國家天下に向ふとき必然的に國家天下的の信念となり行動となるのである。天下國家を念として御神徳を少しも念とせぬならば其れは只の一種の思想團體であつて神道團體といふ資格はない。さうした思想團體も固より結構であるが、神道團體としては神慮、神徳、神威、神力といふものを通して國家天下を考へる。少くとも理論によつて結成されたものでなく、眞の古神道を奉ずる實信實證の信仰團體たる天行居としては其の信念の生命力の由來するところが異なる。かくの如くにして始めて火にも焼けず水にも溶けざる敬神尊皇を根本とする天下國家の大信念が炳現するのであつて、他の思想の力を以て崩し得られるやうな思想團體ではなす。

X X X X

神界の實相
に本づく
正しい
信仰

天行居でなければならぬことを、天行居でなければやれないことを天行居でやらねばならぬと云つたが、それは決して他の神道團體でやるやうなことは天行居ではやらぬといふ意味でないことと勿論だ。日本國の神道團體として爲すべき當然のことは天行居に於ても努力すること申すまでもない。さういふ方面に就ては特に今後の幹部の方々が追々に考慮せられるものと信じて居る。要するに一人でも多くの人を正しい信仰に導き、一草一木をも眞の正しい幸福の世界に救ひ出したといふのが吾々天行居同志の本願である。吾等の云ふところの正しい信仰とは何か、それは天行居によつてのみ此の地上に明らかにせられつゝある神界の實相に本づくところの信仰である。勝縁あつて天行居に結べる同志諸君は、神祇より導かれた其の天縁を自覺せらるゝと同時に、その責務使命の當然の遂行に自から進んで機會を求めて働かれねばならぬ。そして其れを一層有効にする爲めには己れを虚しうして石城山本部の統制を尊重して、その各自の努力を實際に効果的ならしめる爲めに無私奉公の純潔な態度であつて欲しいものである。今日の世の中に於て正しい嚴肅なる意味に於て最も效果的の眞の『善』を行ふ團體たる天行居の同志として、各自の立場をハッキリと認識せられねばならぬ。

X X X

所謂1935年がやつて来た。併し今更ら何もあわてる必要はあるまい。昭和六年九月十八日
満洲事變突發のときにも、その頃はまだ神軍總司令も參謀長もなく、私が宗主兼齋主であつた爲
め直ぐに神示を仰いだ。そして即時石城山上の戦時修法場開拓を命じた。此の工事は極めて神速
に進行して十月五日には立派に出来上つた。十月三日には當時の荒井顧問、井口副齋主、三島幹
事長、田畑齋務部長、青木庶務部長を鳳凰寮に招請し、山上修法に關する詳細なる神事次第書を
提示して説明した。そして其の月に第一回の山上夜間修法を執行して神軍の意氣は天に冲した。
今後いよゝの世界のドタンバに近づく、こんなナマヤさしいことではないけれども、とにかく
形態上の準備はいつでも出来るものと私は信じて居る。しかし至大の關心をもつてるのは同志
諸君の精神上的の準備如何といふことである。信念第一……これが天行居に於ては一切の根本であ
る。『そのことか、それなら安心して呉れ。』と毛もくぢやらな腕を突き出して貰ひたい。
法學博士鹿島守之助氏の『世界大戦原因の研究』は東大法學部教授會に提出された學位論文で
三萬七千の外交文書を基礎として書かれたもので人間の努力としては先づ此れ以上の藝は六か
しいであらうが、併し戦争なんてももの本當の原因といふものは、そんなわけのものでは御座り

ませぬのです。又た愈々開戦となつて將兵が戰場に送られた時にでも、最初は誰でも實は餘りよ
い氣持はせぬ筈だ。耳もとをビューツと敵彈が過ぎるのも格別風雅なものではない筈だ。けれど
も更らに愈々接戦となるとマルで別人で、眞に火にも水にも飛び込む鬼神の振舞をするやうにな
るが、それをどういふわけだと世人は考へてゐるか知らん。心理學者に云はせれば又た種々の説
明も出来ようがなか／＼そんなわけのものでないのだ。又た戰場々々といふけれど、今後の愈々
の大戦となれば我が國土も實は皆な悉く戰場で、安全地帯なるものや非戦闘區域なるものは事實
上どこにもあり得ないが、其時に又た國民個々の背後にある神靈との關係が極めて重大な問題で
ある。我が天行神軍の責任の重大さは考へても身ぶるひがするほどだ。しかし、しかし、あ
わてゐることは一つも無い。石城山上から天空を切つてカッ飛ばす快打を御覽に入れるのは、まだ
まだ。

今回の天意發動により、天行居は天行居の天行居に復原した。天行居は神祇の手に取り返され
た。天行居は完全に全國同志諸君の手に取り返された。中川宗主も長鹽副齋主も少しも勿體ぶら
れず其の職務を殆ど仕事本位に考へて居られるやうで只だ爲すべきを爲すと云つた風な態度で居

られることが早くも内外を感激せしめて居る。身を以て範を示されるとでも申さうか吾々も大いに訓へられるところがあり全く敬服の至りである。併し念のために言っておくが祭典神事等の場合に齋主たり副齋主たり又は神軍總司令とか參謀長とかの地位に在る人が相當の威儀をたゞされることは當然のことである。又た平素に於ても宗主や副齋主が少しも勿體ぶられないといふことをよいことにして餘りに狎れるやうなことは感心いたしかねる。人間が動物と異なる點の一つは禮儀を辨へて居ることだ。何事にも『ほど』といふものがある。神道人は此の『ほど』を守ることが大切である。天行居の如く穩健中正の思想をもつてを團體としては殊に萬事に『ほど』を守るべきであり、話は違ふが、經費問題なども『ほど』の問題であり、いかに經費節減など云つても餘りに不景氣な眞似は致したくない。ちかごろ各地から本部の經費を節減せよといふ聲を聞くが、或る程度までは御尤もであり同感であるけれど、あまりにキチガヒじみた節約論には私共は同意致しかねる。梅ぼしと握り飯でやらなければならぬ時期になれば又その時のことだが、今からそれほどにする必要は認めない。要するにホドだ。何事にも『ほど』がある。又た今後の本部の財政等に就ては宗主も總務も穩健な綿密な公正な頭腦の持主であるから充分に信賴せられて同志諸君の一層の御奮發と御盡力とを願ひたい。

欠

欠

して百世に輝き給うた。明治時代に於ける坊主で吾黨の士たる原坦山は「人間忠節士、上界盛威神、敬禮群生利、公明自在身。」と詠じた。

全國到る處
の天満宮と
國民精神

日本全國到るところに天満宮がある。神徳の廣大なること、天満宮と國民精神との關係といふやうなことに就て深思せねばならぬ理由がある。

もつとも各地の天満宮の中には他の神社の祭神が中世不明になつて何時ともなしに天満宮となつたものもある。天津神を祭つたのが天神となり天満宮となつたのも随分ある。神社名の正しいヨミカタも一つの獨立した學問として研究せねばならぬ位ゝ重大なもので古代神事を考へる上に一つの鍵ともなるべきものであるが、此れはなか／＼の難事業だ。延喜神名式最古の寫本と稱せられる九條本でさへ旁訓は文永年代に於て施されたもので、確實な古傳とは申し難いのである。しかし菅公を奉齋したものである。菅公の神徳の廣大なること、他に類が少いのである。

ともし火の油さへも盡き勝ちな太宰府の講居、或ひは食事の料さへも充分ではなかつたらし

い。痛ましくも菅公は壁も破れ雨の漏る榎寺の一室に幽居せられ、「都府樓は織かに瓦色のみを看、観音寺は只だ鐘聲のみを聴く。」ところに於て寸歩も門を出で給はず長齋せられ、千歳の後の皇國精神作興の爲めに、至大の犠牲となり給うたのである。

此の無方齋の所在地たる宮市は菅公西下の御みぎり故あつてしばらく御滞在になつたところであるのみならず、公が格別なる感慨をとどめさせ給へるところで、そのことに就ては嘉永二年に上木された松崎天神鎮座考（弘正方撰）に詳述されており、それに關聯して少しく愚見を陳べたいこともあるが、問題が稍や地方的となる嫌ひがあり、全國の同志諸君に少し縁の遠い話だから今日は差控へる。私としては少年時代から菅公から多大の恩頼啓導を蒙つてをるもので、北野であれ太宰府であれ、其他何處の天満宮に對しても格別な或る懐かしいやうな感じをもつて居る。宮市の天神様のことばかりを廣告する積りではない。

菅公は萬靈神岳に於ては左冥司大之中津大兄官にましますますが、それは菅公の御分形の神であらせられるやうである。御本殿は何處であるかどうかよくわからない。神祇は其の位階が次第に高

菅公の神階
と神集岳の
天満宮

くなるにつれ、其の御神徳が廣大になるに従つて御形態も變化が自在となられるもので、少彦名神が水位先生を伴はれて地球を一周されたといふやうなことも御分形の神なので、少彦名神のやうな大神になられると千變萬化で種々の場合に高低大小いろ／＼に變現し給ふものだ。そのことをよく腹に入れてをらぬと神界の事情には疑惑を生じたる場合が多い。

神集岳では大國主神の九羅殿から西南方約五十キロ乃至三十キロと想定されるところに立派な天満宮があるが、それが菅公の御本殿でもないのである。此の神集岳の天満宮なるものは實は私には不可解千萬な存在であつて、どうも其の意義が諒解されない。神集岳には我が人間界の神社のやうなものはない。それなのに此の天満宮は人間界に於ける神社と同様なものであり、その御造營も七八百年前のもののやうである。大國主神の九羅殿の如きは直ちに其れが大國主神の御常居の御殿であつて、出雲の閔宮や其他各方面に御分形の神が現はれて坐しますのであるけれども、神集岳の天満宮は恐らくは神集岳に居住する幾十萬の俗人や少し高級の神人たちによつて恰かも人間界に於ける神社のやうな意味に於て造營されたものであらう。それにしてもどうも其の意義が私どもにはよくわからないが、斯ういふことは「人間」の智能を以てしては到底分明に理解し得ることが六かしいことなのであらう。

山上神殿地下大神（山）は堀天龍齋先生が此世に生を得られた意味の殆ど全部の表現たるものであるが、昭和二年の五月に菅公の啓示（山）によられて私へ引繼がれることになつた。それまで私は左ういふものの存在は夢にも知らなかつたところである。私は其れから數旬の後に龍先生の指示通りにして此れを組み立て假奉安の神事を了した。それから二年四月経過して昭和四年の秋に山上神殿の御鎮座となつた次第である。考へて見ると天行居と菅公の關係も容易の觀を許さざるものだ。

昭和四年秋、山上神殿御鎮座祭が濟んでから報告の爲め拜訪したとき、堀先生は大なる安心の面もちで、「日本國も此れで大丈夫だ、これから國運は次第に發展して行く。」と申されたが、なるほど其れからの國運の躍進ぶりは實に目醒ましい。工業や貿易ばかりではない。あらゆる意味に於て旭日昇天の勢ひとなつて來た。

明治五年に學制が公布されて國民教育の形式が出来たが、その以前の數百年間に於ける國民教育ともいふべきものの中心信仰の標的は實に菅公であつた。武家は申すに及ばず農家町家の寺小屋といふものまで天神様を教學の祖神として崇敬して來た。これが今日の國民の潛在意識ともい

ふべきものになつて居るので其の一大國民精神の土臺があつたればこそ今日の國運の飛躍も出來たのである。決して五年や三年の科學工業當事者の力のみによつて今日の國運が製造されたものではないのである。斯ういふ意味から考へても、今日の日本國と菅公との關係は冷淡に見ることは許されない。否な今日の非常時日本と菅公との關係は特に深思せねばならぬのである。

此の當面日本國非常時乗切りの靈的方面の第一戰として、來る四月には石城山戰時修法場に於て特別修法が執行されることになつた。これに参加される諸君は申す迄もないが、各地に於ける遙拜修法の諸君も各自個々の責任の重大性を前以て充分に覺悟しておいて頂かねばならぬ。多數の同志が居るのだから自分ひとり位は油を賣つてもよからうといふやうな考へが最もいけないのである。これは平素の「むすびの時」でも左うであるが此の機會に特に深く考へ直して頂きた

ミカエル、コスタの指揮して居た大合奏音樂の練習のとき、一つの笛を受持つて或る一人の男が、自分の役割は極めて些細なものだから一寸位は休んでもよからうと思つて、僅かの間の指を休めた。すると直ぐにミカエルは手を舉げて全員に中止を命じた。山上修法のやうな場合

には一人と雖も全局の靈氣に重大な關係あることを深く腹に入れられて、今後は一層眞劍に謹嚴に奉仕して頂かねばならぬ。

年々梅花時節となるごとに、日々朝夕酒垂山（天満宮鎮座）を咫尺に仰ぎつゝ頻りに菅公を思ひ、今年も又た此のつたなき小篇を成した。あやまち犯して大菅公の盛徳をけがすこと無からんことを祈る。

（昭和十五年二月一日）

神道一家言 (三)

山上神殿と
石城島社

昭和四年秋石城山上に於て山上神殿が鎮座された。この神殿は畏くも天祖を中心として皇祖
皇宗及び天神地祇を奉齋したもので天行居に於ける至高至聖の大神殿である。然るに昭和五年の
聯合協議會に於て私は石城島社造營を提案して賛同を得、全國同志諸君の御盡力によつて翌昭和
六年秋豫定通り御鎮座祭を行ふことが出来た。この石城島社は山上神殿の東方、一段低い地點に
あるが此の神社は山上神殿の如き高貴の大神を奉齋した神殿とは全然趣きを異にするもので、同
志諸君の近親者俗縁者中の歸幽せられた方々を合祀したものであり、或ひは靈社とでも云ふのが
妥當であるかも知れないけれど、兎に角石城島社と稱呼して來て居るのである。御社は小規模
であるけれども我々天行居の同志としては安心立命の中心點ともなるべきもので、永久的に極め
て意義の重大な御社である。

石城島靈界
を訪問す

私は此の石城島社の靈界に出入して見たいといふ希望を持ち、折にふれては或る方面へ念願し

ておいたのであるが、昨年（昭和九年）四月十八日の夜、始めて此の石城島社と密接な関係のある靈界を訪問し、多少の見聞を得て翌日メモへ見聞したことを抄記しておいた。併し其の内容は甚だ貧弱なものであり其の材料によつて考へて見ると、色々不審な點や疑問が百出するので、更らに二回三回と重ねて訪問して見聞を確實にしたいと期して居た。けれども其後今日のところどうしても再び訪問の機會を得られない。それで私の此の靈界に於ける印象が消え去つて了はない間に僅かなものでも記録しておきたいといふ氣で此の筆を執つた。併し鉛筆で走り書きしておいたメモと臚ろげな記憶とを辿つて書きまとめるといふことに就ては多少正確を缺く危険があり、否な錯誤を生ずる不安がないでもないが、それを怖れては抛棄するの外はないから兎に角書きまとめてみる氣になつた。

根本問題として、私の感知したことが如何なる程度まで氣線の歪曲を免かれて居るかといふことが研究問題であるが、それは同志諸君にあづけておく。私としては何年かのさき、又は何十年かのさきに於て、他の方面から私の此の見聞記録が實證される日が来るものと信じて居る。だが、考へてみると斯ういふものを人様に讀んで貰ふといふことは或ひは自惚れが強過ぎるかも知れん。これは只だ私の手控として文庫の中へ投げこんでおくべきものかも知れない。

石城島靈界
高井氏を
訪ふ

この靈界の見聞、それは縁あつて此の靈界に居住して居られる高井氏（假名）を訪問することが許されて、高井氏から説明を聞いたことが六分、私が見たことが四分、それが此界における私の知識の内容である。假りに此界を『石城島靈界』と名づけておく。

幽眞界の狀況は高級の神界から稍や低い神仙界、また種々の靈界があつて、文字通り八百萬の神靈界であり、それ／＼の界に於ける生活様式、時空の所感、苦樂の程度、物理學的法則の開合變化、決して同一でないのであつて、それらのことは従來天行居の諸出版物を精讀せらるれば大概わかることであり、さうした豫備知識がなければ此の小篇を御覽になつても誤解のヒラキが大きくなるであらう。いくらかの誤解はどうしても免かれまいが、其のヒラキをなるべく短縮して頂きたいことを私としては此の機會に特に念願して居る。

尙ほ念の爲めに一言しておくが、私は自分の誤謬を發見したならば、いつでも訂正もするし又た取消しもするつもりである。そんなことには少しもこだはつて居ない。

又た左に列記せんとすることで、その語句は高井氏の云はれた語句と異なるであらうと思ふところもあるが、それは語句の相違であつて意味は大概誤つて居ないつもりである。又た少し差支へあつて特にカットしておいたところもある。

この靈界について私が感得したところを冷静に回顧してみると、どうも私の潜在意識ともいふべきものが反映したのではないかと疑はるゝ節々が無いでもない。しかし其れを今訂正したり削除したりすることは考へものであるから正直に有りのまゝを書いておくことにする。或ひは私のさうした疑懼は不要であるかも知れんからである。

これから見聞したことを前後の次第もなく断片的に書くが、先づ其れに先き立つて此界の大概の輪廓を一言しておきたい。それも高井氏から聴いたところを綜合して私が考へただけのもので、數字や方位等に多少の誤差はあるかも知れない。

この界は東西約五六十里、南北約三四十里位りと想定され周圍は海洋である。然るにこの界の特色ともいふべきは、此界が九つの區に區切られて居ること、係りの官人等の外は甲の區と乙

の區と交通せぬのみか殆ど其の消息さへも甚だ分明を缺いで居ることである。この小篇を讀まれる人は界といふ字と區といふ字に注意して頂きたい。高井氏の居住される區は此界の西南端の區であつて、東西十三四里、南北七八里位りと考へられる。この區の居住者は七千人弱、この界全體で約四萬餘だらうとのことである。

この界は神集岳及び萬靈神岳に直屬するところの一つの靈界で重要な地位にある官人は神集岳及び萬靈神岳から來て居られるが殆ど萬事自治的にやつて居るところのやうであり、すべての狀況が現界（人間界）に酷似して居る。

この界の九つの區の生活様式や其他の狀況は必ずしも同一でなく、比較的古風な區もあれば文化的な區もあり、悠々閑々たる區もあれば活動的な區もあるといふ風であるらしいが、高井氏居住の區より外のこととは高井氏自身の知識も甚だ臚ろげなものやうであつた。各區相互に原則として交通は禁じてあるが物資の交換のやうなことが行はれ、又た此界全體としての統制が行はれて居るやうである。各區の境界は自然の山脈によつたものでトンネルの兩端には役人の出張所がある。

x

x

x

x

x

x

高井氏の居らるゝ區は比較的のんびりした仙境じみた區であつて活動的な氣分は少しも見受けることが出来なかつた。この界の中で比較的高級の區が其れとも下等の區かも確言し得られない。今日の世界の大機といふやうなことに就ても甚だ交渉感が冷淡なやうに見受けられたことは私の最も案外とするところであつた。

この界の開闢は何百年前か何千年前か不明であるが、現界日本の明治初年に大改革が行はれ、此界の昔からの居住者全部が他の靈界に移り、現に此界に居る人たちは何れも其後に此界へ來たものである。それは他の靈界から來たものもあり、追々に人間界から來たものもある。その出入去來の狀況等については高井氏も殆ど何等の知識をもつて居られない。それは其れほど嚴重な神界の規則によるもので、靈魂の出入とか眞胎の發生、變化等の手續順序等については殆ど知るところを許されない。高井氏と對談して居る氣分は全く人間的であり、私は此界で高井氏と自動車に乗つたとき肩と肩とが接觸したが人間と異つた感じは少しもなかつた。

X X X

先づ高井氏の居住して居られる區の地形から語らう。この區は大湖を中心とした山岳地帯で、西南部は海である筈だが海は見えなかつた。山岳地帯といつても格別な高山ではなく海拔二千尺

位かと思はれるのが一番高く其他大小種々の山峰が起伏して居るが相當の平野もあるらしい。

この湖は東西五六里もあり、東部は廣くて一里以上も幅のあるところもあるが西部に於て次第に細くなり、六七丁位と思はれる幅が多少の屈曲を見せつゝ細長く伸びて僅かに四五丁位の幅に迫つて居るところもあり、水深も次第に淺くなつて、やがて河となつて西南の海に流れて居るものやうである。湖の中には大小十數箇の島があるが、小さい島は島とは云へ只だ巖礁なのである。大きい島には種々の建築物もある。高井氏の庵は湖の西部海岸に臨んだ小丘の麓で、湖畔に沿うた道路からは四五十尺も高いところで、遙かに東部の浩蕩とした湖面の或る部分を烟霞の中に眺めることが出来る。

この區の建物は殆ど今日の日本國の現界の如く新古種々の形式のものが雜然として散らばつて居る。たゞ堂塔樓閣の多いことが異様の趣きを呈して居るだけである。この堂塔樓閣の大部分は殆ど佛教藝術の遺物なので、それも人間界と同趣である。高井氏に言はせると『前世界の遺物』なのである。氏は明治初年の此界一新前を前世界と呼んで居られる。その當時隨分澤山の建物が取拂はれたさうであるが今日尙ほ此れだけの堂塔が残つて居るとすれば、所謂前世界の此界の光景は堂塔類の展覽會のやうな觀があつたであらうと思はれる。今日残されてあるものは只だ風致

のために保存されてあるばかりで此界の居住者の信仰關係は絶無であるらしい。
柳緑花紅、烟波の湖面を包んだ山々の裾に隠顯する樓臺堂塔、さうした悠々たる此の畫圖の如き目前の風景に眺め入つて居ると、「西湖だ。」といふ感じが胸に浮ぶ。
湖の形状等こそ異なれ支那の西湖を聯想せずには居られない。尤も近頃の俗化した西湖でなく、昔の西湖を想像せしめる。くだらぬトタン屋根やインチキ商人の姿の見えぬ程度の寫真で西湖を眺め、美しい空想を描くことは此の目前の光景から湧いてくる。

高井氏の庵は四つか五つの室から成つて居り、座敷の南側に七尺位ゝな幅の廣い廊下があつて、そこに卓子が置かれ、曲木細工の椅子が二つある。卓を中にして私は高井氏と對坐して居た。前面は五六坪の小庭、太湖石の側に芭蕉が一株あるだけで他に一本もない。紅カナメの生籬の外に餘り古くない櫻が二本花をつけて居るので展望が若干妨げられる。

茶の給仕をして居る十二三の小娘が支那服をつけて居るばかりでなく、此界(否な此區)の有らゆる風物調度等に支那趣味の濃厚なのに驚かされた。後刻附近を少し見物して愈々その感を深くしたが、先づ日本趣味五分、支那趣味三分、西洋趣味一分、朝鮮趣味一分といふところである。

る。

高井氏は人間界で私が最後に目にかけた時よりも十四五位若返つて居られる。どう見ても四十二三歳位ゝにしか見えぬ。それに眼鏡をかけて居られぬので一寸容子が違つて居るが、いかにも元氣で潮焼けのした海軍士官のやうな風があり、微笑しながら靜かに語られる態度は以前の通りであつた。鐵色の袖の羽織を着て、仙臺平の袴を無造作に結びつけて居られた。

『この界は石城島社造營によつて結成出現した靈界ではありませんよ。さきほどから申し上げましたやうに相當の歴史をもつて居るのです。この靈界が存在する爲めに時節が來て石城島社も御造營になつたといふことは云へるだらうと思ひます。第一この界の居住者が悉く石城島社の關係者といふわけでないのです。石城島社に關係のある靈は悉く此界に居られるといふわけでもないのです。……さうですね、石城島社に合祀されてある方で此界に居られる方は三分の一もありません。併し此界に居られずとも此界と極めて密接な關係はあるのですよ。因縁とでも申しませうかね。此界に居られないといふことは此界よりも幸福でない界に居られるといふことを意味するではありません。この界よりもモット幸福な界を本居として有意義な生活をして居られる

方もありません。とにかく石城島社と此界と密接な關係があることだけは申す迄ありません。」
高井氏の斯うした話は私に多少の思ひちがひを自覺せしめた。しかし餘り失望するほどのこと
もなかつた。

座敷は普通の疊でなく、細い竹で編んだやうなもので、よくみると喜の字崩しのやうに精巧に
編んだものが敷きつめてあつた。床には竹田の溪山烟雨の一軸が懸けてあつたが紙が甚だしく白
くみえる。ペルシャ模様のある古九谷らしい花瓶には何も活けてなかつた。

「竹田ですか、あれは。」

「さうです。」

「紙が白いではありませんか。」

「新らしく見えますけれどウブなものです。」

こんな話をしてる間に支那服の女の子が茶をついで呉れては次の座敷に引つこんで行く。桂府
と二字書いた額があつて清陰と署してある。

「あれは誰ですか。」

「わかりませんね、むかし朝鮮に金清陰とかいふ學者があつたさうですけれど。」

壁に古びた拵への太刀が一口ぶらさけてあるので拜見したいとも思つたが、何しろ聞きたい問
題が多いので其處までは手が出せなかつた。

座敷の隅の方を見ると紫檀の低い机があつて法帖らしいものが五六十冊も積み重ねてあつた。
「臨池をやつとられますか。」

「そんなわけでもありませんが、何しろ人間界に居りました時分に餘り無茶でしたから自分の名
位は書けるやうにと思つて氣の向いた時に六十の手習ひをやつて居ります。」

「人間界と違つて斯ういふところでは何の藝でも上達が非常に早いさうですが……。」

「そんなことはありませんね。それは人にも依りませうし、又た他の仙界などではどうか存じま
せんが此界では殆ど萬事人間界同様です。私は相變らず駄目です。併し老衰といふやうな心配が
ありませんから悠々とやつて居ります。」

「人間界で亡失したものなどで立派な帖がありませんか。」

「ありませんね。却て人間界に佳いものがあります。そこにありますのも宋拓の面白いのが一
帖ありますだけで、あとは有りふれたものです。宋拓は隣家の黄老人から借りて居るのです。」

生籬の横が直ぐ竹藪になつて居り、その向うに家があるらしく、ひよろ長い老松が一本だけ亭々と見えてるのも其の家の庭のらしい。

『黄老人といふのは支那人ですか。』

『いえ日本人です。明治初年には皇大神宮ではありませんが伊勢のどこかの神社に奉仕して居られた人ですね。なか／＼の學者です。近く萬靈神岳の方へ移られる内命を受けて居られることを司籍府支廳へ勤めてる人から聞きましたが老人は否定して居ります。水仙が好きで自分で黄冠道士と號して居られます。』

『平素は何をして居られますか、その老人は。』

『俱樂部へ行つて碁を打つたり、自宅で彫刻をやつたりして居ます。そこにありますのも黄老人の作です。』

本箱の上に木彫の牛が置いてあつた。

『この羊羹は砂糖も小豆も使つて居ないのですよ。果物ばかりで製造したものです。どうです風味が違ひませう。』

高井氏は私が黒い羊羹をバクついてる時さう云はれたが、別段私には風味が違ふやうにも感じ

なかつた。虎屋あたりの夜の梅と異なるところはないやうであつた。

時折例の支那服の小娘が次の室から出て来て茶を入れた。急須を用ひず蓋付きの茶碗に茶の葉を入れては熱湯を注いで行くのである。茶は餘り上等ではなく一斤二三圓位もの煎茶であるが、新茶のやうに香氣が高い。

『あれは此の庵に飼うてあるのですか。』

『いや、あれは隣りの黄老人に仕へて居るのですが時折私の方へ手傳ひに来ることになつてゐるのです。今日は御客様があるといふので私の方へ來てるのです。』

それから高井氏は此の支那服の少女について來歴を語られた。この娘は昔支那の蘇州の商人の娘で七八歳の頃に長崎へ連れられて來て急病で死んだ。それから幕末の頃に又た長崎で日本人を父母として生れたが、因縁といふものは恐ろしいもので長崎へ來て居た支那商人の妻となつた。ところが數年にして其の支那の商人も病死し、子供もないので淋しく暮らして居た。それから人の子供を貰つて養育して居たが其の子供が悪質の難病に罹つたので彼女は大いに憂慮し、身を以て其子に代らんことを誓ひ、百日間同地の諏訪神社へ深夜參拜をつゞけた。けれども其の子供は天命如何ともすべからずして歸幽して了つた。彼女は其れでも神祇を疑はず其れが縁になつて却

て一層の椒神家となり孤獨な生活をつゞけて六十餘歳で人間界を去つたのださうである。

『六十餘歳のお婆あさんですよ。』

斯ういつて高井氏は笑はれた。

『生前の記憶は明瞭なのですか。』

『少しも存じませんね。斯ういふことは司籍府に勤めてる人から聞いて知つたのです。それを話して聴かせても當人は殆ど信じない位でです。元來この界に居る者は、前生の記憶のある者と無い者とあります。又た記憶の一部分だけある者もあります。それらのことは司籍府の都合によるのです。又た此界に生を受けるのも大概は五十歳位から上の者は二三十歳も若返つた眞胎を受けるものが多いのですが、黄老人のやうに老體の人もありますし、いろ／＼なんです。』

高井氏は更らに言葉をつゞけて、この支那服の女の子は其の智能や心理状態等も六十餘歳のお婆あさんといふところは少しも見えず全くの子供で、いつも近所の子供と跳ね歩いて遊んで仲々歸つて來ず黄老人も弱つて居ること、しかし妙なものでどうかすると蘇州訛りの支那語を使ふことなど話された。

高井氏は此の女の子を『小姐』と呼んで居られた。さうすると次の室から布簾を排して、くす

ぐつたいやうな顔をして出てくる。私も氣をつけてみたが、成るほど其の動作でも何でも全くの子供である。

『年々次第に成長しますか。』

『それも各人みな異なります。少しも變らぬ者もあり、子供は段々成長するのもありまして、司籍府の攝理もあり當人の希望にもよるやうですが、どうも此の眞胎のことは不可解千萬な神妙なものです。』

高井氏の談話は段々進んで來た。此界は常春の仙界ではなく、人間界の如く四季の變化があつて夏も冬もある。併し暑熱とか寒さの苦とかいふものは感じない、今は春であるから花盛りであるけれど、やがて又た青葉の世界になる。併し此界は花の時期が長く櫻でも桃でも花期が人間界の三倍以上であり、又た花によつては時期が多少前後するものもあるが併し此界もモハヤ梅は散つて居る。筍の如きは年中出て居る。日月の出沒はあるが晝夜といふものはない。現に今は人間界は深夜であるが此界は此の通り白晝の如くである。風雨もあるが雨中屋外に出ても少しも衣服は濡れぬ。強い風の吹いたことは一度もなく風はあつても微風といふ程度である。冬期は雪の降ることとも四五回はあるが大雪といつても一尺以上積つたことはない。——そんなことを聞きながら

四季の變化
日月の出沒
あれど晝夜
の別なし

私は繪のやうな眼下の渺々たる烟波、或ひは遠近の山々を眺め、多少の細馬香衫の人々の來往もあるらしい湖畔の道路などが氣になつて、何處か少し案内して貰ひたいやうな氣もちになつた。私が時折屋外を眺めるので高井氏は私の心持ちがわかつたものと見えて、『そこらあたりを少し御案内しませう。』と云つてふところから巻烟草入のやうなものを取出された。御守袋のやうに紐をつけて首にかけて居られた。その蓋をあけられると中に釦のやうなものが三十ばかり装置してあつた。その一つの釦を指頭で一吋押へて直ぐに蓋をしてふところへ納められた。『自動車呼びましたから。』と云はれた。併しなか／＼自動車は來なかつたので雑談をつゞけた。『この界には下水道のやうなものの設備もありますか。』『そんなものはありません。一切の不淨物は數分間または數時間後に自然と消滅してしまひます。たとへば小鳥が木の枝に糞をするのをみて居ますと、こんな微細なものは一片の雪が溶けるやうに直ぐ無くなります。』

『どういふ作用によるのですか。』

少し愚問のやうな氣もした。

『それは吾々如きものにはわかりませんが、要するに高級の神界から來るところの靈氣のためだらうと思はれます。譬へが妥當でないかも知れませんが人間界で物理學者が宇宙線と稱して居るものがありますが、まあさういふ風なものかとも考へます。X線を當てゝ生物の變化作用を起す事も既に人間界で學者がやつて居りますが、まだ物理學にも未知の世界が澤山あるやうです。大正十二年頃に先生は電子の奥に更らに玄子ともいふべきものが無ければならぬといふことを公刊物へ發表されましたが近頃物理學者は陽電氣の窮極の單位と認めて居たプロトンを構成するところの正電子といふものを發見して騒いで居ますね。……私の家で湯を沸かしたりするのも木炭を用ひず無論瓦斯の設備も電氣の設備もありませんが、藥罐の横につけてある釦を押へれば數分間にして中の湯は熱します。人間界でも何れラヂオで遠方へ熱を放射することも實用的になりま

すよ。』

『洗面や入浴はなさいませんか。』
『洗面は人間界に居た時の習慣で時折やつて居ますが身體に垢が生ずるとか汗をかくとかいふことは決してないのです。入浴は滅多にいたしません。温泉が二ヶ所ありまして私どもの行つても

よいところと婦人だけ行くところと別になつて居まして、景勝の地で立派な樓閣もあり設備は申分ありませんが、殆ど行つたことはありません。」

「食事はどうせられますか。」

「家庭的にやつてる人たちは其の家でやつてる人が多いのですが、私は倶楽部の食堂へ行きまして。家庭的にやつてる人も時折倶楽部へ行く者もあります。この界へ来た當座は毎日食事を攝つて居ましたが近來は三日に一度位行くだけです。昨年試みに二ヶ月ほど食事を攝らずに居ましたが何ともありませんでした。すこし淋しい氣がするだけです。」

「食事は人間界に居られた時の執心のため次第にそんなものに興味がなくなるのが當然です。」

「さうでないのです。そんなことを云つてる靈界もありませんが食事は不純な欲望によるものではありません。造化三神の如き大神はともかくですが高級の神界でも宴會等がありますし種々の設備もあります。神たちにもせよ吾々にもせよ人間界の方々にもせよ皆な齒があります。齒は發音を助ける爲めでもなく、無用の飾りでもなく、飲食を助けるための神慮によるものです。齒のないバケモノは神界には居られませんね。」

「どんな食事を用ひて居られますか、酒もありますか。」

「殆ど人間界と異りませんね。どんな料理でもあります。尤も平素は一定の制限もありますが、大概三種だけは何でも許されて居ます。酒も日本酒の上等があります。麥酒はありませんが支那の老酒もあります。又た果物で造つた種々の珍らしい酒があります。」

高井氏は其れから倶楽部の食堂について色々の話をせられた。食器の椀や皿類等も先づ人間界並みだが八寸といふものをよく使ふ。八寸といふのは其の大きさの寸法から來た名で杉の生地を水に濡らせて其上に大きな木の葉を敷いて料理を盛る。調理の手際は立派なもので、どんな通人でも満足するといふことなどを語られた。倶楽部には種々の室があり大概の設備は整つて居るらしい。

「みんなどんな仕事をしてるのですか。」

「それも色々ですが、此界では、如何なる人も一ヶ月三十時間位しか働かないことになつて居るのです。大概一ヶ月に十日、一日三時間位の勤務です。みな其れれ各自興味をもつて居る方面の仕事であり、それが僅かに其れ位な時間なのでから仕事に苦痛を感じるやうなものは一

もなく、仕事が足らんで困つて居る位です。私は整理部のやうなところへ出て居るのですが若い元氣な連中が私の仕事を盗むやうにして片づけて呉れますので、まるで遊びに行くやうなものです。どうも私なんぞは何處に居ても役に立たず甚だ恐縮して居ります。隣りの黄老人なんかは何もやつて居ません。又た婦人は志望者だけが女紅苑で勤務して居ます。裁縫やら手藝やらが主たるものですが、其處も一ヶ月三十時間です。』

『餘りの時間では何をしていますか。』

『修養やら研究やら娛樂やらです。』

『若い夫婦などが此界で家庭をもつて居るのは萬事人間界通りですか。萬事その……。』

『この界では異性に對する特殊の感興は誰でも起しませんのです、それは毎月一度齋場へ集合したときシャンペンのやうな酒を猪口へ一ぱい宛飲まされますが、そのために或る感情が解消されるのではないかと思ひます。他の仙界や靈界では子が生れることもありすが此界ではそんなこととはありません。』

『若い夫婦の同居生活で、そんな風では何だか變ではありませんか。』

『しかし人間世界に居られる場合と此界に來てからの考へとは又た異なりますね。人間世界に居た

時の考へで此界に來て大いに異なる點を二三申上げたいのですが其れは許されませんのです。人間生活時代の俗縁者に對する妄執は全く馬鹿げた幻影なんです……。』

『此界の夫婦生活者は他の人々に對するよりも別様の親愛の念を相互に持ち合して居るわけではないのですか。』

『それはあるやうです。とても濃やかな親愛の情はあるやうですし其れで一層幸福を感じて居るやうにも見受けませんが、何しろ夜の無い國ですからね。』

高井氏は朗らかに笑はれた。

『この界の婦人に月立といふことはありませんか。或ひは何か其れに類した現象でも。』

『ありますまいね。研究したことはありませんけれども恐らく有りますまい。』

『をなさ兒が此界へ轉生して來た時は誰が育てますか。』

『適當な婦人が其の子の母親なり姉なりになつて育てますが、此界では病氣といふことがなく又た子供が泣くといふやうなこともありませんから養育は男でも出來ます。』

『年々成長しますか。』

『成長します。しかし十二三歳位から先きは司籍府の攝理なり當人の希望なり因縁なりによつ

て成長が停止する者もあります。或ひは二つか三つの乳兒でも此界へは十二三歳になつて轉生してくる場合もあります。』

『人間界で家族であつた者だけが此界でも家庭的に一家に集るのですか。』

『さうも限つて居ません。又た人間界では直接なんの關係もなかつた婦人だけで三人五人宛一家をもつてるものもあります。婦人だけの家が随分あります。』

玄關の方へ自動車の來た氣はひがした。高井氏は椅子を離れられた。

『御案内いたませう。一寸そこまで。』

X X X

玄關の前の横には案外におそまつな竹垣があり見事な大輪の白牡丹が咲いて居た。自動車は小型の屋根無しだ。併し栗色に塗つた上品なものであつた。前部の機關部が無く只だ客室の前に簡單なデツキのやうなものがあつてハンドルがついて居る。どういふ動力で動くのかわからない。運轉手は十四五歳の少年で絹布の洋服を着て居る。

『この界では毛織物は用ひないのですか。』

『毛織物もありますよ。』

自動車は緩勾配のだら／＼坂を下りやがて湖畔に沿うた道路へ出て東方にむけて走り出した。併し速力が鈍く人間界の自動車の速力の半分位しか出ない。乗心地は上等。

道路は六七間幅の坦々たる立派なものであつた。街路樹は伊吹木と楊柳だけだ。この附近の建物や風物を眺めると、人間界で凡そ二十年前頃の湘南の別荘地大磯あたりのやうな氣がする。新舊いろ／＼の住宅が散在して居る。それへ奈良京都あたりのやうな古堂塔が點綴されて居るのである。大概に於て風流な建物が多いが、併し文化住宅式のものも所々にスレート屋根を見せて居る。テニスコートまである堂々たる邸宅もある。氣をつけて見ると居住者のない空家が多いやうである。雨戸はしめてないけれど何となく空家らしい氣がする。

『空家が多いではありませんか。』

『空家もあります。何分にも此界は居住者が少な過ぎます。』

『この界では子供も生れず、又た此界から他の神仙界や靈界へ移つて行く者もあるとすると居住者減少でフランスのやうな悩みがあるのぢやありませんか。』

『そんなことはありません。次第に居住者も多くなる傾向はあります。』

昔の何かの建物の跡らしい廣い空地があつて其の一隅に平安朝後期ともみるべき優雅典麗な層

塔がある。六重塔である。

『六重塔は珍しいですね。大概三重か五重か奇数にきまつてる筈ですが……………。』

『八重塔もありますよ、此界には。』

塔の前の草原で犬が二匹戯れて居る。

『犬も居ますね。』

『此界の犬は私と同様の存在です。』

『なぜです。』

『此界には泥坊が居りませんから、犬は何の役にも立ちませんのです。』

X X X

一般の住宅は青味を帯びた瓦の行基葺のやうなのが長く、茅葺も相當に多く稀れに檜皮葺もあれば柿葺もあり棚葺のやうに見える家もある。

『この界の古堂塔の中には随分古い時代のものがあります。』

『惜いことに飛鳥時代のものを明治初年に取拂つて了しました。奈良時代のものもありません。』

平安朝以来のものばかりで鎌倉、室町時代が多いやうです。』

一般の住宅

やがて自動車が停つて吾々は下車した。高井氏は低聲で何か運轉手に命ぜられた。此處からは長い石橋が湖中の島に渡されてある。橋の袂に二本の石柱が左右に立つて居る。何か文字が彫つてあつたものらしいが其れを鏡で叩き消した上に苔がついてるので無論どんな文字であつたかわからない。

『これも前世界の遺物です。』

と高井氏は云はれた。此界の居住者の身體に垢もつかず汗も出ぬのに石には苔がつくことが少し不審で訊いてみると、それは此界の居住者の眞胎から發する靈氣の關係なので、雨中に傘も何もなく屋外に居ても衣類も濡れないけれど衣類だけを屋外に置けば矢張り濕氣を生ずるといふやうなことを高井氏は説明せられた。この橋は二百間もあらうかと思はれる長さで幅は二間位の、自動車も充分通行し得られるのだが何ういふわけか此處からは徒歩だ。橋の石材は時代相當に古いもので寂びた色を見せて居る。このあたり水深は甚だ浅く水底の礫まで數へることが出来る。南畫の漁舟のやうな風雅な舟がありさらなものと見廻したが生憎とそんなものはなく、二十歳前後の洋装の娘が三人で白いボートを漕いでゐる。

『此界にもあんなモガが居るのですか。』

靈界のモガ

「だん／＼あんなものが多くなりました。」

「紫式部のやうな女は居ませんか。」

「そんなのは見當りませんね。一昨日は此界では三月三日の節句で舞樂殿で盛大な舞樂がありました。そんな時には婦人連は皆な和服で出かけます。……あのボートを漕いでる娘の水色の服を着てる二人は親子ですよ。」

「親子？……どちらも二十歳位ではありませんか。」

「さうです。けれどもあれは人間界では母と娘だったので。それが此界では友達になつてゐるのです。司籍府の人たちから聞かされても殆ど昔のことは信じて居ないらしく全くの友達になつてゐるのです。」

「人間界で夫婦だつたのが此界では反對に男が女になり女が男になつて同居してゐるのはありませんか。」

「そんなのはありますまい。」

まだ何か私は愚問をつゞけたらしいが記憶が不明瞭である。だん／＼島に近づいたが湖に面したところに数棟の水榭水樓が散らばつて居り美しい楊柳が其れを取巻き、點々として桃李の花も

見える。水邊の榭亭には二三人或ひは五六人の人が見える。高井氏の説明によると此處は俱樂部ではないが、役所の許可のある者は一定の制限内の日時に誰でも來ることの出來るところで簡単な料理も出すし集會した人々は茶を喫んだり酒を飲んだり詩歌を作つたり馬鹿囃をしたりするところだとのことであつた。

「此處の特色は料理を石皿に盛つて出すことです。」

「石皿とは石器ですか。」

「やはり陶器です。幕末頃まで人間界でも或る地方で使用したものです。上品なものではなくゲテのものですけれど、そのゲテのところにも又た趣きのあるものとして素樸な意匠を施した面白いものです。……此處では筍飯が名物です。」

「校書が居るではありませんか。」

「校書ではありません、あれは給仕だけする婦人です。」

「酒に酔つて冗談を云ふものはありませんか、こんなところで詩酒徵逐をやつてゐる仲間には杜樊川のやうな流儀の人も居るのぢやないですか。」

「すこしは冗談も申しませうが餘り無茶なことはありませんね。ひどいことを云へば婦人連は皆

な歸つて了ひます。此處からは見えませんが向うに事務所のやうなものがありまして老婦人が一切監督をして居ますよ。』

石橋を渡り切つて吾々は島を横断するのであるが、この島だけ少し氣候が變つて何だか少し暖か過ぎるやうな氣がした。

道路を二三間引ツ込んだところに蒼然たる古色を帯びた石碑があるので近づいてみると、

花の木にあらさらめとも

咲きにけり

ふりにしこのみ

なるときもかな

といふ文屋康秀の歌が刻してある。はてなと考へて眺めて居ると高井氏が、

『あれがヲガタマの木です。』

と指をさされる方を見ると此の碑から六七間離れたところに珍らしいヲガタマの大樹がある。高さ殆ど五十尺、根廻十餘尺もあらうかと思はれる驚くべき老木だ。

『どうです、熊野の速玉神社内苑のものが先づ日本一でせうが、これには及びますまい。』

高井氏は自分の所有物を見せつけるやうな得意の態度であつた。

『日向の高千穂にあつたヲガタマの木が昔は有名だつたのですね。』

こんなことを高井氏は言ひながら歌碑を撫でて居られる。とにかく私は康秀の歌を彫りつけて此のヲガタマの木の横に建てた人たちの道樂根性を面白く感じた。例の古今傳授の三木一草傳は甚だ馬鹿げたものであるけれど斯うやつてみると着想が實に面白い。元來歌道の傳授なんものが馬鹿げ切つたことで、かういふことを始めた爲氏や爲世の先祖の藤原定家が其著詠歌大概に於て『和歌に師なし、只だ舊歌を以て師とす』と明言してゐる通りだ。けれど細川幽齋の頃なんかは此の歌道の傳授といふことは甚だ八釜しいもので、恐れ多くも其の爲めに宸襟を煩はし奉つたことさへもあるほどであつた。三木としてのヲガタマ、メドノ木、ケヅリ花、これが随分問題であつた。二條の後(藤原高子)が御慰みに著の木に造花をつけて此れを歌によめと仰せられたときの康秀の歌は如何にも面白い、……ヲガタマの木については古來いろ／＼の説があるが荒木田久老あたりのが無難だ。とにかく靈木として取扱はれたが其の木がないときには他の木で代用した。土佐の幡多郡田ノ口村あたりでは正月の門松を撤去するとき其の一部を以てヲガタマの木に

造つて一種の咒法に使つたものだ。……などとつまらんことを考へて居ると、高井氏はぶら／＼歩きながら語られた。

『ヲガタマの木は世界に十三種もありますね、學名はミケリヤ、コムブレツシャとか申しますね。併し純粹なヲガタマの木は人間界では日本の特産物ですよ。私が人間界に居りました頃東京で何かの博覽會がありました、大正九年か十年頃でした、その時に臺灣館にヲガタマの木が製材してありましたが恐らく内地産のものとは種類が異なるでせう。……時に臺灣の砂田さんはどうして居りますか。』

『砂田さんは相變らず元氣です。』

『酒を廢めたといつて威張つて居られましたが續かないでせう。』

『いや、なか／＼道念堅固で、酒の方は廢めて居られます。も一つの方は何とも云へませんが……』

高井氏と私は馬鹿咄をしながら島を横斷して今度は木橋を渡り始めた。この橋は長さ百間ばかりである。丹塗だつたといふのだが其の面影はなく鼠色に寂びた木橋である。私は少し感ずると

ころがあつて爪で欄干へいたづらをしてみると矢張り疵がつく。

『この橋もいづれ架け換へねばならんでせう。』

『五十年や百年で腐りはしません、人間界とちがつて風雨の害も殆ど無く、水中にある材木でも耐久力は人間界の幾十倍ですから。』

『しかし早晚架け換へるでせう。』

『それは架け換へませう。』

『さういふ場合に其の工事に従事する人たちは相當に苦勞するでせう。』

『それは又た元氣な連中が喜んでやりますね、此界のものは誰も皆な病氣知らずの健康ですし、健康體のもので一ヶ月三十時間位の勞務は一種の娛樂同様です。それに又た特殊の勞務は猿を雇うて來ますから。』

『猿をですか。』

『さうです。この向うのシフスキ山（拾翠山）の奥に猿が千疋位居ます。それは普通の猿ではなく、人間世界に居る猿が轉生して來たものでもないやうです。皆な大きくて中學校の一年生位ありますね。……用事のある時は此區の係りの人が山麓まで行つて笛を吹いて呼び出し、五

十疋でも百疋でも必要なだけ連れて來ます。此區の者の言ふことをよく聞きわけて忠實熱心に働きます。その猿族の首領株の先生はどういふわけか坊主の袈裟のやうなものをかけて威張つて居ます。毎年正月六日に彼等は祭典を行ひますが其時には此區からも多少の祝ひの品をつかはして居るのです。』

『平素は此區の勞働に従事させても何も報酬をやらないのですか。』

『何もやりません。彼等は功德を成就してエチオピアあたりの人間に轉生せんとする願望があるのだらうと思ひます。』

X X X

木橋を渡り切つて對岸に一步を印した。そこにも廣い空地があつて右の方に唐招提寺の金堂のやうな建物が残つて居る。春の盛りであるのに此のあたり何となく青々とした草の中にも一種の淋しさが感ぜられる。私は此界の前世界といふのは或種の佛仙境だつたのだらうと直感した。

高井氏と私は湖に沿うて左へ行き、やがて杉林の中に入つた。三四尺幅の小徑を辿るのである。この界は晝夜の別がないのだから如何なるところでも明るい筈だが、どうも杉林の中は少し暗いやうな感じがする。小徑は右へ曲り左へ曲りして續き、殆ど五六丁も歩いて漸く杉林を抜け

出た。

それと同時に驚くべき別世界が私等の眼前に展開せられた。

X X X

杉林を抜け出ると右側は大溪谷になつて居り其の兩岸は桃の眞ッ盛りである。人間界の果樹園などの桃とは全くわけが違ふ。いづれも天然の老木でそれが幾千株一時に咲きわたつて其の壯觀は何とも言葉を以て言ひあらはすことは出来ぬ。それを眺めて居ると殆ど酔はされるやうな氣になる。溪の奥は次第に窄く峻巖が送迎して天功の奇觀をなして居るやうであるが樵童の辿るほどの路も見當らぬ。もしも桴に棹さして淵潭を泝ることが出来るならば……とも思はれるが、藍のやうな深碧の絶淵を俯瞰すると何だか恐ろしいやうな氣にもなる。

左方を眺めると湖の東部の浩渺とした景色が霞に消え、平蕩な感じが右方の蹙縮した溪谷の風致と面白い對照をなして居る。私等の脚もとは僅かに十坪ばかりの平地で、昔は何か榭亭でもあつたらしく礎石らしいものが苔むして居る。多少加工したあとの見える腰かけ石が五六個あるので私等は靜かに其所で休んだ。高井氏が私を連れ出された目的地も此處だつたのである。

『此處を莫愁亭といふのです。昔……人間界の足利末期の頃らしいのですが、或る美姬が此處

で茫々たる湖面を眺めながら、どうしたことか急に言ひ知れぬ哀傷の感に襲はれ、長い時間を働
哭したといふのです。その爲めに此界の空気が濁り非常な大問題が起つたと傳へられて居ます。
それには何か複雑な事情があつたらしいのですが、莫愁亭記といふものが此區の圖書館にありま
す。誰が書いたのか非常の美文といふ話ですが密封されて閱覽を許されないのです。」
そんな話を聞いてると何だか夢の國に誘はれて行くやうな気がする。但だ煙外の鐘を聞き煙中
の寺を見ずといつたやうな此境の前世界の情景も悪くはなかつたらうと役にも立たぬ想像を逞し
うする。その時大きな白鷺が一羽西の空から飛んで来て私等の前七八尺のところを悠々と過ぎ溪
を渡つて對岸の龜のやうな巖頭にとまつた。魚を獲るのか知らんと見て居たがそんな風もなく、
睡つたやうに休んで居る。

「圖書館は新式の建物ですか。」

「外觀は正倉院のやうな校倉造りですが内部は新しい設備が出来て居ます。通俗的な圖書も澤山
ありますが珍らしい古文書類が豊富で惜気もなく貸出します。」

「古文書の貸出しは大膽ですな、誰でも持ち歸つていいのですか。」

「誰にでも貸して呉れます。古文書や珍籍類はコピーになつて同じものが何部もあるのです。精
巧なコピーで紙の色に至るまで原本と少しも異なるいものです。」

「此區の教育機關はどんな風ですか。」

「此區では色々の塾のやうなものがありますが其れは殆どやさしいものばかりで、多少の讀書力
のある人は皆な圖書館の御客様です。圖書館だけは大規模なものです。……隣りの區では教育機
關も少し規則立つたもののやうに聞いて居りますが……。」

「自動車なんかは何處で造つて居るのですか。」

「隣りの區からの輸入品です。」

「隣りの區といふのは工業國ですか。」

「さういふわけでもありませんまいが……。」

私は此界の生活物資の生産加工配給方法等について問答したことがメモに書いてあるが記憶が
不明瞭だから此處には書かぬ。品物によつては他の靈界や支那の仙界からの輸入品もあるらしか
つた。此界の婦人でも衣裳は矢張り大切なものと見えて箆笥の一本位は持たぬ婦人は居らぬとい
ふやうな話もせられた。調度寮から種々のものを配給せられ、又た希望によつて貰はれもするが

其れも無制限といふわけではなく一般的制限もあり個人的制限もあると云はれた。それで此界の居住者相互の中にも贈答品といふやうなことも意義があり、又た各自の財産的意識もあると云はれた。これらのことは私の従來の靈界生活に就ての知識の一部を修正せしむるものであつた。高井氏はアメリカの經濟學者クラークの限界生産力説などを論ぜられ、富の内容といふものは分析の出来るものでない、世の中の富のどこ迄が資本の生産であつてどこ迄が労働の生産であるといふやうなことは計算の出来るものでないといふ風に言はれたやうに記憶する。

X X X

此界は高級神仙界と人間界との中間的な一種の靈界で修養を目的とする靈界のやうに言はれたが、あまりに氣樂すぎて修養には却て不適當で却て人間界の方が修養に適當だらうと私が云つたことに就ても何か反駁せられたけれど明らかに記憶がない。

『此界の修養の目標は何ですか。』

『それは甚だ簡單で只だまことといふことだけを目標として居るのです。何でも彼でもまこととさへあればよいといふのです。寶積經には人を護り己を護らずとありますが、此界では利己も利他もないのです。まこととさへあればよいのです。只だまことであつて各自の分に安住して他

を求めないのです。これは向上的修養心と一致せぬやうに見えますが、さうでないです。まことであつて他を求めないのが此界の修養です。』

『人間界は空前の非常時で甚だしく緊張して居るのですが此界は悠々閑々ですね。』

『大神界には色々の規則があります。人間界には神集岳や萬靈神岳から各地の産土神社を通じて直接交渉して居られるので此界からは却て甚だ没交渉なのです。しかし先達て此界から元氣な連中が二十名だけ〇〇の靈界へ移りました。此區からも三名参りました。此界からは百名位ゐるの志願者があつたのですが僅かに二十名だけ選抜されたのです。』

『滿鮮國境方面や北海道方面の靈界へも行つたでせう。』

『それは存じません。』

『人間界にある神社を遙拜せられるやうなことはありませんか。』

『ありません。毎年春秋二回この區の齋場で日本皇室を奉拜する式はあります。その時には皆な参列します。この區には支那滿洲朝鮮出身の者も百名近く居られますが皆な参列します。』

『石城島社の祭典等について何か改正したいといふやうな御希望はありますか。』

『かくべつありません。御供物に湯氣の立つものを加へられたらどうかと思ふ位です。其他にか

くべつ考へはありません。』

『高貴の神祇を拜されたことがありますか。』

『此處からは今霞んで見えませんが向うにタクキン山（濯錦山）といふのがあり、その東方中腹に幅三四十間長さ五六十間の大きな岩がありますが其處へ高貴の神仙が降られることがあります。其時には雲の柱が立つて見えるだけで何事も窺ひ知ることが出来ません。係りの官人が拜謁するだけです。』

『こんなせまい國に居られて窮屈に感じませんか、人間界の中流以上の氣樂なところへ復歸せられる希望はありませんか。』

『そんな考へは毛頭ありません。此界に居る者でなければ其の感じはわかりません。宇宙の廣さから見れば地球は芥子粒のやうなものですけれど地上の人類は窮屈に感じますまい。それと同じです。いかなるものも池の中に産れた鯉のやうなものです。この區は十里か二十里かの境のやうですけれど數百里數千里の様にも感じられるのです。人間界復歸なんて眞ツ平御免です。私は併し無能ですから強ひて早く高級の界へ行きたいとも考へません。許されるなら此界で二百年でも三百年でも悠つくり修養したいのです。』

『靈界によつては人間界の一年を一日位に感じるやうですが……。』

『此界では時間の觀念は人間界同様です。』

高井氏は其れから種々のことを語られた。天行居も今から三年位おしたら大體の目鼻がつくだらうといふことも云はれた。近いうちに〇〇〇といふ人が持つて居た書冊が私の手に入るだらうといふことも語られた。(このことに就ては昨年九月下旬數回の靈感あり、十月四日突然或人より書面來り、十月十日その書冊を入手したが題名と冊数が少し異なる。)

人間界も一つの靈界

人間界に居たとき東西の文獻等を參考として考へて居たことで大いに思ひちがひの點があると
いふことを云はれた。それは歸幽後に於て別の眞胎を受けると從前の考へも變り、多くのことが
愚癡であつたことがわかるといふ意味のものらしかつたが、このことを明白に云ふことは神界の
規則で嚴禁されてあるらしかつた。

『現界とか幽界とかいふ言葉は私共からみると全く意義を爲しません。私共から見れば人間界も一つの幽界であり靈界であります。幾百千の靈界は幾百千のガラス板を重ねたやうなものです。』

といふやうなことも云はれた。

『地上の人類の睡りを醒ます起床ラツパの鳴るのは矢張り石城山ですね。』

といふやうなことも言はれた。随分時間が経つたので私等は歸途に就くべく起ち上つた。丁度そのとき先刻の白鷺が西の空をさして悠々と飛んで行つた。

『あれは黄老人ですよ。』

と云はれた。

『此界の者は誰でもあんな藝が出来るのですか。』

『さうでないのです。あんなことをやる者は此區でも極めて少数です。』

杉林を抜けて木橋を渡つた。この區でも種々の演藝があることなど語られた。長唄も謡曲もあると云はれた。茶會もあるが益田鈍庵のやうに澤山の名器を藏して居るものは此區にはないと云はれた。秋になるとキラン山（倚欄山？）の紅葉が素敵でハイキングに持つてこいのコースだと云はれた。人間界生活の習氣が取れず三日に一度位は一氣頭（約十五分間）位りの座睡を催すこともあると云はれた。

一丁ばかり向うの木蔭でレインコートのやうなものを着た男が寫生をやつて居る。

『繪を描いてるのですか、あれは。』

『あの人は上手です。昨年萬靈神岳に一つの御殿が出来たときあの人が壁畫を奉納しました。神集岳や萬靈神岳には繪の上手な者も澤山に居られるさうですが今度はどういふわけか他の直屬の靈界に命ぜられて七十二枚奉納せしめられました。此界からも十二枚納めることに決定し此區からは二枚出しました。日本畫を一枚と西洋畫を一枚とです。あの人の描いた西洋畫は特に嘉賞せられ玉製の笛を下賜せられました。』

私等は島を横斷して又た長い石橋を渡り切ると其處へ自動車が待つて居た。少年運轉手は莞爾して楊柳の下ベンチから起き上つて來た。

私等が自動車へ乗りかけて居るところへ一人の立派な若い紳士が馬上で通りかゝられ、高井氏の丁寧な御辭儀に對して又た丁寧に會釋して行き過ぎられた。年の頃はまだ三十歳前後と見受けられた。歴史畫にみる和氣清麿公のやうな服装で二尺足らずの短かい黄金造りの劍を腰にさげて居られた。

『あれはミヤジ（宮主）です。宮主といふのは官職名で此區の卜部の長官です。』

『いつもあんな服装ですか。』

『いえ、今日は會議がありますので、あれは官服です。』

『お若いやうですね、そんな要職に居られますのに……。』

『あれは明治二十年頃に七十餘歳で人間界を去つた方です。明治十二三年頃に大藏省に事務局といふものがあつたさうでして其處の屬官が何かして居た人で格別な人物ではなかつたのださうです。たゞ敬神家で孝心が深く慈善心が強かつたといふ位なことださうですが……尤も五百年千年前の因縁はわかりませんが。』

自動車の速力は今度は少し早いやうな氣がした。見わたしたところ春たけなはであるのに紫雲英と菜の花のないのが何だか物足りないやうな氣がした。淨瑠璃寺の吉祥天女のやうな曲眉豐頬の女が和服で風呂敷包みを抱へて、しやなり／＼と歩いてるのを見ただけで其他途中は更らに何者にも逢はなかつた。

『あの婦人は茶の先生です。茶をやる連中は此界でもわざ／＼木炭を用ひたりしてゐるのでから念の入つたものですよ。』

人間界的な
石城島靈界

東洋では靈魂生活の原則として昔から散ずれば氣となり集れば形を成すといふやうなことを

言ひ、又た八九十年前來の歐米の交靈研究の收穫によつても大概に於てさうした原理を裏書きして居り、衣食住の事情等も只だ意念によつて起滅し、有るが如く無きが如く専ら心靈的生活であるやうに考へられるのに此界の如きは甚だしく物質的であり人間界的であるので車中で談論したが、高井氏は此の八九十年前來の多くの學者の心靈研究を一笑に附し、人間界に接觸し得る一種の靈魂の夢幻的現象で國魂の關係もあるが、他に神界攝理の事情もあると云はれた。さういふ風な立場から研究する熱が盛んになるならば日本國でも段々さういふ現象が多くなるであらうが、それはさういふ研究に應ずることを好む或種の靈魂の技巧的動作によるものだと言はれた。私は少年運轉手の後頭部に指頭大の禿があることを見つけた。

『此界に居る者の眞胎にも矢張り種々の缺陷がありますね。』

『それはあります。病氣はありませんが怪我をすることもあります。私も昨年の夏、朝顔の手入れをするとき踏みこつて裏の谷に落ちて腰を打ち、閉口しましたが併し恢復するのも早いです。』

高井氏は又た、

『人間といふ者も五蘊假和合のもので。佛法の言葉ですけれど其れに間違ひはありません。その意味に於て此界の我々の眞胎も又た五蘊假和合のものなんです。只だ其の結成の素質と方法が

異なるだけなんです。」

そんな話をしてる間に自動車は高井氏の庵に歸着した。

『西洋の心靈學者はアツスラルボディだのエクトプラズムだの種々の學語を製造して居ますが珍しい新発見は一つもなくまだ印度あたりの二千年前の研究の方が格段の進歩をして居たものです。』

玄關を上がりながらも高井氏はそんな話をつゞけられた。

やかて小姐が銀の皿へアイスクリームのやうなものを盛つて持つて來た。とても美味しいもので、五臟六腑の中まで香ばしくなるやうに感じた。

『これは此の山奥にあるイゲといふ果物です。ちよつと無花果のやうな形ですが皮をむくとちぎりに冷えて氷點近くの冷たさを保つて居ります。夏の末頃から秋にかけて一番うまく春は少し甘味が足りません。』

と高井氏は云はれたけれど、淡泊な甘味と清涼な香氣とは何とも云へぬものであつた。それから高井氏が次ぎの室へ行かれた時、小姐が何かクス／＼笑つてるのを高井氏がたしなめて居られるやうな氣はひが感じられた。高井氏は何か可笑しさを噛みこらへて居られるやうな顔つきで出

て來られた。何だか私に關したことからしかつた。

『何か申しましたか、私のことを。』

『いえ、なに、つまらないことです。』

高井氏は可笑しさがこみあげてくるのを抑へて居られる面持ちであつた。

『どんなことを云ひましたか。』

『徐大老爺と云ふんです。先生を幽霊だらうと云ふんです。』

高井氏はとう／＼笑ひ出された。小姐は裏口から何處かへ出かけて行つたらしく、そゝつかしい蹙音がした。

『面白いものを一つお目にかかせうか。』

と云つて高井氏は本箱の方へ行つて何か書類をさがして居られた。法帖類の雜然と積んである机の上に古びた硯屏があつて『幻世春來夢 淨生水上漚』といふ白樂天の句が貝細工で青白く光つて居た。どうも何處かで見たとある硯屏だと考へて見つめて居ると、青白い光りが黄色く變じ、ちら／＼と光りを放つて動き出して集つて一つの玉となり、橙黄色となり、やかて黄金色となり美しい光を放射しつゝ次第に膨脹して室一ぱいの大きな玉となり、それが私を

原稿用紙の
上に靈界か
らの光線

石城島靈界
訪問者より
心靈學者へ

包んで恐ろしい速力で飛んで行くやうに感じた。不思議にも私は其時すこしの不安も驚愕も疑惑も感じなかつた。が、それは三十秒位の間で光りがパツと消えた。私は眼を開いた。私は寢床の上に端坐して〇〇〇〇の祕印を組んで居た。スタンドの光りで時計をみると一時四十分。からだ冷えて居らぬのは私が端坐して居た時間が僅か一分間か二分間だつたことを證明するものであらう。

蒲團の中へもぐり込んで、その硯屏を考へてみたが、いつ何處で見たことがあるのかどうして
も考へ出せなかつた。

× × ×

わたくしが此の一小篇に執筆中は殆ど間斷なく原稿用紙の上へ靈界からマグネタイズされる光線がひらめいて居た。斯ういふことは近ごろ珍らしいことであつた。

序でに今この稿を結ばんとするに當つて少しく私の愚見を附記しておくことを許して頂きたい。——歐米の交靈會の報告等を澤山に讀んで居られる人たちから見られたならば此の石城島靈界訪問記は甚だ平仄の合はぬ奇怪なものと思はれるかも知れない。けれども私は平仄の合はぬやうに思はれるところを修正して發表するほど大膽なことは爲し得ない。ありのまゝを書いてお

て謹んで後日の審判を受けんとする決心である。

第一に於て靈界生活者の衣服とか什器とか家屋とかいふものは意念によつて欲するものが出る
するとか、又は現界に存在する物質から其の精氣を吸収して一時的に化出結成せられるとかいふ
ことの外に、殆ど人間世界のやうな種々の物品の存在理由と同様な理由によつて客觀的に實
在するといふことが、世界の心靈學者から疑はれるであらうと思ふ。第二には靈界生活者の幽體
といふものは其の本質は光りの雲のやうなもの、又た或る場合には一種のガス状の如きもの、又
た或る場合には一點の光體の如きものに過ぎぬが、それが必要に応じて或る形體を一時的に結成
するものに過ぎぬといふやうな定説（？）に囚はれて居る人たちから考へられたならば或種の神
界、靈界生活者の眞胎（玄胎）といふものが疑問となるであらうと思ふ。われ／＼はこれらの問
題に就て論争せんとする者ではない。吾等の所信は必ず將來多數の人類に承認せられる日が自然
に到來するものと確信して居る。なぜならば世の中に事實といふものほど確かなものはないから
であつて、消さうにも消すことの出来ぬ事實が、おそかれ早かれ認められぬといふ筈はないから
である。しかも人間世界に重大な關係のある問題だからである。

大神界の系統と攝理とによつて、靈界は文字通り八百萬の境界に區別されて居る。好んで交靈

會などに接觸せんとする靈の其の幽體なり衣服家屋調度なりが多くは何ういふ性質のものであるかといふことの知識は、如何に多數の機會と人によつて蒐集された材料によつて生み出された學說であつても、幾百千の靈界系統を觀察する上に於てそれは又た文字通り九牛の一毛の知識である。もとより左ういふ風な靈界にも高下の差等があり、其の高級な靈界生活者は吾々よりも遙かに勝れた道徳的生活を楽しんで居るものであるであらう。佛法でいふところの菩薩のやうに自己を殺して他を救濟せんとすることのみを念願とせる尊敬すべき存在者もあるであらう。併し又そんな風に假装するところの或種の靈もあるであらう。

私一個の私見として憚るところなく所懐を披露するならば、私が高井氏と會見した靈界は餘り高級の靈界とは考へられない。けれども地の神界大府たる神集岳、萬靈神岳の直接の統制下にあり一つの靈界であることだけは確言し得られる。したがつて此の靈界の生活事情は或る程度まで神集岳や萬靈神岳に於ける生活様式に似たところがあるであらうと考へることは不當ではあるまいと思ふ。眞胎（玄胎）を有せざる系統の靈界が正しいものでないとは言はれないけれど、正邪とか高下とかの觀念を離れて、多くの交靈會の報告が結論せんとするところの幽體生活の系統の靈界と、眞胎（玄胎）生活の系統の靈界とが併存する事實を吾等は承認せざるを得ないのであ

る。そして眞胎（玄胎）系統の靈界から幽體系統の靈界に移住することは、謫遷の意味の場合ばかりでなく陞格の意味の場合もあり得るとしても何だか今日の吾々の感情からしては餘り希望したくないやうな氣がすることを茲に正直に告白しておく。即ち此れと反對に幽體生活の系統の靈界から眞胎（玄胎）生活の系統の靈界に移住することは、榮轉の意味でない場合であつても、何だか嬉しいやうな氣がする。神界における刑罰の最重のものが靈魂を解消せしむることであることも記憶を新たに於て此邊のところを一考して頂きたい。

この大宇宙に於ける最高の神界のことは何とも言挙げ出来ないが、この地に屬する神界に限る限り、神靈界は正邪高下といふことの外に縦斷的に二つの系統に大別し得られるといふことになるやうである。その二つの系統の何れが正統的のものであるかといふことは神集岳や萬靈神岳の事情の若干を窺ひ知り得るならば、判斷は出来るであらう。わたくしは昨今靜かに考へて、今更らの如くムスピカタメ（産靈紋理）といふものの恐ろしさと有難さとをしみく痛感する。神界の御經綸進展と先輩の啓導とによつて神集岳神界から直接の氣線を開通し給へる石城山の天行居に結縁せる吾等の産靈紋理の有難さを思ふとき、言ひやうのない歡びを感じずには居られないのである。愉悅享樂の利己心の對象として或る靈界を憧憬するかのやうに歪んだ視線で吾等を見

んとする人もあるかも知れんが、正しからざる幸福を求めず、正しき幸福を求むることは幽顯に畏れざる心境であると信ずる。

佛法では萬事萬物に執着の心あるを穢土と言ひ執着無きを淨土といふのである。これは哲學的生活觀として正しいものであり、修養方法の極致であらうかとさへも思はれる。けれども其の悟りに囚はれて差別的な靈界の客觀的存在の實相を無視するならば直ちに魔道に墮して了ふので最も注意を要するところである。

善惡邪正をみわけるとも要するに執着であるけれども、この執着心が無ければ眼も鼻もないバケモノになつて了ふ。他者の惡を見ず他者の惡を責めずといふことは人間日常の私生活に於ける尊き寶訓であるけれども其の私生活に於てさへも破邪顯正の爲めには必要な方法を考慮せねばならぬこともある。況んや事苟くも君國に關する場合、神祇の古道に關する場合、天行居の正しき行進に關する場合には、吾々の信念上斷然破邪顯正の行動を必要とすること申す迄もない。水位先生も或る書き物の中へ「惡道をにくむこと甚だしき能はざるときは其の善道を好むことも亦た甚だしき能はず」といふ孔子家語の語句を記して其の下に「宇宙の妙理なり」と附記して居られるが如何にもさういふものであらう。昔公や和氣公や楠公を始め我國の官幣社に祭られてある

天行居の領

歴史上の人々は大概みな公私とも破邪顯正のために努力せられた人々である。われ／＼は「歪んだ仁」に囚はれないやう脚下を照顧せねばならぬ。利己的道德觀から「歪んだ仁」に囚はれるあやまちは吾々にも有り勝ちである。

天行居は他の宗教、哲學、心靈學等の眞似もせねば反對もせぬ。さればと云つて獨自の天地を創造せんとするものでもない。時節到來して神靈界の實相の或る部分が追々に開封されて行くのを寫して行くだけのものである。そしてムスピカタメ（産靈紋理）によつて次第に集つて來れる同志諸君と共に、楽しく意義ある行進をつゞけて行くだけのものである。地上人類の多數を救濟する根本道場として日本國石城山が認識されて將來どういふ風に道が開かれて行くのか其れは吾々にはわからぬ。吾等はいつでも計畫者でなく、只だ受身の態度で本分を盡して行きたいと思ふまでのことである。

天行居同志の一員としての私共の態度が受身の態勢であると云うても、進んで物事を考へたり努力したりせぬといふ意味でないこと勿論だ。少し荒ツぽい言ひ方かも知れんけれど、一身一家一國それ／＼の運命の機構と大體同様の意味に於て「天行居の運命」を考へることも失當ではあるまいと思ふ。それが許されるとすれば、天行居の運命の七割までが神定められたるルールを進

行するものと見ても三割の部分に就て吾々同志全體が責任を感じなければなるまい。歐米各國に於て八九十年前來多數の人々と靈界生活者との協力によつて築き上げられた心靈問題の幾多の報告を吾々は決して無價値のものとは考へてをらぬ。けれども其の收穫の大部分が甚だしく印度思想の影響を受けて居ることは冷靜公平な立場からみて『否』と言ひ張ることは出来ないであらう。何故にさうであるかといふことに就て私は獨斷的ではあるが一つの考へをもつて居る。いづれ其のことは又た機會をみて申上げたいと思ふ。たゞ結論的に一言しておきたいことは古來或種の印度系統の靈が多く歸幽者の靈を八方から引廻して活動して居ることである。そしてさういふ研究方法に何等かの興味をもつて居る人たちが交靈會を開くならば支那であれ日本であれ大體に於て其れに符合する現象なり報告なりを得ることになるのである。これらの知識の全體が靈界の事情の九牛の一毛であるといふ理由はさういふわけから來るのである。

私が『地に屬する神界』と云つたのは所謂クニツカミの界といふ意味ではない。この地球に屬する一切生類を統宰したまふ大神界の意味である。その神界の中府が神集岳であり、それに亞ぐものが萬靈神岳であること、及び其の神府と幾百千靈界及び人間界との關係等については從來天行居の出版物に於て大概發表されて居るから茲には云はぬ。

印度思想の或る部分の影響を受け又たキリスト教思想の或る部分の影響を受けて居る歐米流の交靈現象所産の人生觀、宇宙觀、生死觀、道德觀及び靈界生活狀況は佛仙界の狀況とも符合して居らぬ。佛仙界の狀況は却て神仙界または神仙界直屬靈界の事情に酷似して居る。嚴格なる意味に於ける神仙界は無執着、解脱、ますみ（眞澄）といふことを理想として居らぬ。『正しきムスピカタメ』といふことが理想になつて居る。この正統神界の理想は案外にも佛仙界にも影響して居る。正しき修理固成、正しきムスピカタメ（産靈紋理）を理想とするところの系統の靈界生活者は、執着と無執着とを超越した正しき幸福の世界に安住しつゝ修養努力をつゞけ、自他をして正しき修理固成に押し進めんとしつゝあるのである。靜かに吾々人間世界の狀況を考へてみると苦惱もあるが立派な一つの靈界である。神界を寫したのが此の人間界で、その意味に於て現界をウツシ世といふといふ古人の説は、言語學的に假りに無價値なものとしても、實際の事情として妥當な言ひ現はしかたである。昨年四月に私が訪問した石城島靈界の事情が、何となく所謂仙境臭く、何となく享樂的であり非努力的であると觀察せらるゝ人もあらうが、さういふ考へ方に就ては私は何とも説明することが出来ぬ。實は左ういふことに就ても適正な説明の資料を得るために再度の訪問を念願して居るのであるけれど今日迄のところ其の機會を得ぬ——併し又た私の

妄想かも知れんが靜かに考へてみるに、果して此の幽顯不二の大千三千世界は苦行的な努力を積むことのみで價值のあるものであらうか。佛法の菩薩の本領とするところの自己を殺して他を救済すること、自己を苦しめて他を樂ませること、それは尊いことにちがひない。正神界に於ても斯かる心がけや行爲を甚だしく嘉賞せられることだけは明らかかな實證がある。けれども自己を苦しめ、自己を殺すことばかりを無限につゞけて行くことが吾等悠久の生命の理想であると考へ得られない。執着のない解脱者には苦惱も苦惱に非ずといふことは此の問題とは別途に考ふべきものである。とにかく天行居で謂ふ所の天關打開といふことは、解脱世界の出現といふことを憧憬して居る内容のものではない。正しき修理固成、正しき産靈紋理の目標に向つて破天荒の一大躍進を成就することを内容とするものである。しかも其れは正神界の意圖によるものであつて彼れ此れ議論をさしはさむ方法はない。地上の人類が日本天皇の絶對尊嚴を認識せねばならぬ奇蹟的事件が発生することを中心として世界は正しき修理固成に向つて飛躍的發展を遂げるであらう。その場合には地質學的にも天文學的にも氣象學的にも其他種々の事情が次第に變化するに相違ない。人間の生理作用の如きさへも急激にはないが變化するであらう。地球上の酸素量の變動も何等かの事情によつて停止するに至るであらう。今日までのところ地上の酸素は徐々に減少しつ

『むすびの道』
『ますみの道』

つあるので此のまゝで行くならば何萬年かの後には地上の人類は窒息して了はねばならぬ。歐米諸國の交靈會に現はれる靈の多くは印度思想には無關係のやうな顔をして、却て異人種思想として嘲笑的な態度をとつたりするが、而かも巧みに印度思想の一部を脚色して居る。ヨーロッパ人は印度を征服したが、印度系統の或る靈團は巧妙な方法によつて忍耐強くヨーロッパからアメリカまでも或種の方法で征服しつゝあるものとも見られる。尤も指方立相の淨土といふやうなものが問題にならぬのだから友松圓諦さんとか梅原眞隆さんかと云つた風な流儀の御高説を承る機會はないやうである。——また此のスピリチュアリズムの運動系統の靈は殆ど異口同音に靈界の生活事情が地上生活的な觀念では到底理解し得られざることを言ひ、靈界の藝術とか歡樂とか愛情とかいふものも地上人間の觀念の範疇から全然かけ離れたものである様に説く。これは現代的知識階級の人達の俗耳に入りやすいので、正統神界や其の系統の靈界の消息などは肯定し難くなるやうに出来て居る。後者は萬事が人間界的な觀念の範疇そのまゝのものであるからである。『むすびの道』を神の道とし人の道とする正統神界の系統に屬する靈界と『ますみの道』即ち解脱の道を理想とする系統の靈界との二大縦斷面が思想し得られることは、此の地上生類中に於て最高の人類から種々の動物植物に至るまで男女陰陽の二大系統が存するやうなものである。併

し此の二大系統のものが油と水との如く絶對に區別されて居るといふわけでもないやうである。歐米流の心靈學說の渡來せざる百年前二百年前に於ける我國に於ても、正統神界の統制に入らざる靈や、又た特殊の事情で人間界に交渉する靈は、今日のスピリチュアリズムで云つてやうな蹤跡を残して居る。否な昔咄ではなく今日も隨所にさうした現象は存在する。又た眞胎(玄胎)を有する靈界生活者でも吾々人間に何等かの接觸を行はんとする場合は彼れの靈魂の放射する波動の如きものが何等かの形式によつて感知せらるゝに過ぎぬ場合が普通であると言ひ得られる。その『何等かの形式』といふものの内容は歐米に於ける交靈現象のそれと大概同様のものである。又た眞胎(玄胎)といふものにも種々の等差があること從來屢説の通りである。

昨年十一月二十九日に田畑齋務部長が來訪されたので、或る神事につき少しく愚見を申上げておいた。ところが十二月十日附の御書面で其の結果について申越された。それは十二月八日(?)の夜、石城山上に參籠せられて或る神事に従事せられた時のことを申越されたのであるが、「……身體次第に軽くなり、○○よりは盛んに靈氣噴出殆ど烟の如く雲の如く○○に至るや一層烈しく濛々として其の附近一帶全く烟か雲かの如き神氣に包まれ、身體は軽くフア／＼として夢心地かの如く……」と書いて居られる、これらのことに就ては其の神事のことを明記することが出

來ぬから茲に説明しにくいけれど田畑氏自身の體中から出た所謂エクトプラズムなどの作用でもなく、他の普通の靈界生活者が其處へ來て作用を起したのでもなく又た田畑氏の幻覺でもないのであつて、普通の心靈學說では説明の届かぬ圈内の事象に屬する。それは正統神界に屬するところの神法によつて附帶的に起る現象だからである。その神霧の如き靈氣は普通の光線の中に於ても普通の肉眼を以て睹ることの出来るものなのである。田畑氏は十二月十三日附の書面を以て更に其の追加的の報告を寄せられたが茲には發表し兼ねる。

靈魂が何度も顯幽出入を経過して進化し切ると何の體(幽體も玄胎も)なき全くの精氣のやうなものになつて了ふといふ心靈通信もあるが、それは只だ左ういふ系統の靈の知識に過ぎない。今更ら申す迄もなく眞胎(玄胎)を有する系統の靈は階段の向上するに連れて變化神通自在になるけれど、そんなたよりのなき存在ではない。靈界の原則として氣線が通じなければ紙一重のことでも千萬里の山岳に隔てられた如く相知ることが出來ず、氣線相通ぜるものは百千里も呎尺同様である。官幣大社の拜殿で神憑りをしてくだらぬ靈が憑つたりするのは此の氣線相隔たる事情の關係によるのである。この氣線の高遠なる大神界の幽政上重大な攝理の一つである。この氣線といふものが無かつたならば、如何なる神法神術も人間の知つてゐることはどんな靈でも直ぐ

に盗むことが可能であるけれど、正神界の許しが必要ならば其の席上に來合せてる靈でも全く感知することを許されない。正神界の系統に屬する神法道術を授けられても後に不心得なことか何かあつて神界から氣線を斷絶されるれば只の形式的のものとなり、知らず識らず他のくだらぬ靈に交渉して多少の所謂靈驗まがひのものが出沒するだけになつて了ふのみならず、よこしまに其れを授くるものも受くる者も神罰を受ける。沖楠五郎先生から堀天龍齋先生に相傳された太古神法至極の祕事こそは造化の神祕に參して實に此の氣線の閉閉にも影響を及ぼすところの大祕事で、人間絶えて無くして而かも縊かに存するところのものである。

大概の場合、死後の靈は其の自己の意念によつて一時的に隨時その姿を形成し得るものであるが、これは只だ其の意念の影の如きものである。高級の神祕の變化神通自在なる玄胎の妙用とは同日の談でない。

私は嚴肅なる心持ちを以て、種々の重大なる意味からして、石城山に結縁せらるゝ人々の道福を祝せざるを得ない。殊に第一の試煉期を経過し、所謂『洪水以後』の石城山に結縁せらるゝ人の『靈』の因縁に對して、謹んで敬意を表するものである。第一の試煉期を経過したとは云つても其れは大概の上から言つたので吾々は常に神祕の前に試煉の十字路に立たせられつゝある。

正義を假裝する惡魔の囁きは、立派さうに見える人を特に狙つて居るのだから油斷はならぬ。そんなら私のやうに立派にない人間は狙はれないから安心かといふとさうも行かぬ。立派にない人間だつて油斷や自惚れは大禁物だ。

尙ほ一言を付け加へておきたい。——それは正統神界の道は『むすびの道』だといふことに就てである。このムスビ（結靈）の道といふことの意味は天行居で從來折ある毎に力説して居る『ますみのむすび』の意味であること改めて言ふまでもない。先年來屢説して居る『ますみのむすび』といふことを能く會得して下さつた方でない、正統神界は『むすびの道』であるといふ極意が、わかつたやうでわからないであらうと危ぶまれる。この點に就ては特に多少の勞力を惜まれず御研究を願ひたい。天行居の十數年前來の出版物をくり返して精讀味讀せられるならば、もろくの迷ひは洗ひ去られる筈である。世の中が騒がしくなるにつれて種々の形式の靈的運動の如きものが流行的に出沒するであらうが、いづれも説明の方法と用語とを少し現代向きに工夫したといふまでのもので、何一つの『創始』も無ければ『發見』もあり得ない。大概みなキリスト教や佛説の部分的の糟粕に過ぎぬ。今日の世の中に於て『眞實』の價値ある發見を有する靈的運動とでもいふものがあるとするならば其れは神祕の啓導と先輩の努力とによつて神界の實

相が開封されつゝある石城山の天行居の其れであらう。經濟學で惡質は良貨を驅逐するといふ一つの思考方法があるが天行居の靈的運動が極めて地味で花やかならず世人の注意を惹かず其の發展の行程も遅々として恰かも草鞋をはいて一步づつ大道を進んで居るやうな状態を見て、他の種種の怪しげな靈的運動や神道の面をかぶつた團體の化粧品廣告的なトラック的な活動にくらべてどうも天行居が其れほどの大使命を帯べるものとして受取りにくいといふ人があるが、固よりトラックの行進は速かであり痛快であり、重荷を負うて草鞋ばきであるいてる天行居の足並みは野呂間に見えるであらう。しかし此の草鞋ばきで重荷を負うて汗を流しながら、他の砂煙りを立てて駛走するトラックなどに氣を取られず大道を一步々々あせらずに踏みしめて進んで居る天行居同志の頭上に、まことの神の微笑と榮光とは輝いて居るのだ。トラックの救済を求めぬやうな乞食根性は少しも抱かず、飽くまで全國同志だけの清淨な努力を統制して、われ／＼同志だけが粒粒辛苦して造つた草鞋に全運命を托して、まことの神の道を一步々々辿つて行くことが即ち天行居同志の正大な意氣だ。吾等が天日のもとにかぶる砂ほこり、全身に滲む汗、それは正しき神祇の殊寵の靈符だ。この天行居同志の尊い汗が天の時を得て全世界の靈魂を洗ふ清めの雨となつて光輝ある大神業は成就せられるのだ。

もう一つ附言しておきたいことは、私が昨年四月に訪問した此の石城島靈界なるもの生活が餘りにも氣樂で餘りにも苦惱が無いといふことに對し私の理性が種々の「？」を提起してくることに就てである。われ／＼人間生活に尊い意義の一つとして存在するものは吾等人間が經驗する『苦惱』そのものである。その苦惱なるものには現世に於て自己が犯した罪惡の反射運動もあり過去世に於ける宿業の清算もあり犠牲の聖業として課せられたる場合もあり將來に對する生命の淨化躍進に備へらるゝ場合もあり、其他種々の動因なり天意なりが織り込まれてあるであらうが、いづれにしても苦惱艱難は神より恵まれたる愛の接吻である。それが病苦であるにもせよ貧苦であるにもせよ又た家庭的苦患であれ社會的苦患であれ、その直接であると間接であるとを問はず、道俗公私一切の『なやみ』は只だ『より善きものへ』の飛び石である。若しも人間から困苦艱難を除却したならば靈魂の淨化も生命の躍進も其の機會の全部でないまでも其の大部分を失ふであらう。それは恰かも弓をひくやうなもので、其のひきしめられることが強ければ強いほど矢は遠きに達することが出来るのである。伊吹山行啓後の日本武尊、十字架のキリスト、謫居の菅公、楠公父子の生涯、その至大の艱難にくらべて吾々の苦患を體裁よく考へんとすることは總てが妥當ではあるまいけれど、兎に角人間界に於ては——少くとも現在及び過去の人間界に於て

は、困苦艱難は『人間修行』の必要課目であつた。數年前の天行居刊行物に於て庭木は移植される毎に愛の鉢を受けねばならぬと書いておいた。神武天皇の御東征も御道すがら至大の妨碍や災難が簇出し、作戦の大方針を中途から御變更にならねばならぬほどの大苦患が起つた。大小公私輕重緩急の差こそあれ、總ての人間生活に於て苦患そのものが神の愛の接吻である……と私は考へる。それなのに石城島靈界の生活には殆ど苦患といふものが存在せぬらしく、すべての居住者が上下の別なく氣樂に愉快に平和に生活して居るやうである。それでは生命の飛躍、靈魂の淨化を得る機會が得難くはない乎、極言すれば神の愛の影が乏しくはないかといふやうな『？』が色々の姿で私の目前を亂舞しようとする。けれど克く考へてみると即ち此處が人間世界と異なる點なので、不安もなく努力らしい努力もなくして修養の出来る世界なのであらう。吾々人間は丸木橋を渡りつゝあるやうなもので、不安や困難に注意しつゝ彼岸に達しようとするのであるが、石城島靈界の如きに在る連中は幅の廣い鐵橋を何の不安もなく苦慮もなく歩行して彼岸に達しようとしつゝあるのであらう。或ひは其の幅の廣い橋の上で時折は歩行をやめて悠々と周圍の風景を眺めたりして居る者もあらうが、吾々丸木橋の連中たる人間組では其の藝當が六かしいのであらう。『なに六かしいことがあるものか、悟りを開けば人間組も丸木橋が直ちに幅の廣い鐵橋だ。』

といふ景氣の好い人たちは何時の世にも澤山あつて釋迦やキリストよりも餘ッほどエライやうなことを廣告せられるけれど、どれもこれも一時の流行的の催眠藥だ。その催眠藥も誰にでも利くわけではなく五十人に一人か百人に一人か利いたやうに見えるだけの催眠藥だ。われ／＼は賣藥廣告に迷はず眞面目に靈魂の養生を守つて行きたい。『利己的な近道』を教へて下さる自稱聖者簇出の今日の世の中に於て、吾々はどこまでも『當り前の道』をあるいて行きたいのだ。吾々天行居同志は其の靈魂生活に於ても不當利得を願求するやうな妄念に馬鹿にされてはならない。われわれは『異境備忘録』等によつて明確に啓示されつゝある正神界の實相に基本し、『正しき』『まこと』の『敬神尊皇修善積徳の古道を同行諸君と相伴ひて靜かに正確に歩いて行きたい。吾々は人間世界に於ては人事を盡し又た神法道術に依り又た神祇の恩賴をたのみて凶を辟け吉に就かんと努力するが、其の行爲は神の愛に對する逆行爲ではない。その行爲に伴ふ反省と努力とが即ち尊き人間道の履行である。何となれば其等の方法は神祇より人間に與へられたものであるからである。人間が飲食物を攝取することが正しいと同様の意味に於て正しいのである。幽顯不二悠久の生命の生活圏に對し、これが管理者たる正神界の設計書を開封することを許され、人類動向の正しき指標を日本國石城山に建設することを命ぜられた吾々天行居同志の覺悟に就て、改めて靜か

に深く考へてみたい。吾々は佛教やキリスト教のデスマスクへ接吻する程の執着心を有してをらぬ。鬼眼睛を弄することは眞ツ平御免だ。墮飯而不廻頭。

もう一つ序でに言ふ。伊勢神宮（神宮と申し奉るの正しいけれど一般にわかりやすく伊勢神宮といふ）を中心とする神界と神集岳を中心とする神界に就ての吾々の思想的範疇のことである。このことに就ては先年來屢々説明して居る通りで、茲に言ふことも其れを重複して繰返すだけのものであるけれど序でに此際一言を加へておきたい。

伊勢神宮が地上の神宮神社の中で尊貴無比神聖無二の大神宮であることは今更ら改めて申す迄もなく一般國民が承知し切つて居るところであるが、天行居としては特に此點を十數年前來終始一貫して力説して來たのである。（十數年前來の公刊物これを證す。）單に力説したばかりでなく天行居同志は此の精神を實行して來たのである。天行居に於て何事か重大なことを行ふときには必ず伊勢神宮に奏告祈願することを常とした。そのことも或る部分天行居の機關雜誌に累年發表してある通りである。私が天行居の責任者であつた時代に私が親しく參拜の出來ない事情のある場合には元神宮司廳職員篠田幸雄翁が代理をして下さつた。伊勢神宮中心の信念は現任中川宗主も長鹽副齋主も花岡參謀長も同様である。否な全國同志みな然らざる無しである。京都支部の如き

も毎年天行居の「むすびの時」記念日たる六月一日には神宮に參拜して荒祭宮の大前に於て神兜奏上が例となつて居る程である。天照大御神が天孫を此の國土へ降臨せしめらるゝ時、御手づから神鏡を賜ひ「此の鏡は専ら我魂として吾が前を拜くが如く伊都岐奉れ」と仰せられた。その神鏡が伊勢神宮に鎮らせ給ふのであるが、畏れながら此れは只だ神鏡とかミタマシロとか申し奉るやうなことでなく、神鏡たゞちに大御神にましますとも拜すべき次第のことであつて、皇典にも「神鏡小瑕於今猶存此即伊勢崇祕之大神也」と明記してある通りである。即ち伊勢神宮が天照大御神の御本宮であらせられることは勿論である。

併しながら伊勢神宮の外には天照大御神の御宮殿無しといふことは私共は信じないのである。神鏡を天孫に賜ひし大御神はいづれにましますのであるか。神鏡所在の神宮の外には座しまさぬといふことは私共は信じないのである。神武天皇御東征の御みぎりも畏れながら三種神器は天皇と共に御動座になつたに相違ないが、天皇四年二月詔して靈時を鳥見の山中に立て、皇祖天神を祭り以て孝敬を盡し給ひしは天上にます大御神を始め奉り諸々の天神を祭り給ひしに非ざる乎。

何は兎もあれ我々は神集岳大永宮にまします天照大御神を拜み奉る折には伊勢神宮を拜み奉ると同様の感激と敬虔の念を禁ずることが出來ぬ。尊貴にして至神至靈の大御神の御事について

御本靈とか御分靈とかいふやうなことは吾々は恐れ多くて思考し得ないのである。神集岳といふ名が一般世人にいぶかしく聞ゆるのは尤も千萬であるが、神集岳とは即ち高天原である。先哲のいふ如く高天原は一ヶ所ではなく、又た高天原の語義は幾種にも解せられるが、此の地球に屬する生靈一切を統管せらるゝ神界大府たる高天原は即ち神集岳である。この意味に於ける高天原が他に存在するならば明證ある具體的説明を承りたい。いかなる方位に存在し如何なる地形で宮殿其他建築物の形狀位置、樹木河川橋梁、所在神祇の狀況等を承りたい。我が天行居は實に確信を以てこれが説明の用意を有するものである。而して神集岳の現界に於ける齋庭として石城山の聖地を吾々は信仰上の機關として居るものである。

太陽神界と神集岳との關係に就て私はまだ明確な知識をもつてをらぬ。わからぬことはわからぬといふより外はない。天祖の靈徳を太陽にたとへたといふ俗説は私共は信じ得ない。太陽神界の存在は確信する。そして其の神界と天祖と重要な御關係の存するならんことも確信する。強ひてさかしらに想像するならば神集岳大永宮にます大御神は太陽神界と時々來往し給ふか、それとも靈異無比の大神にましますれば同時別座にましますか、それとも荒魂和魂といふ如きことか、それとも印度哲學にいふ如き報身應身と申すやうのことか、何とも申し奉ることは出來ぬ。

要するに吾々は神集岳を中心とする活きた神界實相の福音を地上に宣傳し、此の觀念と必然的關係ある活きた敬神尊皇の大思想を地上人類に認知せしむることが使命の中心である。これは過去天行居の公刊物や天行居同志の蹤跡が如實に物語つてをるところである。吾々は此の信念、此の使命のためには何者の迫害をも惧るゝものでない。それは神より命せられたことだからである。

(昭和十年三月一日)

神道一家言 (四)

土佐國川村大禁法
家傳の御厭

宮地水位先生の少年時代の學友に川村茂之助氏といふ人があつた。この人は春秋左傳に力を入れて勉強し水位先生も亦た共に左傳を精讀せられ茂之助氏が水位先生の御宅へ宿泊さるゝこともあり水位先生が茂之助氏の家へ泊らるゝこともあるほどであつた。ところが茂之助氏は餘りに一心に左傳に凝り過ぎた爲めか發狂して了つた。左傳の中の文字を四五十字書いては人の顔を見て笑ひ、正心を失ひて全く淺ましいことになつて了つた。然るに茂之助氏には一人の老母(祖母か)七十五六歳の御方があるばかりで、其の老婦人が非常に心痛せられた。醫術禁厭灸術あらゆる手段を盡されたが寸功無く、次第に悪化して大聲にて日夜左傳を誦讀し、それに又た茂之助氏は惡疾を併發した。(その惡疾といふのは病名が不明だが或ひは身體の崩れるやうな病氣ではなかつたかと考へられる。)その時その老婦人が水位先生に向はれて「神々様の符札禁厭等は更らにて有らゆる藥方等も手を盡せしに其驗もなく其上に斯かる大病を發せしは前世の報いであらうか、茂之助に兄があつたが十八歳で惡疫のために歸幽した。この茂之助も當年十八歳で同じ病にかゝりし

は是れ前世の約束事ならん。我れ長壽せし故に斯かる憂き目をみるこそつらけれ。なることならば茂之助の身代りとなりて死にたけれど老少不定の命なれば此れを如何せん。さは云へど茂之助今命終れば我も共に氣を失ひて絶命すべし。醫者は昨日より匙を投げて御氣の毒なりと申すばかりにて今は運を天に任せて神明に祈るより外無し。若し惡運にて茂之助身まかりなば此の川村の家統は斷絶すべし。さすれば財寶ありても益無し。我家に累代傳來せし一箱あり。其中に一卷の軸物ありて大穴持神の禁厭の御法なりと云ひ傳へて極々秘藏し來りたれども其文字を昔より讀みたる人なし。故に病者あれば其卷物を以て首の上に戴かせ來りしが病者も多くは全癒せしが此度の茂之助の病につきては毎夜いたゞかせしかども其驗無し。されば其品ありて家内の者の病氣に驗しなれば、ありて益無し。君と茂之助とは親交あり、今は君の御一覽に供ふべし。」とて長さ三尺幅二尺ばかりの箱を一間より持ち來られた。水位先生は敬禮を加へて是れを開かるゝに其の箱は二十重になつて居る。(二重に非ず二十重なり。)中に一卷の書があつて黄土を以て表紙に塗り如何にも古物である。披見せらるゝに出雲國の古代文字を以て書かれたものだが其場で讀むことが出來ず寫し取らうとせられると、老婦人が模寫したものを渡されたので直ちに持ち歸つて解讀せられた。それは外感病を厭を除く祕辭であつた。そこで直ぐに川村氏方へ行かれて茂之助氏に

向つて數回唱へられると、今迄惱み苦しんで居たのが夢の覺めたやうな快光をあらはした。老婦人も嬉し涙に暮れられた。其の翌日も見舞に行つては唱誦せられると次第に快方に向ひ十五日目には離床し狂氣の方も共に全快して了つた。それで又た親しく勉強を共にせられた。然るに何かの都合で川村家は安藝郡玉造村(土佐)に轉居したので其後追々に疎遠になられた。ところが其後年月を経てから玉造村の人に川村氏の消息をたづねられると、「村の者どもが禿左傳と呼ぶので氣を悪くしたものが二年前どこかへ行つて了つた。」とのことであつた。悪疫のために髪が抜けて禿げて居たからである。

X X X

明治八九年の頃、安藝郡玉造村から一卷の寶物が出て大和國の僧が高價に買ひとつたといふことが傳へられたが多分それは川村家傳來のものであつたらうと水位先生は推察して居られる。しかし其の原卷は何分にも古物で朽ちたところが多く蟲害も甚だしかつたので文字は讀むべからざるところ多く、只だ古い珍物として賞翫するだけのものであつた。水位先生が老婦人から貰はれた模寫のものは損害なく文字も明瞭であつた。併し其れも二三年前に寫したもので相當の時代色があつた。原書の朽亡を恐れて後世に傳へん爲めに二三年前の人が副本を造つておかれた

ものと想像せられるのである。この副本は明治十八年三月に〇〇〇〇翁へ譲られた。私は水位先生が其れを寫しておかれたものを所持して居るだけである。

その秘言の中にカハトといふ文字があるが其れに就て水位先生は未だ考へ得ずとして居られる。私はそこを拜讀した時に直ぐに感じたことがあつた。無論これは水位先生が私に感格せられて啓示されたものだらうと考へられる。カハトといふのは或る靈木の所在地である。

そのカハトといふのは〇〇〇〇〇であるにちがひないと直感して此のことを長鹽先生に話した。(昭和六年春)長鹽先生は自分が行つて屹度さがし出すと言はれた。そして萱島丈夫氏と共に其れをさがしに行かれた。随分無茶な話で普通の人が聞いたら狂人と思つたかも知れない。私は無論全然未知のところであり長鹽先生も私の言葉を信じて陸地測量部の五萬分一地圖をたよりにせられるだけで雲を掴むやうな馬鹿げた計畫である。

汽車、自動車、徒歩、やうやくにして私がねらひをつけた地點に辿りつかれると果して一つの古社があつた。今は村社が無格社であるけれど神さびたる古社である。そして其の境内に一本の〇樹を見つけたが葉形が變化して居て物にならない。こゝらで大概の人なら引返さるべきであるが、長鹽先生は此の裏山に一本あるだらうといふ氣が湧いて來て萱島氏と共に裏山の探検

に出かけられた。が、そんな木は一本も無かつた。さすがに若干の疲勞と失望とで斷念しようかと考へられた時、なんと立派な〇樹が咫尺のところ一本輝かしい葉を見せて居た。其の時の嬉しさは爺さん婆さんが桃を割つて桃太郎が飛び出したやうな氣もちであつたらしい。長蘆先生は敬虔な感激を以て神祇に謝し、その枝の最も完全なるものを一枝折つて歸られ直ぐに私へ送りつけられた。

其の樹を根びきにして赤土のついたのを送られたやうに傳へて居られる人もあるが其れは虚妄で、只だ一と枝を折つてボール紙に巻いて送つて來られたのである。私は其れを直ぐ清き水瓶に入れ、約一ヶ月間にわたり或る神事に使用した。役目は濟んだが此の枝はまだ元氣なので或ひはと思つて裏庭にさしておいた。すると下部から葉が二枚づつ枯れて落ちて行つた。やはり一ヶ月も経過した木の枝を生かさうといふのが無理だとあきらめて居た。ところが段々下部から葉が枯れ落ちて行つたけれど一番上部にある一枚の葉が残つて枯れないのである。へんだなと思つて居ると、やがて其の一枚の葉の直ぐ下から二つの小さな芽が出て來た。これは面白いと思つて毎日見て居ると其の芽が次第に成長して立派な艶々しい二枚の葉となり、更らに其の下から又た芽が出て來た。こんな風で次第に茂り、今日では枝から枝が出て榮えて居るのである。

世の中の一切は感と應

禁厭であれ何であれ、感應といふことは嚴然たる事實である。世の中の一切は感と應とである。道俗大小公私みな感と應とである。私が或る意念感情をもつて此の書きものをして居る。それが印刷所を経て發送されて誰かど何處かで此れを讀まれる。讀まれるときに何等かの感應を起される。その事實が事實である如く靈異現象の感應も亦た嚴然たる事實である。原理が同じだから小問題に感應するなら大問題にも感應する。元寇のときに朝廷では公卿勅使を伊勢神宮に發遣ありて「御身を以て國難に代らん」と御祈念になり、神功皇后外八陵に告文を奉られ、其他日本全國神社佛閣あらゆる靈所で祈禱修法を執行したが其れを笑ふ者は日本國民の血類として許すことは出来ぬ。私共が所屬して居る神道團體が此の四月十四日に石城山上で皇威發揚、國難打開の目的を以て神事を執行するといふのも同様の理由によるものである。

世界の危機と靈的國防

今年明年を世界の危機であり又た日本の危機であると世界中の政治家も學者も軍人も同様に言うて居る。それには種々の理由があるので私共も勿論同感である。しかしながら私は愈々の危機は數年の後にあるものと考へて居る。このことは昨年一月二日宗主、總司令、參謀長が御來訪に

なつた時も申上げておいた。それから一年餘りになるけれど私の考へは依然として變らない。さればと云つて此處兩三年間は安心して居てよいかといふと左うは行かぬ。現界のことは神界の都合によつて時期が變化されるものであり、活機は利那々々に動いて居るものであり何時いかなる變動が突發せぬとも限らぬ。

近來幸ひにして我國の對外關係はよほど好轉して來たやうに見える。併し國際間の神經は意外なる小事件から急角度の轉回をする鋭敏なものであり今日に於て明日を逆睹することを許されないものである。又た吾々が國難といふ用語を使ふ意味は必ずしも日本と外國とが武器を以て抗争するところの戰鬪のみを豫想するものではない。産業國難、經濟國難、思想國難、等々々。國難の意味の内容は單純でない。古人も「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し。」と云つたが、思想國難は當面の大問題だ。天行神軍が標榜する靈的國防といふ意味は有らゆる國難を打開する靈的運動である。天行居を或種の右翼團體であるかの如く評評せんとする輩もあるが、天行居は穩健中正の神道團體であることは過去十數年の公刊物と天行居同志の過去の行動とが何よりも確實に立證して居るところである。社會の公安を害する如き左右一切の過激思想の毒ガスに對して、吾等は靈的の立場から防毒運動を爲しつゝあるものである。

元寇當時の全國的修法

建國以來今日までの大國難は何と云つても元寇であらう。そのときには日本全國の有らゆる神社佛閣や靈地に於て大々的に連續的に祈禱修法が行はれたから、石城山上でも行はれたことは申す迄もない。尤も其頃の石城山上は其の時代の風潮として兩部神道式であつたことは勿論であるが、元寇來襲の北九州の咫尺の地にある石城山、本土西端の靈異の聖地たる石城山に於て、如何に感激的な熱烈な修法が執行されたかは想像に難からざるところで、近郷近國の神職修驗者や武人等も参加したに相違ない。

春風秋雨六百五十餘年、吾等は又た茲に皇國空前の大國難時代に遭遇して、この石城山上に於て國難打開の祈禱修法を命ぜられるといふことに多少の感慨無きを得ぬ。

第二の元寇と石城山上の大修法

元寇といふものは日本の歴史にも世界の歴史にも大きな影響を與へた事件であり、大神界の經綸の上からみても極めて意義の重大なものであつたやうであるが、不思議にも其れから六百五十餘年を経た今日に於て、別様の形式を以て複雑に擴大された意味を以て吾等は第二の元寇に直面して居るのである。史實的に確證し得がたき上古のことは姑らくおきて神功皇后の三韓征伐は我

が國民の國民意識を新たにしたものであると同時に其の反對的現象として精神的に外國に屈從した時代を開いたとも云へないことはあるまい。即ち其頃から約一千年の間は日本の文化は唐制模倣時代だつたのである。ところが元寇によつて其の一千年間の空氣は一掃されて了つたので、このことは既に具眼者が云つてゐる通りである。元寇によつて我が國民の國民意識は更らに新たになつたのである。

これは日本國の立場から云つたのであるが、世界の立場から云つても元寇は大きな意義をもつものである。なぜならば忽必烈は先づ日本をたゞきつけてからヨーロッパを蹂躪する計畫だつたので其のことは近來學界に於て研究されたシリヤ文の古文書等によつて證明されて居るところである。けれども案外にも日本國の神風によつて吹き飛ばされたので歐洲蹂躪の大計畫は自然消滅となつたわけである。即ち其の時に歐洲文明が破壊を免かれたのは日本國の神風のおかげなのである。印度及び支那に於て生長した東洋文明は支那印度に亡びて日本に救済されたのであるが、西洋文化が破壊を免かれたのも日本の神風のおかげなのである。

然るに眞の世界文化の救済者たる使命をもつ日本國の愈々の正念場の仕事は今日以後に存するのである。日本國が空前の重大なる「國難」を課せられて全國民が一塊の火の玉のやうになつて

此れに當らなければならぬのは必然必至の運命である。太古以來の大齋場たる石城山上に於て國難打開のために天行居同志が熱誠をこめて一大修法を執行せんとすることも固より天意の發動によるものと吾等は確信して居るのである。

X X X

昨年春の石城山上に於ける亞細亞民族代表祈天祭の宣言書（昭和九年四月號古道第一面卷頭所載）は私が起草したもので英譯は中川先生を煩はしたものであるが、私共を亞細亞モンロー主義者と誤解されては迷惑する。モンロー主義といふ言葉も近ごろ多少意義の解釋を異にして使用されて居る向きもあるやうであるが、とにかく西紀一八二三年北米合衆國大統領モンローが發表した國際上の主義を吾々は奉ずるものではない。日本國が眞の世界文明の救済者としての使命を負荷するに就ては亞細亞諸民族に對しても非亞細亞諸民族に對しても同一の責任を感じて居るのであるが、先づ日本國の立場より周圍を眺めると實際的には昨春の宣言書の如き順序的意識を無視するわけに行かぬのである。而して昨春の祈天祭は儀禮的の一つの形式のやうなものであり顯齋的のものであつたが、今春の國難打開の山上修法は其の幽齋的のものであり又た神道團體としての靈的運動としては極めて實質的、内容的、效果的のものであると信ずる。昨春の宣言書も

石城山上に
於ける祈天
祭と修法と
の關係

末尾の一句即ち「こゝに謹みて天神の訶護を祈り奉る」といふのが吾等の目的であり、神道團體としては其の範圍を出でて考慮するものでないのである。即ち吾等の目的も行爲も飽くまで靈的範圍内に存するのである。即ち形而上的であつて形而下的運動には天行居同志として一指だも觸るゝものではないのである。

日本國は外國の壓迫を容さぬ。この立場から必然的に亞細亞民族は他民族の壓迫を許さぬといふことを亞細亞民族としての吾等は順序的に考へる。宣言書の中の「實際的に有効にして統制ある運動」とは何かといふと、日本を中心としての統制ある運動といふ意味である。

此の意味からして、昨春の祈天祭も要するに國難打開のための祈りであつたと言ひ得られるのである。これは全國同志諸君も御異存はあるまいと思ふ。さういふ風に考へると來る四月の山上修法は昨年四月の祈天祭と密接な關係があるが、併し昨年祈天祭のために今春の山上修法を執行するといふ意味ではない。來る四月の山上修法は種々の理由よりして切實な重大目標を咫尺にする眞劍的なものである。これは大概に於て天行居同志として殆ど常識的に克く理解されて居る筈である。

X X X

昨年十月宮崎縣に於て神武天皇御東征御進發二千六百年を記念する祭典が盛大に行はれたことは世人周知のことであるが、天皇は御東幸の御途次いたるところの靈地に於て天神を祭り給ひ、天業の發展を祈り給ひしことは種々の事情より當然に想像し奉らるゝところで、即ち北九州の「ウサ」「ヲカ」等を巡幸したまひ周防の「サマ」より石城山に臨幸しまして其れから安藝國府中へ御上陸になつたものと考へられる。然るに廣島文理科大學の新見博士、廣島高師附屬中學の津山教諭等の努力によつて書紀の所傳月日を現行太陽曆に換算して安藝府中埃宮へ御上陸の日は二千六百年前の一月三十一日なることが發見せられた。さうすると石城山臨幸は一月中旬もしくは一月二十日過ぎであらうと考へざるを得ぬ。必然の御順路であり太古以來の大齋場たる石城山へ若しも何かの都合で臨幸あそばされなかつたとしても、石城山麓の海路を東幸し給ひしことだけは如何なる人も否定は致されまい。(埃宮の所在を高知縣に求めるやうな學説もあるが。)即ち何れにしても二千六百年前に於て神武天皇が石城山上もしくは石城山麓に行幸しましたことだけは動かせない史實として誰もが認めるであらう。斯ういふ意味から考へても、今春石城山上に於て皇威發揚、國難打開の大神事を執行するといふことに格別な理由があるものと吾々は考へさせられるのである。

ついでに言はねばならぬ氣がするから言ふが、私は昨年五月二十七日に刊行した「天劍秘帖」の五十六、五十七頁に次ぎの如く記しておいた。

今年(今年)は神武天皇日向御發幸の二千六百年に相當するといふので格別の感慨を以て私は此の冊子の筆を執つた。書紀の紀年法が不正確であるといふ學説には必ずしも反對せぬとしても、神武紀元を二三百年または五六百年も値切らんとする各方面の學者の考へには輕々しく贊同いたしかねる。不實なるものを改めて實とすることには異議は申さぬが甲の不正確に代ふるに乙の不正確を以てする程ならば妄りに古傳を更改しない方がよろしい。現行紀年法は少くとも千年以來我が國土の上に凝り固つて大きな靈氣となつて居るのであるから現行紀年法によつて國民的感激を古典的にすることは決して無意義なことではない。東京帝國大學の名によりて編輯され、神宮神部署の名によりて頒行される曆に神武天皇即位紀元二千五百九十四年と大書されたものを笑ふことが學者の面目と限つたわけのものでもあるまい。又た神武紀明記の月日干支等も後世支那曆渡來後に逆算され記述されたもので且つ出鱈目のものと見る學説が通用して居るが、我國には太古以來天上傳來の曆法もあつたもので、大年神の御子ヒジリノカミ(聖神)と申すは日知神で、天時曆法に精通せられた神で大年神と共に農民から至大の尊敬を受けられた

ものである。云々。

X X X

今年(今年)は全國到るところに於て大楠公の六百年祭が執行されるであらう。今春石城山上で楠氏及び其の一門の慰靈祭をいたしたいといふ希望を申出でておいたが、長鹽先生から明年が六百年だと注意されたので明年になるであらう。萬事そよつかしい私(わたし)のことで年表もしらべずに申上げたのであつた。なるほど明年が六百年だ。佛法流では何年目を云ふが神道では満何年をいふのが通例である。先年關東大震災に就ての慰靈祭を神佛合同で執行の時、佛教側は七週忌だといひ神道側は六年祭だといひ、少々をかしみを感じた記憶がある。——とにかく今年(今年)にかけて全國民が大楠公の精神に新たなる切實な共鳴を感じようとして居るのは、此の非常時に際してくしびな曆數の對應である。

この無方齋の東北二十丁のところに矢筈ヶ岳といふ山がある、私の子供のときから親しみのあつた山の一つである。この山の八合目に敷山城の趾がある。この敷山城趾は先年來内務省囑託黑板博士等の數回の調査により愈々近く史蹟保存に指定されることになつて居るが、この敷山城こそ足利尊氏の大軍に對して最初の打撃を與へた勤王烈士の堅壘であつたのである。即ち周防國廳の

主將攝津助公清尊と檢非違使助法眼教乘及び石州溫湯城主小笠原藏人長光が大楠公の義旗に遙かに呼應して此の敷山城に立籠り、九州より東上し來る足利勢の大軍を抗撃したところで、激戦二日間にして殆ど皆な壯烈なる戦死を遂げたところである。年々むなしく草木の春を迎へて茲に六百年、忠臣烈士の英魂は今や定めし時を得て此の君國の一大非常時を護りつゝあるであらう。私は既に門外不出滿四年に及ぶので近ごろは無論近郊散步を樂むことも不能であるが、少年の頃より此の矢筈ヶ岳から無言の教訓を受けたことは忘却し得ざるところである。

斯ういふ風な史蹟は全國到るところにあるであらう。さういふところから全國の人々が如何に深大なる感化を受けてをることであらうか。さういふ感化の靈氣が凝つて始めて此の國難は突破し得られるのである。吾等の作業は古人との共同作業である。石城山上の大神事の如きも、其の時その場に臨む人たちだけのたらしきではない。吾々は決して自惚れてはならぬと同時に、又た其處に大きな強い協力者の存在を認めることによつて一層の感激を深くすることが出来ると思ふ。

X X X

人口増加による總ての艱難、それが國難の正體である。しかし思想國難といふやうな意味のも

の内容を檢討してみると必ずしも人口増加と因果關係のあるものばかりではないのである。このころ議會で問題になつて某博士の憲法論の如きも一種のマガツカミに魅せられて居るのである。又た多くの所謂自由主義者の言動の如きも然りである。吾々は靈的の立場から斯うしたマガツクモを吹き拂ふ爲めに其の責任の重大性を正視しなければならぬ。人口増加による總ての艱難、それが國難の正體である。」と云つたが、併し其れは決して國難の原因ではない。眞の原因は大神界の攝理による靈的事情に存在すること今更ら改めて申す迄もない。われわれは我國の人口増加を呪咀するものではない。人口増加は至極結構だ。人口増加は吾々日本人に苦難を加へるが、その苦難を正當に引受け、此の苦難を突破して行かねばならぬ天定の運命なのだ。(優生學上の或る見解の如きは此れは別に考慮すべきもの。)

しかし今日只今、吾等が國難といふ意味の中樞をなして居るものが軍縮問題であることは申すまでもあるまい。日本國の生命線ともいふべきものは海外貿易である。これを正當に守る爲めの軍縮問題であらう。日本海軍も米國海軍も要するに此の日本の海外貿易問題の影の如きものだ。もつと約言すれば支那に對する日米關係の爲めに日米海軍存在の意義があるのである。(少くとも七八割までの意義が其れだ。)併し此の問題は米國の生命線ではないが日本の生命線だ。來るべき

われ／＼天行居同志は時折東湖の正氣歌を吟誦して「本心」を直視しなければならぬ。東湖の正氣歌ぐらゐ能く日本精神を歌つたものは他にない。これを歌つて感激し得ざるものは日本人ではない。東湖は平生蘇東坡の「道義貫心肝、忠義填骨髓、直須笑談於死生之間」といふ語に心折したものだと言へられて居り、又正氣歌は固より文天祥の正氣歌に和したものであるが、東湖は斷然日本人であり其の正氣歌は東湖の正氣歌であり又日本人の正氣歌である。支那には正氣といふものは六百年來種切れとなつたのである。しかも天地正大の氣は支那から輸入したものでなく日本國生え抜きのものであり天上將來のものであり此れを一器に表現したものは日本刀だ。天押日命の言立以來日本國の山河に磅礴して居るものだ。

今回に限つたことではないが山上修法は眞劍でなくては何の役にも立たぬ。昨年刊行の「一心傳」の中にも

一刀流の海保帆平云く、「上段より向うの面を打つ時は必ず向うの肛門まで打ち割る心持ちにて打て」と。天行神軍の集團的修法の時等すべて此の意氣込みを以てし、一聲一念と雖も輕々しく發す可らず。

と書いておいたが、直接山上修法に参加せられる御方は固より、遠方より遙拜修法せらるゝ同志諸君も此の大覺悟を一層強化して貰ひたい。

山上修法に限らず總て神法道術は其の時の氣合が大切だ。しかも其の成績は何時も同一には参らぬものである。これは未熟な私の體驗から申すので、非常の達人はどうか知らんが、實際なかなか何時も同じやうには参りかねる。或ひは刀工が刀を造るやうなものであらうか。どんな名刀匠でも其の出来は同一に行かぬもので、どんなに注意しても瑕が出やすく、又た如何に工夫しても思ふ通りの焼刃は出来るものでないのである。斯かる場合たゞ「我」を棄て去つて天にまかせ、只だ一塊の赤心となつて全力を盡すの外はない。山上修法の参加中に於て他人の行動に氣を取られるやうでは役に立たぬ。各自たゞ其の本分を盡して直ちに神祇に咫尺するの覺悟が大切だ。

刀劍のことで思ひつゝいたが、天行居の石城山鍛刀場で謹作中の同志諸君の守り刀に就ては各自よく事情を諒解せられて急がせぬやうに忍耐を以て待つて頂きたい。庖丁やなんぞを造るやうには行かぬ。鍛刀場主任竹島君も敬虔な心を以て一口と雖もおろそかにせず熱心に努力中である。

又た昨夏この計畫發表の際には私は其の〇〇の修法だけを約束であつたが、中川宗主の御希望もあり私が更らに一口宛磐門神社の大前に於て太古神法の秘事を盡して修法することになつたので一層日時を要するわけである。竹島君の師匠は堀井俊秀氏で水心子正秀の嫡統正傳を紹いだ人、其の神技は既に久しく高識の士の認むるところで現代日本刀劍界に於ける異彩ある存在である。堀井氏の茶津の鍛刀場には畏くも宮様方が幾回も親臨遊ばされたことがあり、又た林陸相の如きも特に堀井氏のために力瘤を入れて居るのである。竹島君は此の堀井氏に師事して霜辛雪苦すること實に九年に及び、遂に堀井氏から允可されたもので、まだ大家といふわけがなく春秋に富んで居るけれど師の堀井氏より特に將來を囑望されて居る青年刀匠で、年少の頃から天行居同志であり天行居精神を以て多年鍛刀術を學び機縁熟して石城山鍛刀場を開くことになつたので、その心境が純粹であり天行居精神を以て奉仕するのであるから私も感激して更らに其の作刀の一口々々について正式に太古神法を以て神靈格合の秘事を執行することを引受けた次第である。

(昭和十年四月一日)

神道一家言 (五)

守護神(守護靈)に就

十數年前來の天行居の出版物を綿密に精讀せられるならば、こんな疑問が起る筈はないと思はれるが、又しても近來守護神(守護靈)といふものに就て質問して來られた方がある。例によつて直接返信せぬ代りに又た従前の所説を少し反覆しておく。

人間各個を守護啓導するところの特定の守護靈(守護神)といふものがあり、それは多くは數百年前に死んだ人の靈であつて、常人と何等か血縁的關係のあるものが多い。稀れには千年二千年前の歸幽者の靈もある。或ひは又た種々の動物靈や妖怪めきたるものに守護靈の實權を執られる人もある。……斯う云ふのが守護靈論者の主張であつて、或る神道教團に於ても斯ういふことを云ひ、心靈科學を奉ずる人の中にも斯ういふ考へを持つて居る人がある。歐米の心靈研究の報告の中にも此れを支持する意味のものが多いうやうである。けれども天行居では十數年前來一貫して其の邪見に反對して居るのである。さういふやうな靈に守護啓導されて居る人も稀れにはないでもないが、原則として人間はそんな腑甲斐なきものでない。善かれ悪しかれ獨自の思考力を

有するものである。然らば守護靈論者の道場等に於て、多數の人を並坐せしめて如何なる方法にもせよ精神統一に導くやうな手段を講ずると殆ど全部の人に守護靈出現と認めらるべき現象が殆ど例外無く起るのは、どういふわけであるかといふと、それは其の場合にくだらぬものが憑依するのと、一つは暗示による現象とである。靈眼の利く靈媒が誰をみても其人の守護靈をみることが出来るといふのは、其の靈媒と關係のある靈、または其の靈媒に交渉する人(審神者の如き、質問者の如き)に關係のある靈の爲すところの現象である。寫真に取ることが出来ても同じことである。

X X X X

將介石の守護靈は何であるかといふことを知る爲めに一人の靈媒にみせる。さうすると此れは六百七十年前に歸幽した斯くくの人だといふ。他の乙丙丁幾人も靈媒に時所をへだてて靈視させても同様のことをいふ。更らに他の正確の評判のある神憑りをする人のところへ別の人をやつて伺はせてみても同様のことを神様が申されたといふ。さうなつてくると將介石の守護靈を研究する人は、「私は冷静に嚴密に有らゆる手段を盡して科學的に研究したのですが將介石の守護靈は斯くくのものです。」と斷定して了ふのである。宋子文の守護靈も亦た然りである。なんぞ

知らん將介石や宋子文はそんな守護靈には何の關係もないのである。

斯ういふ妄斷によつて、某には五百年前の悪人の靈が守護して居る。某の守護靈は天狗である。某の守護靈は何處の龍神だ。某の守護神は老いたる白猿だ。某の守護神は三百年前の修験者の靈だといふやうなことが唱へられるのである。いづれも實は百中の九十九まで無實のものである。

職業的な靈媒、または其れに興味をもつ人には一種の守護神(守護靈)が交渉して居る場合が比較的多い。彼等に交渉する靈は其の立場を守る爲めに其れが萬人に原則的のものであるかのやうに世人に認識せしむる爲めに巧妙な種々の現象を起すことに熱心である。けれども其の妄を知る正見の人には全然別世界の問題である。この件に關し本田親徳先生は妖魅のためにたぶらかされるなど機會ある毎に力説せられた。正見の人が神通現象を行ふのは其の都度その目的によつて可然神靈に感合し、又は自己の靈力の活用によるのである。

X X X X

昭和五年か六年かであつた。某支部の或人から、「當市に正神界に感合する相當立派な靈媒が居る。其の靈媒の云つたことは從來道俗ともに殆ど適中して居るのみならず其の所説は何れも我が

皇典古傳と合符し、萬事極めて品位ある靈媒である。その靈媒に對して水位先生のことをたづねたら、水位先生は或る事情によつて正神界には居られぬといふがどうであるか」といふ質問書が來た。私からは例によつて返信しなかつた。天行居の出版物をよく精讀せらるれば必ず判斷の出来る問題だからである。水位先生が現に正神界に居られることは今更ら改めて申す迄もないことである。

いかに立派に見える靈媒でも斯ういふ問題になると大概間違ひを生ずるが、靈媒は詳細に説明するので普通の人は靈媒のいふことを信じて了ふのである。誰も知らない生前の事情や系圖等について説明するし、其れを調べてみると靈媒のいふ通りだから其他のことも靈媒のいふことが事實だらうと判斷するやうになるのである。斯ういふデリケートな問題について或る一つの實例を話せば大いに御参考になると思ふが、大正九年頃のことではあるけれど關係者が現存して居られるから迷惑をかけても不本意だから言はぬ。

世の中には可笑しい話が澤山にある。大正四年か五年かの頃、支那山東省濱縣といふところで一二の人が唐時代に歸幽した或人の靈を祀つて諸々の靈の降下法を執行して居たが、追々に種々の靈が憑るやうになり、遂に老祖と名乗るものが出現するやうになつた。この老祖といふのは日

本で云へば國常立尊とも申すべき宇宙的な大神靈なのである。それが追々に細かなことまで啓示をするやうになつた。これが紅正教の起源である。今日では其の信者は一千万を以て算せられ、朝野の名士の名が羅列してある。私は決して紅正教を嘲笑するものではない。今日まで世の中に善いことをしたか悪いことをしたかといへば善いことをして來たであらう。それだから今後とも間違ひなくやつて行けば結構なことである。併し根本問題として審神學上正確でないものは何彼の機會に一步誤ると人間社會を毒することになる。私は今日の世の中の名士といふ者でも、斯ういふ問題になると案外に認識不足なのに、ひそかに驚いて居る。本田親徳先生が全生涯を抛つて努力されたのは實に此の審神學の大問題だ。

話が後戻りするが、蔣介石や宋子文の守護靈を知らんとする或人の意念が活動して居る限り幾ら靈媒を取替へて研究してみても大概の場合同様の報告に接するのは勿論だ。又た全然別系統の人が其の靈媒の中の甲か乙かに靈視させても一たん斯うときめたら其の通りのことを云ふにきまつて居る。又た其様な研究のあつたことを全然知らぬ他の或る靈媒が蔣介石や宋子文の守護靈に就て同様のことを言ふ場合もあり得る。そんな問題に興味をもつグループに交渉する靈の氣線といふものは靈妙なもので、流石の本田先生も最初の間は此種の問題でだいぶん苦い經驗をもつて

居られる。

守護靈説は五十年や百年來のことではなく我國に於ても遠き昔から行はれて來たのであつて、用語こそ種々であつたがさういふものが認められて來たのである。いろ／＼の修驗者や行者めきたるもの、種々の降靈業者（稻荷おろしの如きもの）は古くより存在し、その存在と共に守護靈説も存在したのである。だから本田先生の如きも最初は其れを信じて居られたのである。ところが幕末から明治初年にかけて全國を行脚して有らゆる種類の靈媒または靈媒めいたものに接觸せられ、研究のために一所に數ヶ月も滞在せられたこともある。それから靈媒の養成にも多年大いに骨を折られた。そして御自分にも正神界に通ぜられるやうになり神祇より教示を受けられるやうになられた。その結果萬人みな守護靈ありとの説の虚妄なることを看破せられ、この守護靈説なるものが大いに人を傷つけ世をあやまるものなることを知られ、先生の『道之大原』には『其靈を守るものは其體、其體を守るものは其靈、他神有りて之れを守るに非ざる也。』と明記せられた。これは人間が天神地祇から守護を受けて居らぬといふ意味でもなく、又た人によつて産土神なり又は他の特に崇敬する神なりから守護を受けて居らぬといふ意味でもなく、所謂守護靈説の

X X X

妄見を打破せられたのである。同志諸君は本田先生が明治十六年に書かれた『神人感合法』を所持して居られるが、あれをよく精讀味讀して頂きたい。萬人みな守護靈なるものがあつて其れにしか感合できないとか、守護靈を通してでなければ他の神靈に感合できないとかの妄見は自然解消する筈である。

X X X

水位先生も澤山の靈媒に就て試験せられたのみならず、自ら正神界に出入せられ（或ひは脱魂法により、或ひは肉身のまゝにて）神祇の啓導により人間出入生死の秘機を知られ、守護靈説の誤謬を發見せられ、人間はそんな手數のかゝるおそまつなものでないことを知られた。堀天龍齋先生は特に此の守護靈説を力強く否定せられた。水位先生も堀先生も或種の少數の人々に取引先の特定の靈物のあることは無論認められたが、正しき神道靈學を奉ずるものは、そんな仲間に感染せぬやうにせねばならぬ。感染したら洗ひ落して自由に正神界の諸神靈に感合できるやうにせねばならぬといふことを力説せられた。吾々は無論其の方針でやつて來たのである。

X X X

圓悟心要に『得底人、心機泯絶し、照體すでに忘じてすべて領覽なし。只だ閑々地を守りて、

諸天花を捧ぐるに路なく、魔外ひそかにうかゞふも見えず。深々海底に行く、漏盡き意解して所作平常なり。三家村裏に似て異ることなし。」とあるが、吾等の期するところも大體そんなところだ。牛頭山融禪師未だ四祖に値はざる以前、牛頭山に居たころ百鳥感じて花を啣む、四祖に見えて後、百鳥また花を啣まずとある。彼れが牛頭山に居たころ道徳堅固修行精密、山の鳥が花をくはへて来ては供へたといふ。それは死んだ坊主の靈などが鳥に憑依してやつたことであらう。融禪師も其頃それをみてひそかに得意であつたかも知れぬ。ところが後に四祖に會見して正見を開いてより後は鳥が花を持ってこぬやうになつた。くだらぬものが寄りつけなくなつたのだ。斯ういふ境地から出てくるところの神通が眞の神通だ。

X
X
X

子供るとき聊齋志異か何かで讀んだことがあるが、支那の或人が怨みのある某なる者を殺すつもりで出て行つたが、某の邸近くなつた頃いろ／＼考へて心機一轉して許してやる氣になり殺意をひるがへして歸つて來た。ところが其の途中で或る道士が草庵から其れを見て居たが、彼れが殺意をふくんで往くときには多數の悪鬼が彼れを守護して居たのに歸途は美しい善神が彼れを守護して居たのが靈眼に映じたといふのである。

この話をよく考へて守護靈問題に對して頂きたい。これが本當の原則である。「自分は精神が邪悪だから邪惡な守護靈の司配を受けてるんだ。宿命だからどうすることも出来ないのだ。守護靈といふものは自分が生れた時からきまつてるんだ。」といふやうな誤つた大々的邪見を有する人は即刻その迷妄を打破して解脱して頂きたい。何の祈禱も修法も要せず此の迷妄の夢から醒めさへすれば直ちに大光明自由自在だ。鳥尾得庵居士が或人の求めに應じて「惡を思へば惡人になる。善を思へば善人になる。佛を思へば佛になる。」と書き與へたのは、やさしい言葉で佛敎の極意を説明し盡したものだ。佛敎に限つたことではないのである。誰れも彼れも善を思へば善人になり、神を思へば神になるのだ。守護靈説が世の中を暗くする大害は恐るべきものだ。

X
X
X

たとひ煩惱を生じ罪穢れに染みても改心して戒ひ清めを行へば清淨の心身に歸るといふのが我國の古代思想であり神ながらの道である。このことは少くとも天行居の同志諸君が深く覺悟せられねばならぬところである。

尋常小學修身書卷四。

瀧鶴臺の妻が或日たもとから赤い毬を落しました。鶴臺があやしんでたづねますと、妻は顔を

あかくして、「私はあやまちをして後悔することが多うございます。それであやまちを少くしよ
うと思ひ、赤い毬と白い毬を造つてたもとへ入れておき、わるい心が起るときには、赤い毬に
糸を巻きそへ、善い心が起るときには、白い毬に糸を巻きそへてゐます。初のうち赤い方は
かり大きくなりましたが、今では両方がやつと同じ程の大きさになりました。けれども白い毬
が赤い毬より大きくならないのをはづかしく思ひます。」といつて、別に白い毬を出して鶴臺に
見せました。云々。

これが神ながらの道の修養法である。心がけ一つで誰れも彼れもどんな善人にもなれるのであ
る。「某には邪惡の守護靈が憑いてるのだ。あれは駄目だ。あれのやることに善いことがあるも
のか。」といふやうな守護靈論者は一切の行きがかり的感情を捨て、改論してお互ひに世の中を明
るくするやう努力していただきたい。人間は一念一刻の間に神ともなり惡魔ともなるのである。
人間は念々刻々に天下至變の中心に立てるものである。

瀧鶴臺は私の草庵のある宮市の隣村右田村に居住した。鶴臺の妻は宮市の新町の人で私の草庵
から西方七八丁のところだけだけれど名がわからない。郷土史を編む人たちが兩三年前しきりに調べ
て居られたが、今尙わからないのであらう。

名もわからない一女性、一枚の書きものも残さない一婦人が、わづかな心がけから今や全國幾
百萬の兒童に深大な感化を興へつゝある。世間師でもなく、宣傳屋でもなく、自分の夫にさへか
くして只だ自分の心がけを直して行きたいと思ふばかりの名も知られない人が、今や此の大功德
を全日本國民に寄與しつゝあるのだ。

昨日の悪人が今日の悪人とも申されまい。今日の善人が明日の善人とも保證し得られない場合
もあらう。人間は其日々々々が誕生日であり日々々々新生涯を創作しつゝあるのである。

悪より善に遷ることが出来ぬやうに宿命的守護靈説を迷信するならば、教育も倫理運動も宗教
運動も意義の大半を失つて了ふのである。釋迦もキリストも孔子も決してそんな馬鹿なことは訓
へない。「守護靈説でも改過遷善は認められる。それは其人と守護靈と共に改心向上することがあ
るからだ。」といふやうな苦しい議論は成り立たぬ。

明治三十八年、田中光顯伯が宮内大臣在職中のこと。バルチック艦隊がやつてくることにな
り、我が海軍は必勝を期したとは申すものの併し又た實際どういふ結果になるか舉國最大の懸

念でもあつた。その時に昭憲皇后様の御枕邊に坂本龍馬が現はれて「微臣坂本龍馬で御座ります。此度の海戦につきましては些かも御懸念遊ばす必要は御座りませぬ。必ず皇國の勝利で御座ります。微臣等力及ばずとも皇國の海軍を守護いたしまする。」そして皇后様が御驚き遊ばされて御目覺めなされた際は龍馬の姿は消えて居た。皇后様は此のことを時の皇后太夫香川敏三子に御話遊ばされた。香川子は田中伯に話した。伯が香川子へ聞いてみると皇后様は龍馬の寫眞も御覽になつたことはないといふので、田中伯所藏の龍馬の寫眞を複寫させて皇后太夫の手を通して御献上申上げた。香川子が皇后様の御居間へ伺候した時に生憎御居間にいらせられなかつた爲め寫眞を御机の上に置いて引き退つた。間もなく皇后様は御居間へ御歸りになつて其の寫眞に御目をとめさせられ、いたく驚かれた御容子で「おゝこれは坂本龍馬の寫眞である。」と御感深く暫く御覽遊ばされたとのことである。……これは昭和二年の某雜誌へ田中伯が發表されたところである。

恐れながら此の事實を考へてみるに、坂本龍馬は其折に神界の御使者として皇后様の御夢に現はれたものであらう。宿命的守護靈論者はこれをどう考へるか、其の云ふところは大概推察できるが問題にならぬ。

中川宗主の
場合

中川宗主は去る四月、御宅の古文書など整理中に副島伯の寫眞と本田親徳先生の寫眞と水晶玉二つを錦の袋に入れたものとを發見せられた。中川宗主の御殿父様は根津權現に奉職して居られたので神職としての立場から本田先生の指導を受けられたものらしいが、數十年を経て、中川先生が天行居の要職に就かれてから思ひがけなく其れを發見されたといふところに面白味がある。恐らくは本田先生か又は令殿が啓導せられて天行居へ接近せしめられたものと考へるの外はないが、さればと云つて本田先生か又は中川宗主の令殿が中川先生の固定的守護神であるといふわけのものではない。中川先生は時に臨み事に應じて其れくの神祇の啓導守護を受けられるであらう。

X X X

守護神の
製造販賣

近來はどうか知らんが、十五六年前までは某神道教團(神道教團に非ずと自稱して居るけれど)では其の信徒に對して守護神の製造販賣をして居た。誰にでもきまつた守護神(守護靈)があるといふ流儀で、その守護神は本人が祭らねばならぬと云うてからに、其處の教主が出鱈目な守護神の名をつける。何々彦命とか何々姫命とかいふ名をつけるのである。そして神璽を造つて信者に授けたものだ。だから其處の信者は其の本部の御分靈を五十圓か三十圓で受け、更ら

に自分の守護神を二十圓か三十圓で拵へて貰うてからに、自宅の神殿に並べて祭つたものである。大國主神が自己の分靈を三輪山に鎮齋されたといふ傳説にこじつけてるのかも知れんが、其れと此れとは少々わけが異つてると思ふが、とにかく其處の財政上の妙策である點に於ては意義があらう。

X X X X

或る心靈學者の説明によると、男女交接の際の情念のエーテル波動が、靈界居住者に感じて引き寄せられ其の分靈が精子と卵との結合體に宿りて離れない。それがやがて守護靈なのであるといふのである。この助平的守護靈説は實に奇抜で、そんな風な靈媒が言ひさうなことであるが、大概の夫婦は一生涯に五百回か千回か交接するものであらうから、そのたびに情念のエーテル波動に引き寄せられて哀傷を感じるものと見える。御苦勞千萬なことである。

たゞの靈媒では如何に優秀な靈媒でも斯かる造化の秘機を窺知することは出来ないものである。ところが此處に人間千古の秘密の扉を僅かばかり開いて見せられた先輩がある。それは水位先生だ。先生は肉身を以て神界に出入し、人間に洩らすことのできない造化の秘機の一部を書きのこすことに成功せられた。それによると人間は妊娠したときに靈魂が宿るものではないのであ

る。そのときには父母の魄靈が胎中に於て結合するだけのもので、出産第一聲を放つときに魂靈が宿るのである。再生する靈も其時に宿るのである。又其時に稀れには他の靈が混雜憑格することもあるが其れは極めて稀れな例である。

出産後に於て魂と魄とが始めて結合するのである。肉體的精神的に父母や祖先の遺傳を受ける強弱は父母より受け入れた魄が出産の時に魂と結ぶときの度合によるのである。

X X X

或人の書面が来た。長文だが其の要點を約言すると、「心靈に關する二三の冊子を読んでみますと、人には皆な守護靈があります。悪人には悪靈が憑いて居ります。其人の邪惡の念と悪靈と共同動作をやつて居ります。つまり邪惡な人に邪惡な守護靈があり、病氣なども其れがやらせるのです。と斯ういふ意味に書いてあります。ところで不審になります。東郷元帥も中年迄は病弱だつたとのことですが中年迄は邪惡な人だつたのでせうか。又た病間録を書いて有名な綱島梁川は清潔なクリスチャンで立派な人だつたと申し傳へますが難病に悩み抜きましたから實は邪惡な人だつたのでせうか。私は子供の時から基督教的な空氣の中に育ち、クリスチャンの知人を現に澤山もつて居ります。その中で今日現に三人の紳士と一人の淑女とが難症痼疾で悩んで居られ

ますが何れも立派な人格者で敬虔なクリスチャンです。それらの人たちを邪悪な人とは私にはどう考へても考へられませぬ。天行居ではどう解釋せられますか。」といふことである。

此人は天行居の出版物を綿密に読んで居られないのだ。よく読んで居られるならこんな奇妙な質問をせられる筈はない。

病氣には色々の種類がある。憑靈によるものは百人に一人と云ひたいが其れほどなく千人に三人か五人位なものだ。けれども稲荷おろしまがひのところへ行けば殆ど何も彼も憑靈現象にして済んだ。病氣の原因を種類別に表示すれば千人の病患者の比例で、

A、九百五十人

普通生理的原因

B、四十五人

或る靈的原因

C、五人

憑靈

こんなものである。悪人も病氣になる、善人も病氣になる。中位もの人も病氣になる。又た悪人でも善人でも健康な人は健全だ。古來忠臣義士孝子節婦で病氣になつた人は餘りにも多過ぎるほどある。又たバクチウチのやうな無賴漢で他人の迷惑になることばかりやつてる連中で、生涯薬一服ものまず強健な人も餘り多過ぎるほど澤山に現存する。

徳富蘇峰翁は去る四月廿四日大阪毎日紙上で山室軍平氏を論評し「日本の救世軍をして今日あらしめたのは、誰れが何と云はうとも、實に山室軍平君の熱誠と、純信と、而して新島先生の所謂良心を手腕に應用したる常住不斷の努力と、器能とに歸せねばなるまい。然るに當然の結果として、君は健康を害し、それを好き機会として繼續者の爲めに進路を開きたるは、是れ實に一擧兩得にして、流石に君なればこそと察せられた。」と論斷した。つまり山室氏は、熱誠と、純真と、良心を手腕に應用したる不斷の努力とによつて、當然の結果として健康を害したのである。

素問に「百病は氣より生ず」とあるのは百病は悪より生ずといふのではない。又た百病は氣より生ずといふのも、或る程度までのことが、支那流の用字法によつて書かれたのである。「醉書は神全し」ともいふ。泥酔した人は恐怖心も計度の念もないから倒れても割合に怪我をしない。高いところから落ちても割合に大怪我をせぬ場合があるといふので「割合に」といふ意味なのである。李白みたいに酔ッ拂つて川へ落ちて土左衛門になる人もあるし、それでなくても泥酔して怪我する人は非常に多く皆様が常に目睹せられる通りである。百病は氣より生ずといふのも、病源

が喰ひ過ぎとか飲み過ぎとか他からの感染とかいつても、實は自分の氣が丁度病氣になるやうな状態に在つた場合が多いのだといふ意味である。さういふ場合が『割合』に多いのだといふ意味だ。精神さへ大丈夫ならば決して病氣になるものでないと云つて、某博士がコレラ菌を飲んだが軽い下痢をしただけだつた。忍術家が猫いらずを飲んだが何ともなかつた。といふやうなことは共通の原理にはならぬ。然らずといふ人は遠慮なくコレラ菌を飲んだり猫いらずを飲んだりして自分で試験してみられるがよろしからう。

X X X

邪念、邪靈
は病因か？

邪惡の念が病氣の原因だとか、悪守護靈が病氣させるのだとかいふことを云ふ人たちは靜かて考へられたい。英國ゼンナーは種痘法を發見して人類恐怖の的であつた天然痘を征服し、佛國パストールは狂犬病豫防注射法を創案して悲惨な疾患から人類を救ひ、我國の北里博士は某外醫と協力してデフテリアの完全な療法に成功し、エールリツヒ及び秦博士は六〇六號を得て梅毒の大淨芽療法を以て人間社會を明るくした。善人の患者にだけ奏效して悪人の患者には奏效せぬといふわけでもなく、信ずる者にも信ぜざるものにも一樣に奏效するのだ。守護靈も屁ツたくれもあつたものでないのである。其他の難症痼疾に就ても早晚完全的確な療法が追々に發見せられるこ

とは誰でも疑ふ理由を有せないと云つたところだ。煩惱が病氣の種だとか何とか云つたところで、和漢の名僧智識大徳で難症痼疾に安住したものは澤山ある。釋迦だつて腸チフスで死んだのだからな。

X X X

病氣といふものは本來無いものだ。無いものに惱んで居るのは迷ひだ。『自分に病氣は無い』と信じさへすれば直ぐに全快するのだと宣傳する人がある。これも或る程度まで結構な宣傳である。マーデンは『健康は只だ自ら健康なりと考ふることにのみより得らる。我等の身體は我等の思想の延長にして我等の心を客觀化したるものなればなり。醫術の歴史は結局各種の療法に對する信仰の興亡史たるのみ。』(十數年前に邦譯が實業之日本社から發行されて居る。)と云ひ又た『人は本來生命其者也。故に完全無缺其物也、我等の實體たる大宇宙は勿論健全にして完全無缺也。病氣に罹ることも苦しむことも無し。』と云つて居る。斯ういふ思想運動も誠に結構である。併し此れも素問の百病は氣より生ずといふのと同じ論法だ。前項に書いた種痘法、デフテリア療法等に就て一考ありたい。

私の俗縁者に宮村種之助氏といふ人があつた。私の所から二十里離れた某市に於て酒商を經營

病氣は本來
無いものか

して居た。非常の奮闘家であり萬事に就てエネルギーな人であつた。格別教養のある人ではないが寸暇を利用して佛教の講演會や精神療法の説教なども聽いて居られたらしかつた。先年私のところへ一寸立寄つて『人間は何も彼も氣一つの問題だ。殺生など云ふのも其れだ。茄子を踏んでも蛙を踏んだと思ふと蛙になる。蛙を踏んでも茄子を踏んだと思へば茄子になる。病氣も其れだ。私は近ごろ糖尿病になつたけれど餅も喰ふ菓子も喰ふ。そしてこんなに元氣に活動するんだ。』と云つて居られた。ところが其れから間もなく病勢が悪化して往生せられた。宮村氏は當地が故郷であり家もあるので時折展墓のために歸り當地の醫師吉田氏の診察を受けたこともあつた。其後吉田氏は私に君つて『宮村さんは惜しいことをしました。私の言ふ通りに養生を守られるならばまだ十年や十五年は大丈夫活動が出来たのに、何分にもあの氣性で養生が無茶だから。』と言はれた。吉田氏は醫師であるのみならず吉田氏自身が二十年来の糖尿病持ちだけれど飲食物に注意して活動をつゞけられて居られるのだから其の意見は相當信用すべきものであらう。

精神療法家が多數の患者から少數の奇驗を得た人々を例示し、正當な養生法をも破壊させて行くのは同情いたしがねる。その宣傳が巧妙であればあるほど少數の患者を喜ばせ、多數の犠牲者を生ぜしめる。

幻藥を以て
幻病を治す

精神療法家は云ふ『病氣といふものは本來無いものだ。病氣する身體からして本來無いものだ。無いものがあるやうに思うて迷つてゐるのだ。本當の自己は病みもせず苦しきもせず不可思議光であり無量壽如來であり神であるのだ。ニセモノの自己が嘘の病氣をしてるのだ』と。これも一と通り結構な説であり佛道などでは古來餘りにも言ひふるしてカビが生えてるほどの陳腐な説だ。しかしながらこんなことを云つて救世主のやうな顔をしてる先生が果して本當のことが分つてるのかどうか甚だ怪しいのである。病氣が幻虚であり身體が幻虚であれば、不可思議光も幻虚であり無量壽如來も幻虚であり、神の子といふのも幻虚だ。幻虚の病氣を離れ、幻虚の身體を離れては何者も無いのだ。これは吾々の云ふ『ますみのむすび』といふことが本當に腹に入らぬと理窟だけはわかつても臍落ちのせぬ問題だ。大慧書に云ふ『虚幻といふときは作の時も亦た幻、受の時も亦た幻、知覺の時も亦た幻、迷倒の時も亦た幻、過去現在未來皆な悉くこれ幻なり。今日その非を知らば則ち幻藥を以て幻病を治するなり。病瘥え藥除けば依然として只是れ舊時の人、若し別に人ありとし法ありとせば則ち是れ邪魔外道の見解なり』と、君子は千里同風である。

病氣する人が邪惡の人とは限らぬ。邪惡な人も病氣すれば邪惡でない人も病氣する。病氣の原
 因に就ては前項ABCに就てよく考へて貰ひたい。AとCとはわかるがBの意味は何かといふと
 此れも種々あるのである。キリスト教でも病氣が罪のあらはれであることをいふばかりでは決し
 てない。いろ／＼の場合あることを暗示して居る。生れつきの盲人についてキリストが「この人
 の罪にもあらず、親の罪にもあらず、たゞ彼れの上に神の業の顯はれんが爲めなり。」と云つたこ
 ともある。名はクリスチャンでありながら聖書に明記されたことを無視して或種の心靈學屋や俗
 靈術屋にかぶれて居られる人もあるが、靜かに反省して我執のない心になつて聖書を讀まれた
 い。

忠誠な人、正しい人でも種々の理由原因によつて病氣する場合がある。病氣する人は邪惡な人
 ときめて、人生の弱者たる地上幾千萬の病床の人に嘲笑を投げかけ、嘲りの心を以て弱者をむ
 ちうつといふことが、神の愛を宣傳する宗教的運動者の態度であつてはならぬ。しかも其れが眞
 理であるならば其の慘忍な態度もやむを得ぬかも知れんが無實のことだから「無智による慘虐」
 である。教養のない狂暴な無賴漢が人を打ち傷つくるのと神の前に於ては何の異るところもな
 い。

50

天行居に直接間接關係のある先輩に就て考へて見てもわかることだ。堀天龍齋先生は生れつ
 き慈悲深い御方で慈悲のかたまりのやうな人であつた。それなのに七十餘年の長生涯は殆ど
 病氣の生涯であつた。生れられた時から甚だしく弱い御方で、とても育つまいと思はれながらも
 御両親は伊勢神宮始め神社佛閣に祈願せられた。そのことは堀先生から私に送られた手紙に詳記
 してある。少年時代青年時代も病弱で、たゞ不思議に三十七歳から四十歳までの間一千有餘日
 の大潔齋中だけ元氣で薬一服のまれなかつた。其の大使命を果されて以後は又た病弱で殊に晩年
 は脊髄癆と胃腸病で悩まれたが、併し悩まれながらも安らかに風流生活を送られたので「悩まれ
 た」といふ語句はあてはまらない。病人が病氣に安住すれば病人でも何でもないのだ。堀先生が
 壯年時代に參禪せられた滴水和尚は近世の英傑であるが平生からリウマチと胃病があり晩年山
 代温泉療養中には肋膜炎を發せられた。堀先生と親交のあつた鳥尾將軍(得庵先生)も痼疾の結
 核のために遂に歸天せられたが、當時禪界各方面の巨匠に印せられて大悟大徹の御方であつたこ
 とは人の知るところである。堀先生とも鳥尾將軍とも格別な間柄であつた川合清丸先生も中年か
 ら晩年まで約三十年間病弱であつた。何等名利の念なく一意君國のために努力せられた川合先

生が邪念の爲めに病弱であつたとは考へられぬ。川合先生や鳥尾將軍と事を共にせられた山岡鐵舟先生は忠誠一徹の人であり、明治大帝の御信任かくべつであつた。山岡先生は劍禪一味の境に悟入せられたばかりでなく、人物として如何なる角度から見ても高潔にして一點の塵なく誰でも尊敬した大人格者であつたが痲疾胃痛の爲めに遂に大往生を遂げられた。腹はれて苦しき夜半やほととぎすといふのが辭世だ。苦しいのを苦しくないとはいはぬ。併し只だ其れだけなものだ。本田親徳先生の病名は何といふの知らんが小便つまりと腫れ病ひの爲めに難儀せられ歸天せられるまで直らなかつた。水位先生の令嚴宮地常磐翁は晩年十數年間中風で動けなかつたが、これは前項病源表示中のBに屬するもので、神界の祕事を人に語られた爲めであることは水位先生が明記して居られるところで確實である。水位先生が晩年五年間病榻の人であつたことも同志諸君御承知の通りであるが、よく調べて見ると其の以前も随分病氣せられたもので、明治二十六年十一月某神山に登られるときも歩行が出来ず籠がなかつたのでフゴに乗つて登られたやうなこともある。水位先生も神界の祕事を人に洩らした度毎に病氣することを手記して居られる。

邪悪の念によつて病氣になるといふことを宣傳する人たちは、無邪氣な子供が病氣することの

X X X

説明に窮し、それは多くの場合その母親の邪念の感應であると説くさうである。地上幾億の母親諸君の迷惑一と通りであるまい。母親の感情のエーテル波動の爲めに子供が病氣することも絶無とは云へぬ。稀れには有り得る。けれども稀れにある例を以て大概の例にすることは大きな誤りだ。この流儀の精神療法氏等は家庭の葛藤等についても何も彼も其の論法で説明しようとするのである。天理教あたりでもそんなことを説教しフタゴが生れるのは其の父か母かに二心があるからだと云ふ。ところが兩三年前に天理教現管長家にフタゴが生れたので全國の天理教教師は其れ以來フタゴの話だけは引つこめて了つた。天理教の現管長及び其の夫人は徳の高い御方である。なぜならばフタゴを生んで全國幾萬の天理教教師の迷信を打破することに成功せられたからである。

子供の無いのは夫婦の人格に缺陷がある爲めだとか、面白くない子供が生れるのは其の父母に倫理的缺陷があるのだとか、そんな説教が如何に多くの世人を不當に傷つけつゝあることか。稀れにあり得る説明を大概の例とするほど危険な事はない。乃木將軍の一家斷絶したことが將軍の不徳の結果では斷じてない。或る偉人の令孫が十七日間淺草で女給をせられたことが其の偉人の高潔な大人格に關係はない。何も彼も天の數なのだ。大哲カントも人間の善悪が幸不幸と一致せ

ざることをみて來世の存在を推定した。

X X X

私は子供の時から病弱で、まことに恥かしい人間であるが、それはやむを得ぬものと考へて居る。増上慢も致したくないが卑下慢も致したくない。あたりまへに平凡な理由を正視するまでのものだ。私は此世に生を受けた天命の額面は生活して來て経過して居る。今日の生活は額面以上の生活、プレミアムの生活である。まがりなりにも天行居の助言者としての責任の一部を果すことが出來たのは、格別なる神界の思召と先輩の守護啓導と同志諸君の友情のおかげである。それが今日の私のプレミアムの生活をつゞけさせて居るのである。も一つ理由を數へることが許されるならば其れは下半身觀念法と音靈法のおかげである。心氣を臍下丹田腰脚足心に充實せしむる觀念法は古來仙家にも佛家にも種々ある。自分の氣質に合つたものなら何でもよい。拘泥するに及ばぬ。

性質づぼらで横着者の私のことだから實は音靈法もこんきよく續けてるわけではない。少しからだのぐあひがよいと直ぐにやめて了ふから駄目だが、併し大いに音靈法のために助けられてることは否認できない。荒井大人も音靈法の信者で其のためにどれだけ病苦を軽減し得たか知れん

と常に言つて居られた。御山に居られる時も如何に忙しくても音靈法だけはやつて居られた。その靈驗を自知した人は其の妙味が忘れられんからだ。

一昨年の夏以來本部の白上庶務部長は胃癌といふので元氣を落され福岡醫大の診斷も受けられて死に支度をして居られた。私は手紙を書いて音靈法の精修をすゝめた。横着なことにかけては私にシンニウをかけた位ゐの白上氏のことだから其後やつとられるかどうか甚だ怪しいが、近來は元氣に勤務して居られる。去る二月に或る要件で一吋來訪された時にはよほど元氣に見受けた。男ぶりも少しよくなされたやうだ。

十數年來音靈法の靈驗に驚いた人は何千人あるかも知れん。何千人といふのは或ひは法螺かも知れんが何百人あるか知れん。何百通の禮狀が來てるのだから。

X X X

觀普賢行法經に云ふ、「一切の業障海は皆な妄想より生ず。若し懺悔せんと欲せば端坐して實相を念ぜよ。衆罪は霜露の如く慧日よくこれを消除せん。」實相とは無相のことである。何も彼もマスミのムスビと觀念することを言ふのだ。近ごろの教育を受けた人は先づ電子的宇宙觀を念ずるのも便利だ。これを實相觀とも無想觀とも佛性觀とも神相觀とも言ひ得られるであらう。端

坐して合掌の姿勢もよからう。鎖魂の印を結べば尙よからう。われ／＼は昔も今も「ますかゞみますみのかげをやどせどもむすびのかげもますみなりけり」を一信して疑ふところなく何物をも求めない。たゞぼんやりと此の實相觀をやるよりも音靈法は格別有效、靈驗あらたかだ。音靈法をやれば其の結果に於て實相觀にもなるのだ。實相觀では先づ精神上の妄想を拂ひ其の結果肉體にも影響するのだが、音靈法では直ちに肉體に影響して氣血の結滯が緩和解消し同時に一心明澄をも併せ得るのだ。もとより身心不二だが其の話になると話がつれるから茲には申さぬ。音靈法は又た如何なる人にも如何なる場合にも絶対に無害といふ事と、その觀法が至簡至易で其の靈驗の顯著なところがありがたい。人間は八百萬の神であつて各自に機縁が異なるのであるから、修法上の形式方法を萬人劃一的に強ひるのは考へものだが、毎夜心氣を下半身に充實せしむる觀法を行ひ毎朝音靈法を行ふといふやうなぐあひにこんきよくつゞけて行きたいものである。

時は幕末のころ、名古屋市の宿を出てぶら／＼と八事山中に辿りついた一人の雲水があつた。薰風習々、青葉若葉の中をいゝ氣持で歩いて居た。又た一人の乞食みたいな男が雲水氏のあとになりさきになりあるいて居た。雲水氏は乏しい財布の中から疏山壽塔の話の三文錢か何か知

らんが若干の錢をつまみ出して其の乞食みたいな人に與へようとした。乞食みたいな人は手を振つて「わしはそんなものはいらぬ」と云つた。雲水さん一寸テレちやつたが元來樂天家の雲水さんだから其れから色々話しかけた。旅は道づれだ。ところが其の乞食みたいな人は六七百年前の歴史上の種々の事件を自分が實見したやうに話す。雲水氏は怪しみながら聽いてゐたが段々問答するうちに次第に畏敬の念が生じて來たので改めて其の乞食みたいな人を拜して訓へを乞うた。乞食みたいな人は一つの仙訣を授けて去つた。その乞食みたいな人こそは佛仙正光眞人であつた。その雲水氏は原坦山であつた。

坦山は奥州磐城の産、江戸に出て神林清助に就て易を學び、當時の幕府の大學たる昌平黌を卒業し、後に故あつて佛道に入り、淺草總泉寺の英仙に就て得度し、參州青眼寺の達宗のところまで窮屈な思ひをし、やがて宇治興聖寺の廻天に印せられ、更らに風外和尚のもとで苦勞して遂に證明せられた。後にある事情より生理解剖學等もやられた。それから正光眞人より授かつた仙訣を基礎として身を以て再三死地に入出して實驗實證の結果、惑病同源といふことと腦脊異體といふことを力説されたのである。(明治元年頃。)

坦山翁には面白い逸話が澤山にあるが、京都の叡山で律部の研究をやつた後の頃、東山に卜居し、方六尺の車上屋を造り、蝸廬庵として住んで居たが、明治の初年頃には東京淺草で又そんな生活をして賣卜して居た。そこへ加藤弘之博士がたづねて来て帝國大學文化印度哲學の講座を擔任させた。明治十八年には學士會員になつたが佛道關係の人で學士會員になつた人は坦山が始めてである。明治二十五年七月二十七日『拙僧儀即刻臨終 仕候間此段御報知に及ぶ』といふ葉書を澤山に自筆で書いて出し、樹々として往生した。時に七十四歳。

坦山の寫眞をみると容貌偉秀、童顏銀髯、フロックコートの上に袈裟をかけて一見して普通の佛道者でないことがわかる。實際その頃婆羅門だなんて攻撃も受けたが平氣の平左衛門であつた。今日とちがつて明治初年頃に僧侶で散髪して洋服を着用して牛鍋をつゝいてるやうな人は他になかつたであらうと思はれる。全く世の中を遊戯三昧でやつてのけたのである。鳥尾得庵先生とは少し年配は違ふけれど親交があつた。得庵に贈つた坦山の詩を讀んでもわかる。佐々木狂介氏の追悼坦山老和尚文の中にも（原漢文）『和尚つねに酒と豆腐を嗜み、日夕對膳、醉へば則ち唐詩を吟じ、俗曲を歌ひ、傍若無人……和尚得庵居士と神契あり。屢々相往來し、互ひに禪機を闘はす。余常に側に在りて兩雄舉止の神速と其の殺活自由なるとをみる。云々』

坦山の説では『惑病は同源にして妄識の結滯なり。妄識は脊體より發する所の粘液腦中に結滯し胸腹及び全身に蔓延するもの也。之れを驅除するの法は最強至猛の定力を除くの外更に別法なし。』といつた。坦山の説を吾々の用語に譯して言つてみれば、氣とも液ともなる魄液が腰部から脊髓を上流して腦に於て魂氣と和合し其れが全身に流行する。その和合の度合と流行の働きぐあひで惑ともなり病ともなるといふのにある。そのことは種々の方法を以て反覆して説いて居る。脊體より上流するものを陀那と云ひ、腦に於て阿賴耶識と和合してからに下流するものを末那識といつたりして居る。そこで腦脊の接續を斷ずる方法に就ても研究したのである。

『種々工夫し最強の定力を用ふる數年、遂に臍下の大癰を發す。世人皆な必死と爲す。而して僅かに死を免る。時に三十八。是れ定力を以て胸腹の妄識を驅逐するが故に大塊腫を發するなり。更らに進んで腦胸に最強の定力を用ふるもの數年、遂に奇病の腦病を發す。身體羸瘦し心思異常、世人皆な發狂と爲す。時年四十二。是れ定力を以て腦胸の妄識を驅逐するが爲めに心識に大變動を生ずるなり。爾後二十餘年種々工夫實驗し近來又た一奇病を發す。總身不隨意にして飲食を絶するもの十餘日、世人皆な必死と爲す。醫師の診斷に心臓の變質腸胃の衰弱なりと。余これを肯はず。故に其藥を服せず。蓋し是れ定力を以て驅逐するところの腦胸腹妄識の殘餘を排除

するが爲めに身體非常の大奮力を發するものにして若し身體の生力劣弱なるときは必ず死す。醫學等の能く及ぶところに非ず。故に余醫藥を假らず居然として唯廢退の妄識と生力の戰鬪を想觀す。大凡百餘日にして妄識の餘滯を除盡することを得たり。時年六十五。こんな風な藝は十人向きがせぬ。坦山なればこそである。定力といふのは分りやすく云へば此處では純一無雜の精神集中力のことだ。『惑體病源の所在に堅確の定力を用ふれば恰かも氷雪に沸湯を澆ぐが如く溶解消盡痕跡を絶するに至る。』とも書いて居られるがナマ兵法は大怪我のもとだから注意を要する。

坦山の研究實驗が圓滿靈妙になつた明治十八年頃には『先輩未發の大秘訣とも稱すべきものは腦脊の接路を斷するの一事是れなり。』と説かれ其の神祕の所在すなはち腦脊の接路なるものは聽神經に大關係あることをいはれ、西有穆山師との論戰に於ても『修證の要處は耳根圓通にあり。』と主張された。又た福田行誠師との論戰に於て『今之れを實驗するに聞根は陀那昇流と覺性下降と交際の地にして余所謂和合心識の地位也。こゝに於て聞者を觀察して陀那の流れを反入して寂靜無爲の覺性を證するなり。』と云はれた。坦山翁が正光眞人の仙訣を授かつてより幾十年の命がけの實驗で證明せられたところだ。これを救世濟民の爲めに弘通するつもりで佛仙社なるもの

を立てられ十數年間努力せられたが、坦山翁が道山に歸られてから今日迄四十餘年になるけれど其の志を繼ぐ者がなく、全く消え去らんとして居る。今から二十年前に坦山直傳を裝うて賣出した人もあるが、そんなものは批評したくない。

靜かに考へてみると、我が音靈法なるものは坦山翁一生の努力の結論を極めて有効に簡易に實行する秘法であらう。音靈法を私に授けたのは本田親徳先生の門人佐曾利清翁である。その根源は本田先生が鎮魂に用ひられた石笛にあること勿論だが、音靈法の熱心な行者としての佐曾利翁の努力も尊敬すべきものと思ふ。佐曾利翁の研究は如何なる程度までか坦山の研究と合符するところがある。佐曾利翁の人格については兎角の風説もあり、私も随分面と向つて激論したこともあつたが、併し其れは其れだけのことと功績は功績である。佐曾利翁は佛典にも精通して居られたが、すつと以前には山口縣廳に奉職して居られたこともある。佐曾利翁は音靈法の一、二張りで、治病も神通も一切これを基礎とせられた。音靈法によつて佐曾利翁から直接救はれた人は東京、中仙道、北陸にかけて幾千人あるか知れぬ。併し音靈法を別として他の或る信念は私は佐曾利翁と一致することが出来なかつた。佐曾利翁と私が激論したのは東京に於てであるが、翁は久

しぶりに大正十年に一寸山口に歸られたときにも私は面會した。山口に翁の縁者の方が居られる。

天行居でやつてる音靈法は餘りにも至簡至易で且つ平俗だといふので馬鹿にしてる人があるが、事實靈驗がありさへすればよいではないか。少し慣れた人は汽車の中でも電車の中でも懐中時計を耳にあてて直ぐに心氣を靜澄にすることが出来る。先月號の古道紙上に梅本大人が音靈法の威力と題して發表されたやうなことは他にも幾多の實例がある。佐曾利翁は古道具屋で買った眼醒し時計一つをさげあるいて幾千人の病者を救つたのだ。私が翁を東京の假寓に訪問したときも翁の坐して居られる耳もとへ垢まぶれの風呂敷で包んだ眼醒し時計が天井から釣るしてあつた。翁は用事のない時は其處に安坐して、翁の所謂『延命地藏』になりすまして居られた。其頃翁は甚だ不遇で、よその屋根裏に住んで居られた。天井（實は天井はない）が低いのと暗いので私は何時も閉口して翁を近所の牛肉屋へ連れ出して喧嘩したりしたものだつた。昔のことを考へると何も彼も夢だ。いや實は今日只今も夢中に夢物語りをしてるんだが。

X X X X X

坦山翁の定力のことを一寸言つたから萬一誤解される人があると困るから念のために申しておくが、音靈法には定力は不要、否な其様なものは邪魔になるのだから誤解のないやうにして頂きたい。音靈法の秘訣が何處にあるかは大正十二年出版の『天行林』にも説き、又た石城山の道場で親しく御指導申上げて居る筈だ。

X X X X X

坦山が七十年前に創唱した腦脊異體説は果して眞理であるかどうか知らぬ。反對論も輕々しく信じ難く、死屍を解剖して得た知識で、生きて居る人間の生理が完全に説明されるものではない。それはとにかくとして病氣の全部ではないが或る部分はその病原關係に就て脊髓に考慮される日が来るであらうと思はれる。

理論は如何様にも變化をみるであらうが、音靈法の靈驗だけは平易な方法で此れを修行した殆ど總ての人が承認するのだから事實を疑ふわけには行かぬ。

岡田式靜坐法によつて救はれた人は全國に何萬人あるか知れぬ。その健康長壽を目的とする岡田式靜坐法の創始者たる岡田氏が四十餘歳で死なれたからと云つても岡田式靜坐法の價值に關係はない。岡田氏の短命は天の數だ。音靈法を奨める私が強健でないからと云つても音靈法の價值

に關係はない。音靈法は佐會利翁が中仙道北陸方面で驚くべき靈驗を認められてからでも五十年の歴史を有して居る。又た全國の天行居同志諸君も十數年前來その實地の效驗を確認して居られるところである。私は全國の同志諸君が此際あらためて音靈法の認識を強くせられ、此の平易にして絶對無害にして驚くべき奇驗ある神法を日用左右に活かし、自他を救ふと共に、その福音を地上に宣傳せられん事を切望するものである。音靈法の宣傳と共にムスピの時の神咒を宣傳して頂きたい。神集岳を中心とする正神界の實消息等は恐れ多いから初めての人などには話さない方が宜しからう。

音靈法修行のとき、妄想が去來して困るといふ人がある。妄想大歡迎、これが實は音靈法の秘訣なんだ。そのまゝこんきよくやつてさへ行けばよいのだ。だから誰にでもやれるといふのだ。

妄想といふものはない。それがあるやうに思ふのが妄想だ。が、まあ妄想は妄想としておいて其の妄想と共に仲よく音を聴いてさへ居ればよろしいのである。妄想を嫌へば何時間つゞけて居ても妄想は消えない。妄想歡迎の態度になり、想ふことがなければこしらへても想ふといふ心

もちでやつて行けばいつしか種切れになるのだ。併し種切れにならず妄想が出沒起滅しても結構だ。それで立派に效驗があるから妙だ。妄想が種切れになる事を希望してはいけない。釋迦一代の說法も實は妄想の陳列なんだ。妄想ほど有りがたいものはない。佛は眞理を説きたまへり。眞理は妄想にあらず。』といふ人があるかも知れん。それが即ち妄想なんだ。『法に所證あるは皆な是れ魔業。』と釋迦も云つてゐる通りだ。佛所證の目的は佛法の道理を離れさせて何一つ知らないでよい安らかな身分にするためにあるのだ。それだから『馬祖成佛するとき馬祖すなはち馬祖となる。』と云ふのだ。馬祖が眞理を知つて悟りを開いて何かになるのではないのだ。人間は誰でも始めから解脱してゐるんだから改めて修行して解脱しようにも解脱のしやうがないのだ。永平初祖は『我れ天童先師に見えて眼横鼻直なるを認得して空手にして郷に歸る。故に一毫も佛法無し。』とやつた。そんなら釋迦は何故に出世し何の爲めに說法したかと云ふと此の眼横鼻直なることを知らしむるためなのだ。これが佛法の偉大なるところだ。今日の日本佛教五十六派の坊さんたちに一人十萬圓宛與へれば直ちに皆な此の通りに説くだけけれど、十萬圓無ければ此の通りに説くと生活に困ることになる。

神ながら言擧げせぬ國は流石神國中の神國だ。神ながら言擧げせぬ道こそ道の中の道であり道の根本である。食後食を思はず、姪後姪を思はず。自由の國に自由の聲無しと云ふ。世界が眞の平和になつたら平和の聲は存在せぬ。儒教や佛教やキリスト教が日本國に發生せずして外國に發生した理由は此のためである。儒教や佛教やキリスト教が日本國へ來て始めて眞の光りを發するものも其のためである。我が神ながらの道を奉ずるものは決して儒教や佛教やキリスト教を排斥してはならぬ。それらは皆な我が神ながらの道の用である。實際問題としては眞に有力なる神道團體が出て、それらのものをリードして行かねばならぬのである。私が佛教やキリスト教を排斥するかのやうに誤解してゐる同志もあるが、活眼を開いて十數年前來の出版物を冷靜に精讀せられたい。どこに佛教やキリスト教を排斥したことがあるか。時には抑下卓上の筆法を以て或ひは他の事情を以て佛教やキリスト教へ當つたところもあるが、全卷を通覽せらるれば私の眞意はわかる筈だ。但し佛教やキリスト教にも弊害のある部分がないとは云はぬ。それは又た所謂神道團體の中にもあるのだ。神道天行居の創立に當り制定した信條の第十一條に吾々の態度は明示してあるのだ。

われ／＼は佛教やキリスト教を排斥せざること勿論であるが、しかしわたくし自身は及ばずな

がら古神道傳道者の一人を以て任じて居るものである。吾々が日本人として日本國土に生れたのは神ながらの産靈紋理によるのである。民族的の神が何うの斯うのといふやうな人たちは一を知つて未だ二を知らざるものである。神種を以て神國に生れたのは偶然でない。佛教流に云へば報身報土もとより因果あつて存するのである。この正因果を明らかにして此の報身報土を護るのが天の正命である。萬一にも此の天の生命を破らんとするものあらば其れは佛教であれキリスト教であれ魔説である。

「眞澄の結靈」といふことが、どうも腹に入らない人がある。ムスビが鎮魂によつて澄み切ればマスミだとか、ムスビが解消すればマスミだとか考へて居る人がある。大なる誤りである。ムスビが直ちにマスミなのである。だから「マスミのムスビ」と只だ一語に言ひ切つて居るのである。民族的の神が直ちに宇宙的の神なのである。

話を前へ戻す。素問の『百病は氣より生ず』といふ其の百病といふのは勿論萬病のことで一切の病氣といふ意味であるが、しかし實際問題としては嚴密な數字的に百種の病氣と解釋すれば安

常に近づいてくる。病氣の種類は幾百種あるか幾千種あるか知らんが、まあ昔から云つてるやうに四百四病と假定しておいて（此の四百四病は佛典から出たのであらう。）其の四百四病の中の百病だけが常人の氣より生ずと解釋すれば事實上妥當に近くなるのである。むろんこれは笑ふべき曲解であるが、曲解によつて正常に近づいてくる。萬病の四分の一位が氣から生ずるのである。併し氣から生じない四分の三の病氣でも氣の持ち方で若干輕快になつたり或ひは全快したりする場合もないではない。病氣ばかりではないのである。天行居信條の第十五にも、

うその笑ひもつゞけて行けばほんとの笑ひとなること、うその笑ひもつゞけて行けばほんとの喜びとなること、うその幸福も思ひつゞけて行けばほんとの幸福があらはれてくること、凡そ此等のことは神様の御言葉の中にある宇宙の神祕であります。

と示されてあるのを深く考へられるがよい。斯ういふことは天行居では十數年前來一貫して宣説して居るところである。いろ／＼の不幸なことを豫想することが大毒であることも申すまでもない。考へるといふことが即ち創造することであることは二千年前の佛典に於ても縱説横説して居るところである。……けれども實際問題としては實は此れも實現性は四分の一位のものなんだ。考へたつて他のムスピカタメが伴はなければ實現しないこともある、働かずに金を儲ける

ことばかり考へたつて儲からない。又た働いても運が伴はなければ儲からないこともある。

病氣の場合に天行居本部へ祈願して奇驗を蒙る人が近來ますます／＼多くなつて來た。主治醫が不思議がるやうな経過を辿つて感激される人が多くなつた。これは一たいどういふ理由であらうか。他の或種の神道團體や心靈學屋が考へるやうに病人の惡因縁が解除されるとか惡靈が退散するとかいふわけのものでは斷じてない。むろん右様のことも稀れにはある。稀れにあることが通則にはならぬ。

天行居では山上天啓第一「人の道をつくして神にたのめ」といふことを有らゆる場合の信條の根本として居る。だから病氣になれば大概の場合まづ醫者にかゝる。醫者にかゝつて人事をつくすと共に神祇の恩賴を蒙り救助されんことを祈願するのである。その祈願の内容を強ひて分析してみれば、どうぞ醫師が診察を誤らず其の投藥なり手術なりが正當でありますやうに、どうぞ病人の自然良能が充分に働きますやうに、どうぞ惡病を併發せず常人なり周圍の人たちが早く安心をすることの出來ますやうに、どうぞ病臥期間が短縮されますやうに……と云ふやうな意味に過ぎぬのである。だから此れは四分の一の「氣から起きた病ひ」の場合に限らず有らゆる場合の

病氣に靈驗を蒙るわけなのである。

X X X

「ますみの
むすび」

神の道は「むすび」の道だといふことをいつも説いてるのに「むすび」が直ちに「ますみ」ならば、神の道は「ますみ」の道といつてもよいではないか。……と云ふ人があるかも知れんが、「ますみのむすび」であつて「むすび」が直ちに「ますみ」ではあるが、それを「ますみ」と見ずして「むすび」と見て、正しく美はしく清く善き「むすび」にむすびかためる爲めに努力するのが我が神の道である。故に我が神道では修身齊家治國平天下のためにつとめるのが直ちに神の道の修行なのだ。何の奇もなく妙もなき平々凡々の神ながら言擧げせざる道だ。「ますみ」の道理を離れた境地に安住するのだ。「むすび」に因はれて居ては解脱が出来ないと思ふ人は「ますみのむすび」といふことが本當に躋落ちしてわかつて居らぬからだ。誰れも彼れも初めから解脱してゐるのにどうして改めて解脱することが出来るか。解脱といふ言葉に因はれるから大騒動が起るのだ。解脱させるといふことは始めから解脱して居ることを「知らしめる」ことをいふのだ。禪家などでも坐禪したり修行したりして解脱するのではないのだ。若しさういふものがあるならば天魔に魅せられてゐるのだ。大集經にも「無禪の禪を正禪と爲し、無脱の脱を正解脱と爲す」とわ

ざわざ書いてる通りだ。涅槃經には「如來常住無有變易、一切衆生悉有佛性」とあるが此の如來といふ字と佛性といふ字を神性といふ字にでも書きかへてみれば早わかりがするだらう。神性は常住にして變易あること無しだ。變易せぬものが迷ひにもならねば悟りにもならぬことはわかりきつたことではないか。どうして改めて解脱が出来るか。解脱といふのは人々の分別を度する爲めの假りの言葉なのだ。知つてみれば何でもないことだから「ますみのむすび」といふやうな道理も投げ棄てて了つて各自の分相應に修身齊家治國平天下の爲めに努力しさへすればよいのだ。そこに自らにして神ながらの道に合する妙道があるのだ。山上天啓第三に「みちを忘れてみちをふめ」とあるのもこんなことだらうと愚考する。「ますみのむすび」といふやうなことをかつぎあはるく間は問題にならぬ。そんなこと何一つ心遣ひなき身になる様にするのが吾等の修養である。今から十年前、私がまだ意氣軒昂の頃、南天棒會下の島田自照居士が時々喧嘩を吹きかけにやつてくる頃のこと。居士曰、「君の見解も一應悪いことはないが、併し佛法は微細ぢやぞ。修行が大切だ。古人が骨折つたのは何のためだ。五十二位もあるぞ。天然の釋迦自然の彌勒はないぞ。胡椒丸呑みは許さぬぞ。」とぬかした。「外に求むるところ無く内に得るところ無しと云ふのが釋迦の身代限りだ。南天棒が君のやうなものを印可したのは不思議千萬だ。南天棒へ三十年もついで

居てそれだけのことを覚え込んだか。」と云つたら居士も俄かに笑つて窮した。併し私どもは日常左右の境界が丸で物になつて居らぬが其處になると自照居士の如きは實に脱洒自在であつた。修行が大切だ。

脱洒自在にやれるのは、劍術使ひが劍術を使ふやうなものである。わかりますか。

世間の多くの人は、多年霜雪辛苦して禪學の修行でもして悟りを開いた人は妄想もなく煩惱もない普通人と異なるバケモノか何かのやうに考へてゐるが此れが大間違ひである。妄想も煩惱も依然としてあるので泣きもすれば笑ひもする。いかに大悟大徹して居ても識の滅度を経ざる限り暑さにも負ければ寒さにも負けるのである。たゞ其の妄想や煩惱に囚はれないだけの話である。原坦山の如きも廻天だの風外だのいふ一筋縄で行かぬ連中から印可證明せられ、又た律部等も苦修した後に於て書いたものにも『余弱冠にして出家し深く禪學に盡力し、禪教諸師に隨つて佛教の方法を受傳し、定慧を兼修し、自ら證契と認め、諸師の印證を得るもの數回、而して自ら心地を觀察するに煩惱謙依然、妄動心依然、念想心依然』云々と明記してある。これが本當のことである。坦山のやうに正直にない野狐の類が妄想も煩惱もないやうな顔をしてるだけの話である。さうではないぞ。俺は大悟大徹して妄想はないぞ。」といふものがあるなら掌上に一分間だけ炭火

を置いて試験するに限る。生きながら火定に入つたりする者も稀れにはあるが其れは魔道だ。敵から追ひつめられて平然として火中に神變を示した昔の或る和尚たちは魔業ではない。えらい。これは識の剛健の徳。ルーテルだつたか知らん、火中に拳を突き入れて黒ずむのを見て、『吾れは宗教改革者たる資格あり。』と叫んで立ち、それから運動を起したといふことだが、それが作話でないならば少しキチガヒじみては居るが此れも識の剛健の徳である。やまと心だ。燒鎌の利鎌の心だ。心頭を滅却するに非ず、心頭を白熱化したのだ。明法天皇御製『事しあらば火にも水にも入りなむと思ふがやがてやまとだましひ』

X X X

自照居士、なか／＼學問もあり健筆でもあり、又た書も一寸上手だつた。山口縣廣島縣及び秋田縣あたりの宿屋の額などには自照居士の書をみることもある。先年天行居で煩つて居た『眞宗滅却論』も自照居士が變名で執筆したのだ。斗酒辭せず、談論風發、米國やハワイあたりでも随分あらびたものだ。人間遊戯六十年、數年前岩國で屍解した。

念のために言ふが私は禪をやつたものでもなく禪を説くものでもない。第一私共の神祇觀と禪の佛身觀とは必ずしも同一と云へぬ。又た禪は有神論でもなく無神論でもない。私は神道人であ

り神道の傳道者である。——或る禪學者が禪を汎神論的に説いて公案の解釋もしてるといふ話だが問題にならぬ。禪はそんなものではない。『現所即心、別の心體無し』と徹見するのが禪だ。禪寺の和尚さんで、ひそかに阿彌陀様を拜んで後生を願つてゐる人もあるといふ話だが、便利な世の中になつたものだ。

X X X

ますみのむすびといふことを徹底して考へると善も悪もないではないか。天行居では理窟抜きに日々小善を積むことをすゝめて居るが、善とは何だといふ人があるかも知れん。それだから神の道はムスピの道であるといふのである。

善とは何ぞやといふことを哲學的に考へると甚だ六かしくなる。けれども大概に於て誰でも善と思ふ事が善であり誰でも悪と思ふことが悪であり、むつかしく考へる必要はないのである。稀れには善か悪かと惑ふこともあるが、その稀れにあることを考へて居るよりも何も考へずに善と思ふことを行へば其れでよいのである。有相だの無相だの考へるにも及ばぬことである。實際問題として私共のやうな凡俗には善か悪か判断に苦しむことが稀れにはある。私の経験の一つを語れば今から十年前、少々の小使錢位は融通のつく時代のこと、或人から援助を求めら

れた。ところが其人は甚だ感心しない人で各方面に對して誠意がなく、ベテンとインチキと駈引ばかりやつてゐる人であつた。それで私が彼れを多少とも援助すれば彼れの悪を増長せしむる結果となることは見え透いて居た。其際一切取り合はず嚴肅に人生を見つめさせ、反省させた方がよいと考へた。けれども彼れが窮して居ることも事實であつた。それで一寸判断に迷うたことがあつたが、斯ういふことは常にあることではあるまい。大概の場合、吾々凡俗にも善惡是非の判断は困難でない。萬事神ながらにするのが善であり、神ながらにしないのが不善であらう。神ながらにするとは天の理に順ふことである。佛教では本業瓔珞經に『理に順じて心を起すを善といふ』とある。同じやうなことであらう。大善を行ふといふことは其の機會が容易に得られないから日々小善を積んで行くやうに心がけたいものである。無相だの有相だの閑言語を弄しても此外に人間の命脈は斷じて無さ。

(昭和十年六月一日)

神道一家言 (六)

天行居同志
の人々

天行居の同志には種々の階級の人があり、其の入信の動機とか経路とかいふものも色々であり、いづれを尊しとし、いづれを尊からずと區別することは吾々凡人では困難であるが、兎に角近ごろ着實な真面目な求道者が信仰界の巡禮に努力せられた最後の歸着點として天行居を認められるやうになつたことは當然のこととは云へ有難いと思ふ。今その一二の例を申さう。

小野温翁

岡山縣淺口郡に小野温翁といふ御方がある。今年七十五歳である。幼少の頃から敬神崇祖の空氣の中に育たれたが、やがて基督教新教を學ばれ、轉じて天主教に移られ數年間傳道師として研究を積まれ、後に攝津箕尾山奥勝尾寺龍臥密算師に就て眞言及び禪をやられること數年、下山後は神道研究に志され、黒住教、御嶽教、實任教、神習教、天理教等を遍歴せられた。小野翁の書翰には此間のことを「黒住教の外は何等研究すべき資料無く所謂淫祠邪教に非ざるなきかを疑はしめ候、ひとり黒住教は其の教祖の偉大なる神格と達見とは敬服尊信致し候、而して黒住教内には教祖の法燈を認識する明ある者殆んど無之、道を論じ教祖の衣鉢を研究せんとする篤志家無

く凡俗の多種蠢動せるのみを見て呆れ、此れも亦た數年にして退却致候」と書いて居られる。それから世間の所謂不思議の祈禱者と稱するものを聞けば道程の遠近費用の多少を問はず必ず訪問し辭を卑くし禮を厚くして其輩の膝下に叩頭教を乞はれたるもの多年、其間多額の金錢を拂ひて所謂祕事口傳を受くるに至りて呆然自失せられ、明治三十四年頃には東京本郷千駄木町に宗教比較研究所を設置せられたこともある。明治三十九年老子一卷をふところにして帝都を去られ河内金剛山に入られ其の山腹千早村の幽谷に草庵を結び數年間默想生活を送られたといふ熱心な求道者である。明治二十五年には廣島で中國と題する日刊新聞を發行（主筆長井金風氏）されたこともあり明治三十年には東京築地の國光社に入られ雑誌「國光」及び「女鑑」の編輯を宰せられ國體明徴の爲めに努力せられた。近年は天行居の同志となられ靜かに道福を悦んで居られるやうである。全國同志諸君の中には此の小野翁のやうな態度で道を辿つて來られた御方も各地に隠れて居られるやうである。

X X X

杉森暢男氏

福岡縣八女郡に杉森暢男氏といふ御方が居られる。最初は基督教の研究に着手せられ受洗まで進まれ、後に久留米の梅林寺に參禪せられ相當に骨を折られ、其後又た内村鑑三氏の説に動かさ

れて無教會式のクリスチャンとして精進せられ、やがて寛博士の神道説に共鳴せられ同博士新舊著書全部精讀、博士の主張は餘り學究的にて信仰の一點に於て不満の感あり、折柄川面凡兒先生の教義にふれ小生の神道に對する情操信念は一大飛躍を爲し稜威會員として朝夕神前の禮拜も勤修、其後信念冷却、東京淺草觀音會の會員ともなり觀音經の讀誦も随分長年月にわたり云々と申して居られ川面先生の著書の如きも新舊約聖書を精研せられた頃と同様の熱と努力とを以て多年反覆章編三絶といふ位に刻意勉強せられたやうであるが遂に天行居に『魂ひの家郷』を發見せられた。同志に加入せられたのは今春であるが天行居の有らゆる出版物は十數年前來引きつゝいて研究せられ、或ひは疑ひ或ひは信じて遂に入信せられたので、まことに眞劍な尊い御努力であつたと思ふ。この杉森氏のやうな風な御方も随分各地に居られるやうである。

X X X X

新潟縣に堀内秋布といふ御方がある。元來神道の家に生れられたのであるが、周圍の事情から自然的にキリスト教の熱心な信者となられ、やがて或る動機から禪をやらせられ、更らに淨土眞宗の法悦から眞言宗の學問的研究に移られ、更らに日蓮宗の研究に最も精力を費され、田中智學氏一派の著書を特に精研せられ、大いに得られるところもあつたらしいが一念三千の極所にどうして

も満足が得られず、折から縁あつて天行居の出版物を讀まれ「ますみのむすび」の神理によつて大悟せられ、驚いて恰かも數十年間の紛失物を發見せられた如く直ちに本年六月の石城山修齋會に参加せられ、舊友宮里靜輝氏の紹介で私の草庵も一寸訪問せられたが、靜かな物ごしの中にも輝かしい悦びが溢れて居た。私は斯うした道友諸家のために毎に啓發せしめられ修養せしめられて居るのである。

X X X X

某地に〇〇氏といふ御方がある。今日の日本を救ふ本當の力として天行居の信念内容を確認せられ、天行居精神普及の便利のために最近は氏の收入の半減する或る方面に轉職して目下御活動の準備中である。其の相談役として協力されて居る御方に官幣大社〇〇〇の要地に居られる御方もある。又た某々二支部も其の大運動のブロックに聯携動作を執るべく研究中らしいのである。此の〇〇氏は去る八月十二日一寸御來訪下さる約束であつたが私が病臥した爲め失禮したが後日いくらもお目にかゝる機會ありと信じて居る。此の〇〇氏の如き純眞な行動はナマやさしい信念では出来ることでない。従前の御職務は多年の努力で築き上げられたもので其の周圍の信頼も日に厚く實に惜しい立場を去つて、天行居精神普及の便利上收入の半減する或る方面の地位に轉せ

られるといふやうなことは、獨身者ならば兎も角御家族のある御方としては容易なことではない。近來同志諸君の態度が斯くの如く段々眞劍で實踐實行的となりつゝあることは御神慮ではあらうが恐ろしくも有難いことである。

堀内秋布氏に限つたわけではなく『ますみのむすび』の神理は天行居同志諸君——少くとも其の大部分の方々——の常識となつて居る筈ではあるが、その徹見の程度が各自各様ではあるまいかと思ふ。『ますかゞみむすびのかげをやどせども 　むすびのかげもますみなりけり』といふ先年の私の歌が拙劣な爲めにかどうも『ますみ』といふものと『むすび』といふものを引き離して對照的に考へられるやうな傾向の人があるのは甚だ残念だ。ますみといふ言葉とむすびといふ言葉とは同言だといふことを私は先年來力説して居るつもりである。

ま = す
す = み
む = び

だから『ますみのむすび』と只だ一言に言ひ切つて居るので、そのことを能く咬破して貰はぬと私も浮ばれないのである。然るにますみの世界とむすびの世界とを兩面の如く眺めて佛教哲學

の本體界と現象界との如くに眺めようとせられる人があるので、私の氣もちを本當に知つて頂けないかに危ぶまれるのは私のヒガミであらう乎。私の云ふ『ますみのむすび』を本當に手に入れて頂けば石頭の參同契や洞山の五位なんぞ手数のかゝるものは問題でない筈だ。

我が古傳によれば古事記首章に、

天地初發の時、高天原に成りませる神の御名は天之御名主神、次に高御產巢日神、次に神產巢日神、此の三柱の神は、みな獨り神成りままして隱身を治めしき

とある。「治」の字を入れたのは釋紀に引ける大倭本紀によつたもので此の條は私は數田年治翁の主張を正しいと思ふ。この古事記首章の一節は言外に『ますみのむすび』の神理を啓示せる地上至大至玄の讚嘆に絶したる大神言である。事理不二の神祕を神ながら言擧げせざる國ぶりに奇しくも言ひ傳へられたもので、坦々として何の妙もなきやうに書かれてあるが、百千卷の經文も及ばぬ大神言である。一面に於ては大神界根本組織が説かれてあると同時に『ますみのむすび』なる宇宙根本神理が暗示されてあるのである。

沖先生によつて傳へられた太古神法も實は此の神傳に關するものである。中川宗主は去る七月

上旬或る研究を一冊子に書きまとめられて私に示された。それは私の未だ中川先生にはお話しして居らなかつたもので、神傳に基づいて私が多年研究したところと一致するのみならず私の未だ思ひ及ばなかつたこともあり、私は大いに驚かされたが、何分にも發表の出来ぬ内容のものなので同志諸君に御披露の出来ないことは残念な氣もするが併しこれはどうも致し方ない。中川先生の御研究も太古神法の一部に觸れたといふだけではあるが、高等數學的な方面からの人間の思考力といふものも神祕の域に或る程度まで出入し得るものといふことを泌々と感じた。

X X X

古事記偽書説の取るに足らぬことは、從來屢説するところである。もとより古事記には古寫本は傳はつて居らぬ。一番古いのが、名古屋市眞福寺寶生院所傳のもので、世に眞福寺本といふのが其れであるが、それだつて應安年間に僧侶の筆寫したもので僅かに五百餘年前のものである。書紀の如きは奈良朝時代と認むべき古いものもあるが古事記に古いものがないのは遺憾であるが、眞偽は其の内容の研究と時代の背景の研究によつて分明となるものである。先年某誌に古事記偽書説を八ヶ條の理由により主張された人もあるが、其れは吾々の考へから云へば正確な根據のあるものとは認めにくい。

古事記偽書説は江戸時代の沼田順義あたりが開祖であらう。又た天之御中主神は人民の祖であり皇室の祖は國常立尊であるといふ見地から書紀の傳を重んじ古事記を斥けんとする學者も昔からあつて、大いに世人を惑はしつゝあるが、天之御中主神が人民の祖だとか皇室の祖は國常立尊であるとかの説は全くのドグマであつて、どこにそんな學問的根據があるの乎。獨斷的な假設の上に立てられた種々の妄想が相當に論議されて居ることは不思議な位である。但し誤解を避けるためにいつておくが、私は決して書紀を輕んずるものではない。只だ神代系譜等の所傳は古事記の方が純真なものであると主張する迄のことである。古事記と書紀との關係に就ての愚見は何れ後日申上げて同志諸君の御指教を仰ぎたいと考へて居る。

上代の古文書類が異體の古字も混り難解で且つ誤寫等も多かつたことは欽明紀二年の條の註などによつても窺知することが出来るであらう。そこで天武天皇が斯かる難讀難解の古文書を神代阿禮に誦習せしめられ、それを元明天皇が安麻呂をして書き寫さしめられたものが古事記である。故に古事記も完璧なものでないことは勿論だが重大事項は古傳のまゝに傳へられた點が多いと認めるのが穩當な態度ではあるまいか。古事記の記述には或る政治的意圖などは全然含まれて居ないものと私は考へざるを得ない。阿禮や安麻呂を祀つた神社は草茫々として殆ど人の訪ふも

のもないが、下級官吏であつたにもせよ其の功績は日本國民の忘れてならぬものと思ふ。古事記が後世中臣氏の人々によつて書かれたといふやうな説も問題にならぬ。古事記は必ずしも中臣氏に有利な文獻ではないのである。又た古事記の文章が慥かに奈良朝を下らないことも一二の専門學者が指摘して居る通りである。

一寸此處で又た思ひついたから念の爲めに云つておくが、齋主中川先生副齋主長鹽先生に對しては數ヶ月間にわたつて沖先生所傳太古神法の秘事相傳を殆ど完了した。中川先生及び長鹽先生は天行居の如何なる重要神事をも司宰せらるゝに何等缺くるところなき資格を有せられることになつた。私も今度は沈着な氣分で堀先生所傳の關係書類等も直接に御覽を願つて正則的に相傳を終りかけて居るので安らかな氣分になることが出来た。もつとも未だ尙ほ私だけであづかつて居る神法が一二無ではないが其れは時節が到來せぬと私の考へだけでは責任の重壓感から自己を解放するわけに行かぬ。但し此の一件に關する限り私心は絶対に無い。私心から云へば一日も早く徹底的に安らかな氣分になりたいのみだ。併し其の時期は必ず此處數年内に到來するであらう。

話を本筋へ戻して……さて古事記首章の記事を假りに私の曲解妄見として其れは「ますみのむすび」といふことには何の關係もないとしたところで差支はない。古事記上巻全體の記事が「ますみのむすび」の神理を表現して居るからである。併し私は飽くまで古事記首章の記事は根本神界の組織生成を語ると同時に「ますみのむすび」の神理を明らかに言挙げせず示されたものと確信して居る。假りに古文獻に「ますみのむすび」の據りどころなしとしたところで、「ますみのむすび」の神理そのものには何の打撃でもない。古文獻に電氣學の知識が明示してないとしても吾々は今日電氣學の所説を承認し其の應用の實際を承認せざるを得ぬやうに「ますみのむすび」の神理が萬々一にも古文獻に無關係としても其れは古文獻に無關係であつて古意に無關係と斷することは出来ぬ。又た萬々一古意に無關係であつても「ますみのむすび」の神理そのものが動搖はせぬ。併し我が神典古事記は幸ひにも「ますみのむすび」の神理を語り傳へたものと私は信じて疑はぬ。このことに就ては數年前にも稍や詳説したつもりであるが尙又た今後折にふれては愚見を申上げてみたいと期して居る。

X X X X X

高御産巢日神、神産巢日神は天地八百萬神と顯現し玉うたのである。而して其の中心の大神が天照大御神である。高御産巢日神、神産巢日神は天之御中主神の顯現である。故に我が神道は一神教と云へば一神教と云ひ得られるのである。一神教と云はず多神教と云はざるは神ながら言擧げせざる道である。天地八百萬神の存在を強く認識するところに神道の特色がある。神道は「むすびの道」だからである。悪平等主義でなく、理窟に囚はれず、哲學的遊戯を夢想せず、現實を重んずる「むすびの道」が神の道である。

天之御中主神は萬神萬物と顯現したまへるも其の神の中の神として神の王としての顯現は天照大御神である。天照大御神は大日本天皇の祖神であり、大日本天皇は天照大御神の正統である。以上は吾等の信仰の根本である。これは理論でなく神界の實相が正にこの通りになつて居るのである。

科學の躍進によつて物質の本體は非物質的存在なることが證明せられた。吾等の居住する此の家屋も非物質的存在に過ぎない。けれども吾等は家屋を必要とする。大工氏の存在も認める。左官氏の存在も認める。それが神の道であり、「むすびの道」である。たかみむすび、かみむすびの道である。「ますみ」の哲學的妄想に囚はれて味噌と或物を混同するやうなことは神の道ではな

い。人間の仲間にも神ながらなる尊卑もあり上下前後もあり禮儀もあり作法もある。

しかし一切の「むすび」なるものは直ちに是れ即ち「ますみのむすび」なることを知る。そこに煩惱の解放があり、靈魂の解脱があり、自由があり、修養があり、向上がある。「ますみのむすび」の覺悟は直ちに「神たる我れ」の自覺である。神の子など云ふ手數のかゝる問題ではない。併し實際として「神たるわれ」が額面通りに一寸通用しかねるので其處に信仰も修養も必要となる。

何故に私共は「神たる我れ」の額面通りに通用しないのであるか。手ツ取り早く言へば世界のムシコラシ（宇宙生成）の作用の當然の結果なので、其處に又た藝術もあれば色々の生活の面白味もあるのである。人間は如何にして生き、いかにして存続するか。飲食物の攝取には必然排泄といふことも作ふ。夫婦のある神わざも神聖と云へば神聖であるけれども、どうも。

X X X

地上の岩戸びらきが出來て平和な美しい新天新地が打開されても、人間に一事無しとは云へぬ。相變らず男女間の葛藤等も相應にあり得るものと思ふ。だから其他の問題も起り得るわけである。併し其れでよいのであらう。若しも地上の人類が一人の例外無く皆な地藏菩薩のやうなら

ば、平和は平和だが人間生活に一事無く、此の地上世界は生きながら死滅したも同様である。さういふ世界が神の經綸の目標であらう筈はない。

『神たる我れ』の額面通りに通用を希望するのは人間のわがまゝである。私共のやうに額面の二割か三割の相場も心細いが、まあ六割か七割に通用するやう修養が出来れば甲の上であらう。地上の岩戸びらきが出来たならば地上人間の平均相場をセメて今日の二倍以上には引上げて貰ひたいものである。

天之御中主
神の大神徳

天之御中主神の無邊の大神徳といふものは言擧げし得られるものではない。併し稍や其の鬚髯を想像せしめるものに中山玉櫃經といふ支那の仙書がある。これは佛意を以て書かれた書ではあるが、その太一眞君（天之御中主神）に關する一節は太古眞傳が混入して居るのであると水位先生も言つて居られるから其處だけ讀んでみる。

夫レ太一眞君ハ是レ北極太和ノ元氣ノ神ナリ、神通變化ハ北極紫微宮ヨリ天地間ヲ經過シ萬物ヲ滋育ス、天ニ在テハ則チ五象明カナリ、地ニ在テハ則チ草木生ズ、人ニ在テハ則チ神識靈ナリ焉、鑿ニ在テハ五行察ス焉、化ニ在テハ四運變ズ、之ヲ聽ケドモ聞エズ、之ヲ視レド

モ見エズ、之ヲ搏レドモ得ズ、無形無狀ニシテ萬物ト狀ヲ作ス、故ニ之ヲ玄ト謂ヒ、之ヲ象ト謂フ、感ズルトコロ應ゼザル無ク、眞ニスルトコロハ證セザル無シ、專ニスルトコロハ用ヒザル無ク、精ニスルトコロハ動ゼザル無シ、（中略）眞正ヲ以テ玄關ト爲シ專精ヲ以テ要路ト爲セバ、此ニ倚ル者ハ通ゼザルトコロ無シ

水位先生の説の如く此れは太古眞傳が混入して居るものであらう。この至大無外至小無内靈妙不思議の大神徳は計量することが出来ず差別の觀をゆるさない、即ち眞澄の大靈徳で言語思料を絶して居る。しかも眞澄にして産靈の徳があるからタカミムスビ、カミムスビと顯現し給ひ又た萬神萬物とも顯現し給ふのである。即ち何も彼も『ますみのむすび』なのである。而して少くとも我が太陽系の世界に關する限り其の八百萬大神界の統制者として天之御中主神が顯現し給へるもの即ち天照大御神である。天照大御神は地上正統一君の大祖として神集岳（高天原）大永宮にましまし、その正統一君が大日本天皇であらせられる。

日本國の神社に天之御中主神を祀つた神社が少いことをいふかる學者もあるが、天照大御神を讚仰敬拜することは直ちに天之御中主神を拜むことを意味するのである。白人の學者で日本の神道を研究し、幼稚低級な多神教だとするものがあると、日本の學者までが尻馬に乗つて、そんな

り候」と云ひ、白隠は「病中にしぬいた修鍊こそは如何なる場合にも退轉あるべからず」と云つた。支那や西洋の哲人なども同様の意味のことを云つてゐるのが多い。

閑話休題。来る十一月一日には又た天行神軍(現在改)の山上修法が執行される。國體明徴徹底祈願と天關打開促進祈願とが目的である。参加士官(現在博士)の人数の多きは必ずしも望まず、願ふところは参加士官一同の意氣信念の純誠無雜ならんことである。

國體明徴といふことは今春の議會で菊池男が發言せられて以來始めて問題になつたやうに思つて居る人もあるやうだが、天皇機關説排撃の正論を強調した學者は二三十年前からある。加藤博士の如きも其の一人だ。明治四十何年かの『早稻田學報』に皮肉にも加藤博士の同郷の辯護士齋藤隆夫氏が機關説に迷つて博士に喰つてかゝつてゐるのを讀んだ記憶もある。其の時代には加藤博士等の正論は學界から殆ど支持されず、世間の注意も惹かなかつたのである。然るに二三十年後の今日、加藤博士の正論は始めて天下の認識するところとなつた。

天行居が或る行動を開始して以來十四年。山上神殿御鎮座以來滿六年。天行居の同志諸君が全國で「むすびの時」の神咒を唱へ出して以來五年。わが國土の靈氣も色々の意味に於て大いに變

つて來た。常識的には判斷のつかぬほど神祕的な大奇蹟であるが、小奇蹟は世人を驚かし喝采を博するも、大奇蹟は却て世人の認識に入らない。併し吾々天行居同志の本當の仕事は今後にあるのである。

實を云へば今春來の我國上下の國體明徴運動も徹底して居るとは云へない。これを内外上下幽顯に對して徹底せしめねばならぬ。又た吾々の信念から云へば國家起源論の正しき認識にまで徹底せしめねばならぬのであるが、……即ち國體明徴から國本明徴にまで徹底せしめねばならぬのであるが、先づ當面の問題として、せめて今春來我國朝野の認識の範圍内にある國體明徴の意義だけでも徹底せしめねばならぬ。美濃部博士の著書が古本屋で賣物的に賣買されてゐる今日ありさまを以て政府當路者も努力を怠つては相濟むまい。とにかく吾々としては靈的方面から爲すべきことを爲さねばならぬ。

天關打開促進の方も大分押しが利いて來たから今後は本腰で頑張らねばならぬ。「靜觀」といふことは落伍の一步前だから同志諸君も種々の人事的感情に靈性を眩まざるゝことなく、「人は人、吾れは吾れ」で自分は自分だけの節操ある信念を守り、徒らに過去を顧みず未來を打算せず方今直下爲すべきことを爲さるべきであらう。群魔死物狂ひで巧妙に天行居を襲ひつゝあるのであ

るから立派な同志だけが狙はれ易い傾向もあるやうだからお互ひに氣をつけ合つて協調的に集團道徳を特に守つて行かねばならぬ。種々の認識を新たにし是正して寛容の美德を以て成るべく平和に他者を落伍させず自己も落伍せぬやうに心がけて行きたいものである。落伍一步前の危機から轉身して悪夢が醒めたやうな朗らかな氣分で信仰に精進する人もあるが、さういふ御方の爲めには一時信仰上の危機に立たれることも結構なことだ。それは却て靈性の一大飛躍の機會をひそかに神から恵まれた人だからである。一時胃病に罹つて全快した人の食物に對する快感は一度も胃病をやらない人にはわからないのだ。何も彼も有難い。さういふ危機に立つ人は神の恩寵が格別なのである場合が多いであらう。弓を引きしぼることが強ければ強いだけ箭は高く達することが出来る。但だ用心しなければならぬのは弓を引きしぼつて弓を折らさないことだ。弓が折れては箭は一尺も飛ばない。どんな正々堂々たる理論がそれを文らうとしても駄目だ。又た弓を引きしぼつたままで餘りに長年月其の儘であると弓が反撥力を失ふ場合もあるであらう。胃病も何十年も續くのは閉口だ。弓を折らすか折らさないかの責任は自己に在るのだから神の試煉を怨むのは當らない。然らば如何にして美はしく朗らかな信仰力を更生せしめ得るか、何が其の秘機か。それは多くの場合只だ或る自己の感情——たとひ正しいと思ふ理性が承認する如く見ゆる感

情でも——を克服し得るや否やの一點にあるのである。心機一轉して周圍を善意と美はしい愛とを以て眺め始めると、春の曙のやうな天地が忽ち其人を抱擁するのだ。惚れた慾目にや菊石も笑凹といふこともあるが、其の反對に何彼のことだ「あいつはケンからぬ」と思ひ込むと其人が誠意を以てやつてることまで一々邪惡に見えてくることもある。それが天行居同志としては最も危険なことだ。さういふことは心機一轉すれば又た正しく見えるやうになるものである。併し實際に黒くなつたものをいつまでも白く見られよと申すのではない。實際に黒くなつたものは黒く見るより仕方はない。

ゆるすべからざるをゆるし、忍ぶ可らざるを忍びて以て他者を救ひ、以て自己を救ふことが出来たとすれば、何と尊いことではあるまいか。或者が「何が大力か」と問うたら釋迦は「忍が大力だ」と答へたといふ話だが、なるほど忍の威力ほど大なるものはあるまい。外科手術で病氣を治すことも場合によつて結構だが、外科手術によらずして其れが出来る場合に尙ほ外科手術を用ひようとするのは面白くあるまい。

なるほど忍の威力ほど偉大にして且つ神祕力あるものはあるまい。忍を克く守り得るならば愚者も智者たり得る。不徳者も徳者たり得る。なぜならば忍は敵をも味方とし得るし、苦をも樂と